川柳塔

平成二年一月一日発行（毎月一日発行）
平成元年十二月十五日　印刷
創刊大正十三年　通巻七五二号



日川協加盟

No.752

同人特集・私の一句

一月号

平成二年

新春おめでとう会

日　時　1月15日（祝）午後1時開会

会　場　大成閣（和室）

大阪市南区大宝寺町中之町二六

（心斎橋大丸とそごうの間を東へ約百米）

電話　06（271）5230

挨　拶　西尾　栞

句　会

兼題「ポーズ」　河内　月子選

「馬」　阿萬　萬的選

懇親宴

会　費　六千円

川柳塔恒例の新春行事です。同人・誌友を問わず、多数ご参加下さいますようお待ちしています。

川柳塔社

NHK学園川柳近畿大会

日　時　平成2年2月18日（日）午後1時

会　場　河内長野市

市民センター・ノバティホール

河内長野市長野町5番1―302

（近鉄南大阪線河内長野駅前）

宿　題（事前投句）と選者

①「近　い」　板尾　岳人選

②「食べる」　中田たつお選

③「坂」　西尾　栞選

席　題　選者＝堀口北斗・亀山恭太

（宿・席題とも各題2句）

講　演　橋高　薫風

◇事前投句締切　1月22日必着

◇投句先

〒186-10　国立市富士見台2―36

NHK学園川柳センター

川柳近畿大会事務局

◇投句料　一、六〇〇円（作品集代を含む）

《参加要領》

◇大会へ参加希望の方はご自分の住所氏名の宛先を書いた返信用ハガキを同封して下さい

◇事前投句は、普通の便箋、またはこれと同じ大きさの用紙二枚を、いずれも真中にタテの線を引き、一枚目の右半分に郵便番号、住所氏名（ふりがな）電話番号、NHK学園川柳講座受講者の方は受講番号、大会への出欠を書き、一枚目の左半分に宿題①の作品、二枚目の右半分に宿題②の作品、左半分に宿題③の作品を、それぞれ二句記入して下さい。

賀新春

西尾　栞

謹んで新年のお慶びを申上げます
今年は素直に申上げることが出来て何よりです
昨年は皆様のご協力を得て　高野山に碑を建立することが出来ましてご同慶の至りでございました
今年の願いは麻生路郎先生の句碑を阿部野神社に建立することであります　何卒よろしくこれまたご協力の程お願い申上げます
平成二年一月一日
お蔭さまにて私も、満八十一歳を迎えました。荘子の言に、「寿(イノチ)ながければ辱多し」という一節があります。

ある人が聖人の堯に、「長寿」と「富」と「男子の多いこと」を祈ってやろうと申し出た。すると堯は即座に、之を断って言った。
「男子多ケレバ即チ懼レ多シ、富メバ即チ事多シ、寿(イノチ)ナガケレバ即チ辱多シ、コノ三者ハ徳を養ウユエンニアラザルナリ」
これを聞いてある人は言った。
「今まで私は貴方を聖人と思っていたが、見損った。男子が多ければ、それぞれに職を持たせてやればよい。富が多ければ人に分けてやればよい。命長ければ気ままに生き、それでもあきたら仙人になって昇天すればよい」
これは荘子の天地篇に出ている説話である。
「ある人」は、荘子の分身であり、「人はこざかしきを捨て自然の摂理に従い自由に生きよ」と教えている。このうち、「寿ながければ」の一句は、「徒然草」に収められていて、殊に名高い兼好法師は、次のように記している。
「命あるものを見るに人ばかり久しきはなし。かげろふの夕べを待ち夏の蟬の春秋を知らぬものもあるぞかし。つくづくと一年をくらすほどだにも、こよなのどけしや、あかず惜しと思はば千年をすごすとも、一夜の夢の心地こそせめ、住み果てぬ世に、みにくき姿を待ちえて何かはせん、命長ければ辱多し、長くとも四十(よそじ)にたらぬほどにて死なんこそめやすかるべけれ(無難であろう)」
ここでは、堯の「修徳の理」が、荘子の「自然順応主義」もともに彼方に押しやられ、ひたすら作者の「仏教的無常観」がうたいあげられている。それは華麗な言葉によっていろどられ、紅葉の錦のように唯美的でさえある。長寿八十歳を云々する今日、四十路は早すぎる。六十路がめやすかるべけれと思う。

座右の句
降る雪に貧しきものが先ず隠れ　（薫　風）

私の句
眼裏に遠いねぶたの灯がゆらぐ　秋元てる

川柳塔　一月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

賀新春……西尾　栞…（1）
「いのちある句」を……阿萬萬的…（2）
川柳塔（同人吟）……西尾　栞選…（4）
自選集……（32）
■川柳太平記(140)　川柳の群像　藤島茶六……東野大八…（36）
■連載　柳籠裏三編研究（二丁）……（38）
〈同人特集〉私の一句……（40）
水煙抄……黒川紫香選…（54）
秀句鑑賞「同人吟……黒川紫香…（83）
　水煙抄……高橋千万子…（83）
銀河系……河内天笑選…（74）
■女性コーナー　茴香の花……八木千代選…（78）
平成元年度　愛染帖賞受賞作品……（80）
平成元年度　茴香の花賞受賞作品……（81）

「いのちある句」を

阿萬萬的



平成二年、明けましておめでとうございます。今年は一白水星の午の年です。実は私の当り年でもあるのです。十干十二支の方は、還暦としてお祝いするのですが、こちらの方は何もなさそうです。

平成と年号が変って新年を迎えるのは、はじめてのことであり、今月号に発表されている本社句会の平成元年度皆出席者のお名前も記念すべきことで、ほんとうにおめでとうございます。おそらく各地の句会でもそうでしょうが、年間の皆出席となると、川柳に対する熱意はもとよりのことですが、意欲だけでは、その成果は得られなかったはずです。それには熱意のほかに、自分はもちろんのこと家族みんなの健康が支えてくれてこそ、達成されたものであり、心からお喜び申し上げたいと思います。

それにつけても生前、路郎先生が言っておられた「いい句悪い句は、体の調子にもよる。天候が悪ければ、飛行機も飛ばない」との言

受賞のことば　八木千代・西口いわゑ……（82）
「始まる」……藤井一二三選……（96）
一路集「逢　う」……宮崎シマ子選……（96）
「　玉　」……青枝鉄治選……（97）
初歩教室「和　服」……辻　白渓子……（98）
川柳塔碑の建立に思う……（100）
　中島小石・野田素身郎・小出智子・工藤甲吉・野村太茂津・内海幸生
高橋操子さんのこと……岩佐ダン吉……（103）
■ずいそう　神馬白雪号……西尾　栞……（104）
じげおこしキャラバン川柳塔鹿野みか月の記念句会を訪問……（106）
本社十二月句会……（108）
柳界展望……（107）
■各地句会だより　京都塔の会……都倉求芽……（127）
各地柳壇（佳句地十選／波多野五楽庵）……（128）
■一月各地句会案内……（139）
■編集後記　阿萬萬的・高杉鬼遊・田中正坊……（140）

座右の句

琴線に響かぬ依怙地アドバイス　（太茂津）

私の句

老友に会えば健康たずね合い

岩崎瑞穂

葉が思い出されてならないのです。

さて、私たちの川柳界もさることながら、世界の情勢も大きく変りつつあります。ソ連のゴルバチョフさんのペレストロイカに端を発した米ソの接近、東欧諸国の変革など。そしてこれらの国では、保守派と言えば社会主義のこととなって、私たちの日本とは全く逆の立場になってきました。

私たちの川柳界も平成二年から、三要素を忠実に守る保守派と、詩川柳と呼ばれる革新派がどういうぐあいに勢力範囲を広げて行くか、とても気になる年になりそうな気配がするのです。

だが私は、路郎先生の語録である「川柳は人間陶冶の詩である」と教えられてきましたので、句にはいつでも自分が現れていて、なおかつ自分の句でなければならないと思うのです。

私も月例句会などで次々と作句をしているものの、さてどれが本当の自分の句であるのかと考えたとき、少し淋しい気持がしてならないのは自分だけでしょうか。

新しい平成二年を迎えるに当り、私も自分自身の「いのちある句」を作るよう心がけたいと思いますので、みなさんもなおいっそう張り切ってくださり、次の年の新年に振り返ってみて悔いのないように、川柳塔とともにがんばってみようではありませんか。



竹原市　小島蘭幸

勤続の永さ自信につながらぬ
鬼も蛇もいつか友達にはなれる
イメージを一度こわしてから逢おう
真夜中にめしを食うほど若くない
灯に帰る冬には冬の貌をして
財布の中に私の干支を入れておく

熊本市　永田俊子

棗の実光ってゆれて降る童話
ためらわず行かねば私の日が暮れる
主流には乗れぬ男が書を愛す
菊人形が見上げる十一月三日の空
直立不動なら若い人に負けません
修羅の火をくぐって来ました壺の肌

松原市　小池しげお

四国参りまだ遺言を書いてない
梯子から落ちて見舞を笑わせる

西尾栞選

婦長さんの次の看護婦さんが好き
あいまいな男は好かぬ赤いバラ
神様も神主さんも酒が好き
待遇が良くって困る二階借り

堺市　中川滋雀

望外のよろこび初春をまた数え
雨の日は雨のこころを墨に磨る
何事もなかった朝の夫婦箸
アドリブで逃げる狸になってくる
赦されてからの背中が痒くなり
合鍵でつなぐ絆の嘘まこと

東大阪市　森下愛論

貴金属　女の夢は堕ちていく
星占い信じて女寡黙な日
貫禄が無いから素直な瞳になれず
それとなく借りて何んとなく使い
やんわりと言葉にごして断る気

度忘れか呆けかいのちが怖くなる　島根県　堀江正朗

えらくなった子の掌がぬくい久しぶり

雨の音　妻の耳から先にくる

記憶から消えていく雲浮かぶ雲

齢のせい眼のせいにして生きる箸

悪者になる盃でまるく済み

手の届く広さに悔いが多すぎる　堺市　高橋千万子

かたつむり秋の日暮れも宿たしか

いいくすりだったと損を口にせず

落葉踏みふみヒロイン思い出す散歩

流れ作業魂入れるおりがない

靴ずれに駅のホームの長いこと

もう寝よう何度も言って秋をよむ　松原市　谷垣史好

社会主義よりも昼寝のユートピア

死んでしまえばいい奴だった泥の河

カラヤンが死んで狐がおちました

四十五日間入院

時計コチコチ留守を守ってくれたのか

根無し草　退院の荷の片づかず

重量挙のごとくふとんを上げるなり　島根県　小砂白汀

春や春　雑木林のラブコール

手品師の種がこぼれてから売れぬ

こばんざめ自分も強いと思いこみ

保護色に頼りおのれを見失い

ひょっとこの面が突然欲しくなる

童貞のままでは神に叱られる　鳥取県　林露杖

太陽の愛咬痕か二日月

吾が肩も花野の涯も月に濡れ

透析の友は晴れやか天高し

大字と書けば古里喋りだす

輸入して吸いすぎるなという矛盾

食管法足を掬われ手を捥がれ　米子市　林瑞枝

柔かく脳を耕やし友と逢う

本職は問わぬ一座で愉快だね

いっ本のひなげしを抱く少年よ

運に乗るゆとりの椅子が温かい

振り向けば子育て時期が花だった

許そうと思う握手はモカの味　堺市　河内月子

お正月みんないい顔して座り

旅に出た息子を思う夜の風

うちの子を叱ってことが済むのなら

好きな事してる男の背の幅よ

珈琲も酒も適温　外は冬

他人様のお子を叱ったことがある
八尾市　高杉鬼遊

おめでとう相も変らぬにらみ鯛
怒りなはれ笑たら負けや消費税
年寄をだしに冷たい政治論
風ふけば風に刃向う風になる
間違いもよいところです女風呂
五年積立そんなにあなたもちますか
大阪市　西出楓楽

恋のパズルは解けない方がよいだろう
先生を神様ほどに思ってた
羽根布団人生軽くしてくれる
失敗を絵にしてしまうのは若さ
私の中の他人にいつも背かれる
メロン熟して自信と過信とり違え
米子市　林荒介

すり傷の数だけ強くなりました
影法師お前も齢を取り過ぎた
友達の水の溢れてくる葉書
森に住み森の掟を弁える
時効まで庇ってくれた傘を干す
指相撲　冬の楽器を笑わせる
藤井寺市　吉岡美房

カレンダー一杯もろて目出た過ぎ
手を握る外に術なし父看とる
何んで又　今頃出合う冬の蚊よ
突っぱって居って情けにけつまずき
風向きを見てからジョークだよジョークだよ
敗者復活そんな期待をしてしまう
尼崎市　春城武庫坊

マーキュリーの弓は日本に向いている
残照に似る人生を送りたし
ゴール外れたボール無心に高く跳ね
咲きおくれた花が目を引くこともある
六十路越え二人で探す青い鳥
回り道二人で着いた古希の丘
岡山県　嘉数兆代賀

聞き流すことも覚えた冬のバラ
自信喪失　神のうしろを従いていく
決心がついた落葉が風に舞い
まっすぐに歩けば天も地も味方
越えて七坂やがて私も地に還る
シナリオは神に任せてある平和
豊中市　安藤寿美子

川柳の碑が出来たぞと鳥が舞う
あの世でも遊ぶ所がある安堵
置物の木曽駒ひのきの香りする
夢ひろがる予算の枠はさておいて
雨の日は雨の色して煉瓦塀
ああ人間　母は生命を削っても
島根県　堀江芳子

無精などさせぬ隣は散髪屋

正朗で来る郵便のあたたかさ
故里の疼く舞妓のカレンダー
アイバンク決めて清しい秋の天
恋人の如く生きてく夫婦箸
魚屋の生まれで鰤のアラが好き

米子市　小西雄々

駄馬なりに果たせぬ夢を抱きつづけ
かまぼこの鯛が見上げるシャンデリア
正論へドンキホーテも駆け付ける
兄嫁に気兼ねオクターブを下げる
影武者がときどき違うサイン出す
別れても情けは残る冬木立

今治市　矢野佳雲

乗りかえのきかぬ男が錆びている
群集の一人になって顔がない
つき合いが下手でミノ虫独居する
青空を騙せる嘘が見付からぬ
ムード今一つベンチの端とはし
君少し動きすぎると山がいう

和歌山市　西山幸

のこり火を消さず煽らず生きてゆく
午年の午のやる気を見習おう
通勤車ああ現実はほろ苦き
休日は休養ばかりとっている
自慢話も二つ位は書き残す
友情をつなぐ環状線に乗る

豊中市　田中正坊

ジャスミンがほのかに匂う忍び逢い
別れの日　夜来香が咲いていた
ゆっくりと二の矢を放つ射程距離
恥ずかしい国だがやはり僕の国

川柳塔碑の開眼式に参列して

喜びもまた悲しみも倶会一処
妻の名も過去帳にあり倶会一処

奈良市　宮口笛生

正月のお重おいしい幸を詰め
美しい大阪を見たお元日
正月をぶらりパチンコ負けてくる
南天の赤おだやかな三ヶ日
張り替えた障子平成の初あかり
夫婦だけの暮らし幸せとも思う

和歌山市　福本英子

初春へ磨く鏡の恋の息
高野の塔へつれもて行こう急がずに
待ち惚けカレーライスは激辛に
お喋りが過ぎたか寒いぼんのくぼ
悠々と一円玉が拾われる
糸切り歯役に立たない針仕事

西宮市　門谷たず子

グラス合せて二人だけの記念日がある十二月
律気に生きてすこし疲れてきた胃の腑
光るもの持たぬ十指にあるなさけ

ちぎり絵に炎える思いの椿の朱
ここの土に合うて日野菜の紅の色
日々好日　明日を信じる大茜

高槻市　辻　白渓子

大和路の車窓へ塔が離れない
キャンセルの座席を待っている訃報
五時前のお役所愛想悪くなる
口紅の娘と間をあけラッシュ乗る
落目から疑い深くなった友
歩道橋のんびり渡っている無職

桜井市　岩本雀踊子

妻喜寿　私傘寿のお正月
紙人形どこに置いてもすすり泣く
あわてない父の背中に十二月
仙人になってる定年したその後
人妻と話せる距離はあけてある

倉吉市　奥谷弘朗

逢うことが何と楽しいものと知り
玄関にベルを付けたら客が増え
一徹の虫でも色気に脆い奴
人間は食えたら良いという丸さ
口癖の母ちゃんが出る円満さ

京都市　都倉求芽

そう言えば妻に頼まれて…おりました
筆太の表札　汚職の人の門
センセイ方の寝言「厳粛に受けとめる」
放牧場よく肥えた牛の明日思う
山越えをわざわざ選んだ秋の旅

大阪市　江城修史

めだちたい親ばっかりの七五三
主義ひとつ確かな道に亡父がいる
平和なる世に永らえて腎不全
汗知らぬ男の話聞く疲れ
命ある限り振ります反戦旗

京都市　松川杜的

白虎隊の町の土産に絵ろうそく
修学旅行以来見たことがない忘れ傘
背掻いた汗染みている鯨尺
八十七歳の食欲に負けそうで
試着室の死角で待たされた小半時

下関市　石川侃流洞

男なら泣くなと無理なことを言う
気取っても鏡は年を割り引かぬ
独学の意地のひとつにライセンス
老いてまだ未練がつづくうまい酒
河豚チリの湯気から関門冬景色

倉敷市　小野克枝

同じ血が騒ぎ小舟を揺すり合う
負けたからきれいな涙流します
大海を探すわたしは川ざかな
晩成を見守る母の文机
亡父よ亡父よと六十娘毬をつく

柳井市　弘津柳慶

街へ出て亡妻の好物のキナコ餅
かあちゃんよたまには夢に出て来いよ
タンス開ければ亡き妻の物ばかり
義妹が亡妻の好物持って来る
無人駅降りてこれからどちら行く

鳥取県　川崎秋女

もう七十未だ七十の白髪染め
七十年歩いた足よありがとう
十一月三日見付けた秋の天
温暖化うちのトマトが未だ熟れる
白菜の虫と戦争ごっこする

笠岡市　松本忠三

履歴書に無職と書いてつまんない
会長で通る老人クラブです
女房がまだ肩書を持っている
馬年の僕人蓼が大嫌い
世の中はそう甘くないわかってる

名古屋市　越村枯梢

美意識を亡くした女がガムを噛む
欲求不満おんなは猫とじゃれている
曽孫と対面ああ俺も生きすぎた
風船に乗ってゆくのは世捨て人
足達者な男で俺より先に逝く

奈良市　天正千梢

夕映えの極まりてあり生駒山
人の生きる罪を語るか砂吐く浅蜊
浮き沈み人間養殖のため池で
理屈は何とでもつける強食の修羅場
脳細胞は花筏と遊んでる

西宮市　林はつ絵

移住史を湧かせて一時帰国する
高らかに響くこだまに酔うている
時差越えてやはり刺身の好きなまま
地球儀がくるくる回る子の台詞
呆けたなら見るという子がまた一人

兵庫県　辻文平

秋ですね一つの嘘に眠られず
おしゃべりが男の骨を食べ残す
母の絵がコトコト動く自在鈎
嘘一つ追加のドアを重く押す
愛千語吐いて昨日の刺を抜く

八尾市　宮西弥生

満天の星空ドラマ切って見る
花愛すこころは汚さないように
貧しくて時計進めたまま昏れる
ボジョレーヌーボー軽いみとりの酔い心地
することがあるよでないよでひとりいる

奈良県　田中紀美子

プロ野球　ストレス溜めたまま終り
夫には言えぬ笑いの袋持つ
むかむかとするので一円先に出し

じゃじゃ馬のままで素敵に歳重ね
占いが好きな女の預金帳

大和高田市　岸本豊平次

訃報欄子の肩書で載っている
農家にも皇太子にも嫁が来ず
里帰り車に犬も乗って来る
ラッシュアワー餃子の臭いと向い合い
一言主の社前で迷う願いごと

高石市　浅野房子

意地張った報いか老いの佗び住居
ライバルへ首は洗って待っている
その句から夫婦がもめたという話
ひとり身ののん気な暮し優雅とか
表面に出ないが指揮は妻が取る

箕面市　坪田紅葉

一人より二人がいいに決まってる
宮太鼓　父の命日祭り寿司
あり余る物に囲まれ落ちつかず
べた靴で畦道歩くルイビトン
秋日和相手がほしいとふと思う

寝屋川市　岸野あやめ

老いたれど駿馬の誇り初日の出
平成の新春へ老女も背を伸ばす
恋多き男などとは卑怯です
意地は意地損だ得だは別のこと
俺野党縞のネクタイ押し通す

肩幅の広さ信じてついて行く
弁解はよそう蜜柑のすじを取る
一つ違えば女も水も恐ろしい
ドリンクを飲んで暗示を掛けている
捨て石になっても父に悔いはない

宝塚市　丸山よし津

生きる幸いま極まれり御来光
ダイエットする気にさせたキューピッド
それなりの努力は惜しまない電池
使い捨てできない亡母の鏡掛
昨年の話に触れたがる師走

大阪市　津守柳伸

伐採の斧が哭いてたシベリヤよ
ここからの話補聴器かけなおす
いつからか空いてる席をさがしてる
天と地の恩を忘れていませんか
こうなると知りつつ渡る橋ひとつ

松原市　玉置重人

晩秋のサンマ去年の炭で焼く
カセットで読経を習う秋独り
文化の日せめて詰碁でもやろう
縁談の写真に罪を負わされる
受験子の親となりたる娘へ諭す

伊丹市　樫谷寿馬

どの席もおやかたさんは上座席

島根県　西村早苗

ガス切ってそれから長い話しぐせ
旅に出る孫に逢いたいだけのこと
ガイドの名すぐに覚えて宮巡り
雪が降る恋の話はおわらない

松江市　恒松叮紅

嫁った子の便りが届く木守柿
二十一世紀へ毀されてゆく日本語
年金が使いこなせぬ濡れ落葉
関白の意地は捨てない濡れ落葉
濡れ落葉男の弱い尾骶骨

松江市　舟木与根一

雑学に長け生いたちはにぎりめし
保険屋が区切りをつけている余生
女子職員ふえて疲れ溜まりだす
運だけは方向音痴持っている
十二月　年金少しもあわてない

松江市　柳楽鶴丸

コンピューターでもソロバンではじいても赤字
妻がいるからストレス溜らない
フィクションも入れて夫婦のドラマでき
長靴をはいた農業サラリーマン
たき火をすると焼き芋がほしくなる

倉敷市　稲田豊作

お茶の味分りはじめて余生かな
小さな輪描いて非力な父で老い

美禰市　安平次弘道

恍惚の日々持て余す持ち時間
腹の子に男けじめを急かされる
ある日ふとマリオネットに背かれる
未完の絵にためらい傷が疼きだす
ヘッドホン　ラッシュの中にいて孤独

大阪市　河井庸佑

窓際は窓際なりに気を遣い
言いなりになると思っていた誤算
クラス会わびしい話になるも年齢
カルチャーにせっせと通う訳がある
健康の為と気楽な勤め出る

甘日市市　林野甦光

焼き餅のふくらみ加減外は雪
三ヶ日の風　悪人はみな昼寝
美しさに一枝だけをと言う寡欲
抑止力の乏しさ自己を過信する
辛口のジョークで老いの医者通い

松原市　佐藤奏月（藤子改め）

いいわけをすれば情けがうすくなる
目刺し黒こげ愛のおわりを見るような
弱いのも女強いのも女
にぎりめしこの世は嘘の多いこと
でんでん虫角ひっこめてから頑固

倦怠期犬との会話多くなり　　宇部市　平田実男
孫達が来ると忘れるダイエット
娘の嫁ぎ先でお客の気になれず
何もかもリズムが狂う総入歯
腹探り合うて互いにたまるウツ

トンネルの次々秋が濃くなる　　西条市　片上明水
甘い汁　先に吸われた十二月
父だけは情熱さめぬ米作り
両の手で母はきまって手を握る
菊が好き菊のご縁でお付き合い

還暦やこれから一歳　初日の出　　八尾市　内海幸生
人の輪や高野の雪も溶けるべし
掬われた足に背伸びを教えられ
守護霊に感謝する日も貶す日も
進軍ラッパ人に聞かせぬ胸を持つ

赤トンボすいすい戦争風化する　　岸和田市　福浦勝晴
めでたさも中くらいなりパチンコ狂
お見舞のメロンよばれて帰る客
近代的美人だっせぇとでかい口
男の涙などと明治がほざきおり

あくまでも文化がこわいメダカの子　　玉野市　小谷仙山
布団に地図叱った母も経験者
二人三脚妻が転んで私がころんで
条件のどれもが金の匂いして
成るように成るゆっくりと粥が煮え

生き馬の目は東京に向けられぬ　　倉吉市　渡辺独歩
いまだ古稀また三年の日記買う
表札を一瞥暮れの旅に出る
法灯を守りきれずに野火に伏す
世紀末たらい回しの絵を描こう

由緒ある茶屋で昔の風に会う　　竹原市　森井菁居
プロだって人の子炎える日炎えない日
日々新た負けず嫌いな棒グラフ
反抗期過ぎた息子に無視される
留守中は長女が座る妻の椅子（ハワイへ飛ぶ）

エジプトのウイルスが勝ち咽喉切開　　京都市　山本規不風
スフィンクス優しく何を祈るのか
幽幻の神殿と酔うエジプト行
今だから言えるよ葬式取り消した
クスリ袋が重くて車中でよく眠る

川柳塔開眼供養（二句）　　和歌山市　堀端三男
川柳塔高野の秋をほしいまま
倶会一処僕にも友がたんとでき

空回りでもよい君の熱意買う
畑を打つ農夫に亡父をだぶらせる
頂点に立って孤独の風を知る
仙台市　川村映輝

天地悠久寿命がのびても一〇〇歳だ
停年をわが事終りとごろごろし
地球異変ベルリンの壁破れたり
首になわつけられてるポケットベル
痴呆症心配しながら無為徒食
米子市　石垣花子

アワダチ草に消えてしまった傲慢さ
昔にはふれずに温い看護の手
父と子の歯車近頃噛み合わぬ
跡とりでもめそうだなと他人の目
サイコロの止まったとこに居た二人
米子市　青戸田鶴

冬支度終った樹々は語らない
菩提寺からゆとりのこころもち帰る
忙しくしている夫で有難い
肩の凝らない話ばかりで座がなごむ
城跡に立って来し方ふりかえる
米子市　野坂なみ

ハミングで馬小屋の戸を開けてやる
いい声をもらい私の糧とする
真面目さん春は変心などいかが
いさかって面のずれにも気づかない
古簞笥堂々部屋を封じこめ
米子市　寺沢みど里

よろこびを隠し切れない片笑窪
一輪になっても褪せぬ椿の緋
湖の深さへなごむ郷里の山
灰皿はいらなくなった父の意志
幸せがほしくて窓を開け放つ
米子市　政岡日枝子

デート成功赤い花に活けかえよう
玄関に小さな子供の靴がある
玄関が寒く長男帰らない
風船がしぼむ悲しい前ぶれに
大根輪切り帰らぬ子等のことばかり
米子市　澤田千春

笛の音を辿ればいつか森の中
川の旅岸のくらしを見てつづく
目かくしをされても辿りつく我が家
絵の中の少年に逢う森の道
火種くすぶるやがて私はばらを買う
尼崎市　春城年代

娘むこICUに入る

神や仏に祈るこころも凍ててゆく
病人のうったえる目が放さない
物言えぬ口の動きがありがとう
夫もひとり私も一人星月夜
泣かぬ娘を抱くすべもない老母の胸

米子市　光井玲子

初暦未知のドラマを連れてくる
見るほどにやさしい馬の瞳に惹かれ
庭つづき声をかけ合う身内です
こだわりの風がまだ吹く耳の中
幸せの暦またたく間に流れ

米子市　川上より子

逢うた朝七癖ひとつ抜け落ちる
秋灯下君とわたしは良い角度
耿々と名月ひとりも悪くない
ひとり居が贅沢だった夜の机
野心ちらちら冬ばらに肥料やる

唐津市　田口虹汀

振り出しへ戻る双六だってある
一秒の誤差で運命替えました
敗軍の将で満足してる父
手をひいた孫にシグナル教えられ
外人が曳山の味知っていた

唐津市　久保正敏

焦点が合わない夜の無駄話
無能でも夫が居るというにらみ
金捨てる人の苦労をしてみたい
朝食はいつも銀座で喰うカラス
今だけを考えながら飲んでいる

唐津市　浜本義美

気まぐれな風に出逢うた青リンゴ
逆転の一打ビデオにみて飽かず
佗助のさだめ一と日の媚をみせ
臥たきりになりたくはなし山登る
ナンバーII吐きたい言葉呑み下し

唐津市　山口高明

反抗の息子殴れぬ二度の母
女の子欲しいばかりに六人目
癖書きの書体に見える一本気
星取りの土俵は知らぬ老父の訃よ
相伴にあずかる昼のにわか雨

唐津市　浜本ちよ

物溢れ平和に馴れてダイエット
汐時は岡目八目見極める
鉢植えも囲いに冬へ身構える
心にもない嘘重ね老い哀し
置き去りのわれを育みくれしマーマ

寝屋川市　江口度

よう値切る妻で少うし離れとく
舟を漕ぐしのび逢う夜は嵐でも
故郷の畑また一つ消え風と哭く
温室育ちやがてポキンと折れる鼻
十字架を確かめあって島無口

呉市　槇田英詩

だれか手を振るあれは間違いなく母だ
火気厳禁火種を抱いた女が来る
男同士の相合傘は屋台まで

羊が千匹寝つきの悪い夜を跳ねる
眠気ざましに指を鳴らして首振って
鳥取県　新家完司

仮の世に大きな家を建てている
濡れて帰り雨より重い曲を聴く
どうしても勝てない人を好きになる
嫌になった自分見つめて酒をのむ
肝臓が許すかぎりの宴かな
岡山市　川端柳子

スイッチオン先ず新年の灯を点し
もともとは良い人だったよ閻魔さま
赤い糸結んで責任まで持てぬ
名を貰うてから野良猫のまた家出
雨ざらし陽ざらし腕の見せどころ
高知県　赤川菊野

平成を生きるシナリオ書き替える
ハチキンへ女竜馬の名をもらう
孤の床で柩の寝心地など思う
宝石に勝る我が家の庭の花
連絡船ロマンも一緒に連れて消え
寝屋川市　稲葉冬葉

お利口になって洗濯機を回す
何くわぬ顔で笑い皺がふえ
太陽がさんさん小さいことに悔い
広辞苑まくらに負けた夢を見る
家政婦のポケットにある文庫版
大阪市　黒田真砂

倖せな鏡がある日うそをつく
手術する決心をした夜の窓
一日の終り日記にある疲れ
簡単に事が運んだ日の安堵
苦しみに耐えて花咲く春を待つ
姫路市　丁坪サワ子

呆けたなと言われ老呆の真似をする
舌を噛む言葉が嫌いで人嫌い
ビルが建つ町中の風逆流す
賢夫人　紙オムツなどという噂
ダイエット空の碧さが邪魔をする
大阪市　神夏磯典子

福寿草小さな期待抱いて咲く
一日を支えてほっとするヒール
各停の切符を軽く持っている
標本になって姿を遺す虫もいる
あの店もあの道も無い久しぶり
大阪市　北勝美

薬飲むために食事を摂っている
待合室で出来た一句にある本音
好きですと食べる鰯をはばからず
褒めるにも皮肉にとれる上手下手
叩いたら写るテレビを捨てられず
和歌山市　垂井千寿子

少年の白紙を大人が染めてゆく

適当に嫁との距離をもつゆとり
中座するその瞬間がむつかしい
空腹がはじまりだった大喧嘩
もう過去は振り返らない〆飾り

和歌山市　内芝登志代

褒められる事でもないと亀歩む
つっかい棒はずされ明日から頑張ろう
大切な人を連れてく秋の風
投げやりなひと言本音潜んでる
重体の祖母へ晴着を着て見せる

出雲市　吉岡きみえ

風はにげる古い女のたわごとに
背に腹は替えれぬ男の流し唄
うちの前の橋を渡ってメルヘンへ
その手にはのらぬダルマも意地をもつ
七変化入れ歯外した顔に逢う

出雲市　園山多賀子

よなの降る阿蘇時ならぬ雪の景
洗濯岩　鬼はよっぽど綺麗好き
三泊目畳に座りほっとする
西郷どん給着せたや秋深む
満目蕭条芒は風に逆らわぬ

寝屋川市　宮尾あいき

桜もみじ雨の情けに濡れて散る
秋景色病院通いも苦にならぬ
ちかごろは内助の功も旦那さま
孫二人産んでもゴキブリまだこわい
旦那様逢いにゆきます高野山

大阪市　本間満津子

シルバーシート素直に受けるようになり
和のこころ寄せ木細工のあたたかさ
明日は今日のつづきでないかも知れず
幸運の後からなにかついて来る
もうたくさん便利で阿呆になりそうな

寝屋川市　柴田英壬子

倶会一処ほどよく炊けた釜のめし（川柳塔碑開眼）
ギリギリに障子張り替え餅も買い
柚子風呂にほとぼり冷ます身を沈め
用箋のペンへ夜明けが来てしまい
きんとんも上出来春を待つこころ

鳥取市　両川洋々

渡り鳥いくさの町をいくつ見た
マツバガニ主婦のため息聞き飽いた
神がどう言おうと君に惚れたのさ
その踏絵踏むと他人になれました
赤字でもレールは主張曲げはせぬ

鳥取県　松下たつみ

裏切りのうまい小指にある魅力
早起きの癖団体で気が疲れ
矢面に老人立てるとは卑怯
ガマの穂を作ってるわけでない減反
裏話　男心を利かしてる

富山市　舟渡杏花

世渡りへ転んでみせることもある
梅干がめ亡母の手拍子湧いてくる
ポックリ寺急にいのちが惜しくなる
消しゴムの要らなくなったマイペース
悪女論ぐつぐつ煮えるおでん鍋

岡山県　千原理瑛

腹の虫おさえ押さえて処世術
愛の巣へ餌を運んでいる男
提灯の灯りに美人を見た怖さ
少年の視野に厳しい亡父の面影
来世ではあなたと添わぬ果し状

羽曳野市　田中透太（降二改め）

柿一つむけぬ娘が嫁に行く
もう一つ山を越さねば会えぬ人
残り火が欲しくて途中下車をする
近づいてまた遠ざかる亡父の声
一人より二人がいいと三人目

和歌山市　桜井千秀

骨太なシナリオにする年初め
遠吠えの犬は思いのありったけ
例えばの話へ継りをかけておく
ひらめきを消してしまった青信号
耳よりな話眉唾つけて聞く

羽曳野市　吉川寿美

人を疑うたりはせぬわらび餅
誰も気軽にカードを使う風の街
清濁を呑んで男の樹が育ち
世渡りの下手なわたしの時刻表
妥協した背中できいた雪崩音

有田市　松井かなめ

冷淡な態度の友に情がある
長患いしみじみ知った妻の愛
海軍の命拾いが今を病む
中風よけの寺の住職中風で伏す
庭木の枝隣となりと延びて行き

和歌山県　寺田裕美

鳴くな鴉たかが老犬死んだだけ
贅沢をする内職で肩がこり
仏閣へ家内安全置いてくる
エンジンの愚痴を知ってる父の耳
孫が来て夫婦げんかがこそばゆい

和歌山県　天満三千代

遅い秋山ももみじも焦ってる
旅まくら雨に目覚めて夜を徹す
右耳に詰めたないしょがこぼれだす
芋掘りの遊戯化するも世相とや
切り札を出しそこなった深呼吸

八尾市　宮崎シマ子

まだ跳ねるだろうか老夫は年男
胃に優し七草粥は春の色
爪塗った人が酒豪よ新年会

目に物も見せずに姑のカルタ取り
言えぬ愛あるからこの世楽しゅうて

尼崎市　奥山美智子

信じ合う凡夫凡婦の帆をあげる
みな仲間　空はひとつでつながれる
トランプのハートが好きでまだ若い
思い切り泣かせてくれる倉がある
はらはらと未練心で萩が散る

島根県　榊原秀子

行方不明大事なものをしまいすぎ
無防備な話が出来る友がいる
だいそれた望みは持たぬ野辺の花
相づちもだんだん重くなる話
冬仕度はかどる小春日がつづき

島根県　錦織文子

三世代今朝かしこまる屠蘇の膳
門松や今朝あたらしき町の音
石庭の静けさ星が降りかかる
神有月されど事故多発
亡父亡母の愛薄かりき秋ざくら

倉吉市　野中御前

太陽がいっぱい欲しいおしめ干す
海の幸干して魚臭が苦にならず
全自動苦労話がしたくなる
花時計幸せすぎておくれがち
複眼のトンボが睨む麦藁帽

守口市　羽原静歩

金婚（二句）

ふるさとの山河を懐う雪月花
雪月花花ちりめんがよく似合う

幼稚園（一句）

雞のように園児が寄って来る
お賽銭初春の笑いが止まらない
厳粛に受け止めましてどうする気

鳥取県　土橋螢

逃げ腰になったら雪が降りだした
音もなく堕ちる女とかくれんぼ
私の前に高小卒がいる
夢のあとから攻めてくる虎落笛
初春の慈悲の光にうろたえる

羽曳野市　榎本吐来

悲しげにラッシュアワーのイヤリング
初老の鏡に亡父が見え母が見え
休肝日のことは知ってるコップ酒
欲のない指が器用に札を読む
再職の懐吊皮の知らぬこと

高槻市　川島諷云児

回り道した訳妻が聞きたがる
プライドが邪魔して阿呆になり切れず
土壇場になると味方は女房だけ
美人でもない娘が先に売れてゆく
寝た切りの母に昭和が生きている

岡山県　小林妻子

結びこぶ皆んな巣立って静かな夜
糸切れたことは知らない奴凧
変り映えせぬ古里を恋しがり
正月は子と対面の三ヶ日
水汲みも子守も知らぬ孫のこと

八尾市　鷲見章

放浪の旅に未完の詩が溜り
母の肩叩くと丸くなる眠り
アスファルト過疎に蹲く石が消え
実り田の中で一服伊勢神楽
チャルメラを路地で聞いたは三日ほど

和歌山市　山川克子

子を生んで強くやさしくなるんだね
あなたには裏も表も開けてます
かくれんぼあなた私の何だっけ
平成も昭和もイヤな父のうた
押しピンを置きたい椅子がたんとある

茨木市　井上森生

北海道バスの旅

アンビシャス羊ヶ丘の青い空
摩周湖は千古神秘の水深く

佐賀吉野ヶ里

環濠の里豊作のただ中に
楼観に邪馬台の夢秋の風
環濠にタイムカプセル裏無数

広島県　藤解静風

病院で配所の月を見ています
木枯しや冬眠中と書いて寝る
五を聞いて十を言うからうとまれる
外面が良ければよいで叱られる
仕合せな庭で小鳥が鳴きにくる

岡山県　井上柳五郎

よき時代の昔話へ秋夜なが
小春日に歩幅を伸ばす回り道
紅葉の伯耆富士へと誘う秋
老い先のすこしの未来虹も入れ
小金持つ衝動買いへ妻の愚痴

岡山県　山本玉恵

忘れ上手になって熟年生きる知恵
影法師一人を連れて坂を越す
思いつめて指をかむ日の午後なるや
太陽がまぶしく伏字など出来ぬ
思い上がりのペンペン草の実がはぜる

神戸市　仲どんたく

思い出を着てゆく杖の共白髪
空高く秋には秋の腹がへり
雑兵の散ったあとから秋の花
まだ生きる命数えるちゃんちゃんこ
指切りで別れてからの遠い明日

去るものは追わず風の花芒
行けばすぐレントゲンへとまわされる
カレンダー新しいことはいいことだ
あの人も笑顔の中で泣いている
時計だけお喋りになる一人部屋

島根県　松本文子

新春へ古い掟が顔を出す
木造の校舎が育てた人間味
木守柿ストンと秋の絵にはまる
たとう紙に包む女の哀歓詩
茶絶ちした亡母が戦の絵の中に

岡山県　矢内寿恵子

自画像へ心構えを入れておく
濡れながら同じ思いの夫婦傘
信じてるあなたを軍鶏にしておこう
十字架を背負えば誰かが味方する
無事着いてそれは言うまい回り路

名古屋市　大林曲ん手

八十路坂三猿主義で登ろうか
よし阿呆と言われようとも笑っとく
仏書読み心の乾き少し癒え
噂だがポックリ寺の和尚病む
ほろ苦いコーヒーが今日のおつき合い

守口市　野呂右近

元日の日記におもうこの十年
二歩三歩だんだんおそくなる歩幅
妻がいる日曜大工の助っ人に
ささやかな夢球根の彩をよる
故里の話は少し大袈裟に

大阪市　大野武太

指人形幼い恋の物語
たわむれの指切りなのにときめいて
落葉ふむ恋の序曲をしのびつつ
スタートラインの息子に暗示かけてやる
コーヒーも酒にも通じもてはる

西宮市　西口いわを

花の咲く道を選んで散歩する
いざという時にとびでた花粉症
ほろ酔いのひとつ覚えの田原坂
ひざ枕ついに本音吐かされる
切干のひなたの匂い母がすむ

和歌山市　木本朱夏

何か言うたかはいあなたが好きです
折り返し点見つからぬまま眼鏡拭く
残照よ君に言いたいことがある
遊びぼけストンと秋の陽が落ちる
ちぎれ雲チャールストンでも踊ろうよ

島根県　北川民子

護摩供養　故里の空あたたかし

竹原市　岩本笑子

お月様　仕舞い風呂ですいかがです
影法師お前も寒い十二月
笑顔みな使い果した大晦日
手と足の爪を切らせている平和

守口市　森川まさお

八つ裂きにした松茸を火に焙る
おとといが見頃だったと言う茶店
種のない葡萄を持って墓参り
逆光の芒見ながら医者通い
父と並んで空を見ている時があり

和歌山市　若宮武雄

冷めきれば他人以上となる絆
泥水もそっとしとけば澄むものを
雲一つない青空で絵にならぬ
飛びまわらねば風情にもなる落葉

和歌山市　松原寿子

寒風へブルーハワイが呼んでいる
建前の裏へ散らした日の涙
一杯のグラスも君を意識して
片方の耳雑談へ貸しておく

唐津市　仁部四郎

お化粧が濃いとお尻もよく振れる
化粧よりメモが大事な朝の市
お化粧も習って村の芸を継ぐ
湯上りの化粧に隠す今日の嘘

姫路市　人見翠記

秋晴れに喜寿と傘寿の道行で
追憶をホツホツ語るこれも年
季節風空の青さの秋に酔う
腹の虫冒険心が躍り出す

今治市　越智一水

八ツ当たりできるこの世に妻がいる
どん底で妻は味方になってくれ
膝枕　夫のためにあけておく
亭主の操縦　胃袋甘やかし

大田市　藤田軒太楼

姑への不満過保護で今日も揉め
駐車場出来て名所も俗化する
静養に向かぬ温泉やけに増え
三男の強気に商人の筋が見え

町田市　竹内紫錆

ミシン油を注して夫が回る椅子
老化する歯と餅粥が詩をつくる
刷り音に酔うワープロのインク切れ
マイク向ける男体操さえしない

神戸市　山口美穂

残照の中紅葉の一葉舞い
わたしの中にオバタリアンが潜んでる
三姉妹のおしゃべり老母はよい寝息
また年をむかえる嘆きとよろこびと

大師に聞いてもらえる自句をみがかねば
鉢の花名も忘れたに咲いてくれ
頂上でまちかまえてる下り坂
去年よりより良きニュース望む新春

大阪市　藤田頂留子

天高く妻の自信は揺るぎなし
紐を組む指先にもう一つの眼
降り立てば祈る形の故郷の山
影法師ときどき黒くなり過ぎる

西宮市　奥田みつ子

焦るまいいつか終りの来る人生
呆けという文字ばかりを目がひろい
ガタガタの身体で口はまだ達者
人生の余白二人の孫で埋め

岸和田市　島崎冨志子

補聴器を外して静かに経を読む
のんびりとできた今年の三ヶ日
下手でよい真心で書く年賀状
ああ言えばこう言う孫で嬉しそう

七尾市　松高秀峰

殴られて初めて知った深い愛
砂も噛み小石も噛んだ他人のめし
初恋は神聖にして手も触れず
一徹な父の背中が許してる

大阪市　吐田公一

気がつけば走ることしか知らぬ靴
車座の鬼遺言にさばかれる
酔うほどに紳士の面がずれてくる
居酒屋に男の働く詩がある

東大阪市　崎山美子

重そうなかばん園児のみかん狩り
借農園開いて教えて芋の出来
大根の太りくらべる借農園
鬼面太鼓心のはずむ能登の旅

岸和田市　清野こう

好い事がありそう今朝も鏡拭く
空拭きに夢あり新築木の香り
脇役に徹する母がいてくれる
天馬躍進そんな若さが欲しくなり

岸和田市　原さよ子

旅馴れた人の後からついてゆく
古寺の枯れた木目にある温み
宍道湖の夕映えしのぶしじみ汁
仏にも鬼にもなって子を育て

岸和田市　古野ひで

濡れ苔をいためず神の橋渡る　（明通寺）
雲濱の人柄偲ぶ枯れた文字　（千石荘）
杉苔の道を抜けると千手観音像　（妙楽寺）
五百年生きた紅葉の枯山水　（萬徳寺）

岸和田市　芳地狸村

藤井寺市　福元みのる

邪魔したくないがうるさい猫の恋
長男の育児書次男には向かぬ
話にはならんと内心嬉しそう
隣との喧嘩に犬も負けて居ず

倉吉市　渡辺菩句

意識過剰あんたは女恐怖症
愚痴をこぼすと落葉へら落ちてくる
皿は飛んだらＵＦＯになるのかな
お茶を飲む間に賞め言葉探しとく

羽曳野市　佐野白水

菊人形おふくの内臓は竹だった
ボケ封じの菩薩は愚痴を聞いてやり

京都相国寺にて

方丈で昼寝がしたい暖かさ
水琴窟の昔の音で茶室入り

貝塚市　行天千代

なにげなく見上げる空に飛行雲
ひっそりとつづく木立ちよ秋の径
手押車つづいて歩道待たされる
クリスマスケーキの予約取りに来る

和歌山市　福井桂香

にさん日居留守を使うお正月
振袖の片いっぽうがまだ縫えぬ
嘘ついた乳房の下に汗を溜め
あなたとの距離点線で描いとく

大阪市　冨上光代

適当に妥協しながら生き伸びる
書初めへ今年もやる気燃えてくる
地下街の川にも慣う人のあり
臭いある水にも馴れて街が好き

加賀市　細呂木魯木

人生の灯り見え隠れする受験
失敗と妥協に悩む新入社
握りこぶし解けば我慢の爪の跡
老いてなお見舞は異性がいい闘病

大阪府　坂口公子

秋が来て菊のしもべとなる夫
お呼びでない電話へ出ちゃった浮いた声
アンテナが雑談しっかり捉えてる
適当に見えて大工の目尺かな

高知市　北川竹萌

旅の湯に年金だけの首浮かせ
旅パック　ホットな話ばかり詰め
太い夢　薇の木でのぼれない
黄葉の零余子揺れている季節感

河内長野市　井上喜酔

年金で時の流れへしがみつく
意地見せる仕草が憎いほど読める
ストレスが溜ると狂う知恵袋

医者ばなれしてもうるさい妻の愚痴
弘前市　真喜内　實

神経痛初セーターに素直です
岡しゃべり(徒話)秋の短い陽が嘆く
案内に答える「はい」も小春です
差し上げる笑顔でこちら軽くなる
出雲市　板垣夢酔

掘炬燵母にだかれている温み
盗み酒ゴキブリ踏んだ足の裏
外出の多いダイヤを妬く真珠
蒟蒻の刺身が好きな山育ち
岡山県　荻野鮫虎狼

貧乏に馴れ末っ子のよく笑い
夫婦箸段々佳境となる喧嘩
床の間の軸が見下す無表情
口髭が伸びきった頃風邪を引き
米子市　田中亜弥

ああ平和富士山の絵がよく売れる
十本の指で足りない友がいる
この流れ母なる海が待ちうける
幾度か神に護られ生きて来た
和泉市　西岡洛酔

泰然自若老骨或る日へ詩心
柿ひとつ残って冬と同化する
正直の草鞋をはいた温い旅
冬将軍へ一兵卒で職を出る
静岡市　渥美弧秀

愛憎を重ねマンネリ化の夫婦
老い忘れ詩と音楽が明日へ生き
三が日酌む酒とろり無二の友
珍客と酌む酒とろり新春の宵
八尾市　山下美津留

吉野路へ悲劇を知らぬギャルと旅
番傘を売る信濃路は文字も入れ
パチンコよお前も汚職していたか
鮫肌の女にあった深なさけ
高知県　小澤幸泉

お役目も楽し旅情の秋に酔い
不器用に生きてる老夫をいとおしみ
人情も用水路さえフタがされ
さらさらとこだわりもなし老い二人
庫津市　筒井朴竜

健脚へ日課始まる朝配り
病床の妻の虚な眼と出逢う
勾玉や寝棺起して吉野ヶ里
玉乗りがうまいピエロでこけ上手
高槻市　竹内花代子

キャンセルへ友から届く旅土産
牛乳のこだわりに消えた肋骨
無事帰宅先ず仏壇へ手を合す

採血検査老母の病名無い安堵

十和田市　斉藤　劦

大輪の菊が迎える村役場
実らない恋を聞きつつ秋ざくら
りんご一個飾ると僕の部屋になる
負試合当然ですという味方

福岡県　横地正好

休耕田役に立てます凧揚げる
日進月歩三年続きの日記出る
挨拶を避けてお神酒と初春三日
高齢社会うま年じっとしておれぬ

羽咋市　三宅ろ亭

一皮をむけば一枚欲の皮
持ってきた暫定どっかと腰を据え
腰据えられるとピンチヒッターとも言えず
老碌は仲よくなったり離れたり

倉吉市　淡路ゆり子

屠蘇に酔い三日坊主の日記書く
夫婦とて本音はいつも胸の内
まな板のお世話になってまだ達者
茜空見事な絵です花芒

奈良県　長谷川春蘭

絵襖にとどかぬ日射し冬隣
貸傘により添う仲の夕時雨
枝豆のざるに仲よし小よしの手
大輪の一つ無くとも菊日和

堺市　柿花紀美女

ライバルへ一歩も引けぬ意地があり
美容院の先生手八丁口八丁
平成へ合す歯車きしみ出し
天高く減量又も挫折する

松山市　谷信夫

餌やっていた野良猫が来なくなり
急いでもいそがなくても山は見え
当意即妙　洗濯挟みのつかい道
舌かむ思い砂かむ思い愚をさとり

姫路市　中塚遊峰

ひそと咲く露草に似た柳友は逝く
病む身には家族の居るという安堵
捨てかねるガラクタと居る大正っ子
独り居は咳も大きく出して居り

大阪市　井上白峰

試着室出て来た妻のVサイン
強情を通したあとの孤独感
二人三脚紐が弛んだ倦怠期
重箱の隅を突っついた鬼の面

姫路市　大原葉香

おしゃべりな鴉が群れに一羽いる
格好の遊び場を得た水たまり
嫌われているとも知らず今日も雨

パチンコ屋が献金をして繁昌記
岡山市　花田たけ志

流し合う汗の笑顔が満ち足りる
スランプで鬼の入り口開けている
あれこれと替えてやっぱりそば枕
汗出した昔を余生の杖にする
大阪市　坂本仙吉郎

故郷の思い出
提灯の箱に我が家の紋所
来年もまた来るのよと燕の巣
裏に住む老人に誘われ魚釣り
城下町祖母に連れられ人力車
西宮市　秋元てる

夜十時　律儀な鳩のように寝る
漢方に頼る外ない夜の長さ
お別れが夜だったのに夜が好き
半ドアのまま発車して行った恋
海南市　三宅保州

馬車馬に徹す妻子が駄者ならば
回れ右したら社長がピリになる
ライバルを叩くと返り血を浴びる
ブローチを贈る陳腐だなと思う
大阪市　中西兼治郎

保護鳥という鳥がいる不公平
願ってもない良い話騙される
税務署に行く日ははずす光るもの
物忘れ益々ふえる長寿国
吹田市　茂見よ志子

得手不得手悲しいまでに得手がない
母の岸戻り着かない舟ばかり
笑い皺なのとも言えぬほどに殖え
隔世の感あり餅の数が減り
東京都　吉川一郎

モノクロの傷あと深い戦中派
一円が今年は溜まる社会鍋
今朝もまたラッシュに耐えて生きる顔
衣食住満たし平和でない心
鳥取県　江原とみお

水面下で一人相撲をとっている
ぶっきら棒な言葉にあった男味
札儀正しくラーメンを召しあがり
信楽の狸と見合いくりかえす
守口市　結城君子

立冬のさむさがほしい寒椿
三日月が直角のビル柔らげる
気に入った嫁に頼らぬようにする
道に散る落葉と湖上に散る落葉
和歌山市　青枝鉄治

ペン持てば強い論陣張る無口
店の名をカタカナにして客を呼び

化粧した男の唄う反戦歌
栄転へハミングまじる荷をまとめ
広島県　田村新造

初日の出拝む始発の船の上
朝駆けの汗がきらりと馬の首
海荒れてふる里行きの船が出ぬ
菊まつり見事な秋を見せてくれ
境港市　細木歳栄

新調の長靴この道誇らかに
おふくろのおせち料理は頑固です
わが秘密わたしの影が覗いてた
デートにも矢張り影がついて来た
豊中市　吉田あずき

二次会で内緒の金が生きて来る
賽銭を入れてる方が福の神
余生謳歌　仏へ愚痴も遠のいた
青春を今ちょろちょろと戦中派
鳥取県　土橋はるお

ジゲおこし黄門さんに出くわせり
年金をもらうと血圧があがる
世話好きな女が裏から出入りする
踏ん反りかえった奴が受話器もっている
富田林市　片岡智恵子

握手した指が一本戻らない
指先を恋しがってる茶つみうた
新空港噂話をする魚
喝采は無いが自慢の友がいる
大阪市　北山悟郎

後盾一枚岩でない絆
大衆に悲憤慷慨何んとなる
健在で余裕があります弾む義肢
人情の渇き覚える街の隅
島根県　松本はるみ

行末は三親等内までのこと
不協和音ただ一心に祈ります
ダイエット少し恋などしてみたら
かくれんぼ鬼はシッコにいったまま
島根県　藤原鈴江

歩きたいこともあろうに石の塔
絵日傘をロマンチックにする日陰
天高く一寸気まぐれパチンコ屋
風冷えて酒ふくいくと亡父の忌よ
出雲市　久谷まこと

頼られる幸せ母の背が丸い
手の内を読んでる母の苦労性
妥協してたたんだ胸の灯がもえる
連凧の中に入れぬヒゲ奴
和歌山市　田中輝子

葉ばたんの幾重に巻いて春となる
冷却期間おいて空しくなってくる

作戦の灯が一斉につくネオン
一日一善　神のお膝にまだ遠い
米子市　小村てい子

大黒さまの袋おんなにもてている
パセリにセロリ　レタスと多弁に春を待つ
春雪の思慕ひとつあるにごり酒
距離感の中でうれしい鎮守さま
諫早市　原田メイシュン

嫁がせても心配女房の苦労性
園児が画く母さんはみな美人
大臣よもっと上手なうそを言うとバイ
和泉市　岡井やすお

壁つくる人　風穴をあける人
自衛官にも外国を見せておき
一杯だからかけそばも本になる
竹原市　信本博子

ペン持てば懺悔水増ししたくなり
懺悔する愛の告白するように
恋懺悔冷えぬ血がまたうずき
鳥取県　谷口次男

原発はやっぱり何か引っかかる
間を置いて断わり方を思案する
借金で悠然と飲みホラを吹き
大阪市　町田達子

少しシビアに里人と行く丸木橋
うちの木枯らし若い気炎を上げている
古代人と気儘に逢うている史跡
出雲市　河原恵美子

逆境のすすきが秋に酔っている
女だけ残して捨てた妻と母
ゆとりかなとっても赤が似合ってる
米子市　金山夕子

生かされてゆとりを作るティータイム
夕焼けに言えないことを言う案山子
こだわりを捨てたら経いイヤリング
米子市　茂理高代

フンフンと聞いてやるのも愛の内
洗濯機深い絆で助け合う
コスモスの乱れがなぜかよく解る
倉敷市　田辺炎六

年よりの冷や水で飲む風邪薬
喋りすぎですよ嫉妬の鸚鵡さん
祈禱師の暗示右見よ左見よ
出雲市　小玉満江

赤と青なじんで好きな色になる
隣室の患者せき込む午前二時
泣き面に蜂　有り金を盗まれる
岡山県　岩道博友

看護婦の手はそれぞれの主義を持ち
柿一つ落して暇な日なたぼこ

充電を忘れたかみそり持って旅
黒石市　相馬一花

代筆の女文字には騙されぬ
マニキュアをつけてすさんだ爪隠す
平成の子供は鼻を垂らさない
豊中市　上田登志実

浪々のくらしに日々が早過ぎる
何のため根ほり葉ほり聞くのです
何かしら親しみの湧く山頭火
岡山県　池田半仙

正論の方が破れる多数決
小庭にも紅葉が秋と主張する
此の辺に昔はあった水車
大阪市　渡部さと美

三寒四温亡父の教えのそのままに
決めかねていてはイエスともう取られ
社会鍋ここは素直に出る財布
大阪市　松尾柳右子

子離れをしたはず電話かけている
娘の前に出でよ白馬の王子さま
ワイン色ばかり目につくショッピング
茨木市　堀良江

病院は目でも耳でもいやなとこ
痛々し着せかえ中の菊人形
かんじんの礼後になる電話口
豊中市　辻川慶子

枯葉にも彩あり二階コーヒー店
ダイエット秋の味覚に負けました
法話聞く聞いてるような寝てるよな
鳥取県　さえきやえ

病む師まだ酒呑めるわいとうれし気に（病む師）
一病が友との絆つよくする
土が染み幸せな手になりました
吹田市　栗谷春子

元旦は畏まったりはしゃいだり
このままを信じています幸せに
この秋を鈴虫飼ったり死なせたり
富田林市　新開千代女

何事もほどほどがよい宗教も
華やかなネオンの裏で見るドラマ
同窓会友の指輪をちらと見る
出雲市　石倉芙佐子

紅梅の小袖もひとつ年を取る
帯合わせ金襴緞子は夢なれど
小紫あの娘に着せた初鏡
弘前市　小寺花峯

初恋のひとも来ましたクラス会
初対面のような顔ありクラス会
悔恨を捨ててはみたが恥部が浮く
川西市　松本ただし

一期一会小さな世間を広く住む
億坪も山路も同じ靴の裏

筈でない筈が答になって出る
西宮市　瀬尾六郎太

待合室　病いの話愚痴話
腰痛が起らぬものかと蟻想う
あのプラハＡＢＣで想い出し
富田林市　松本今日子

距離少し置いて宗教考える
変身願望突然海がみたくなる
今朝会った犬の目つきは喧嘩腰
寝屋川市　平松かすみ

指一本これで世界の目が動く
悔いている他人にみせた鬼の面
心配をよそにのん気な娘の胎児
大阪市　板東倫子

地価高騰　家は古びて行くばかり
孫だって十万位貯めている
意地悪な老女になって行く自認
和歌山市　玉井豊太

天寿万歳やっと私も仲間入り
初明り去年の下駄を揃えてる
数の子は外国語を喋り出し
鳥取県　羽津川公乃

この指に止った彼に感謝する
真心を過大包装せぬように
血圧も虫歯もやっと落ちついた
鳥取県　田村きみ子

不整脈今日もわたしをおびやかす
冬の月わたし詩人になれそうで
羞恥心あるから女美しい
寝屋川市　堀江光子

語るのも語らぬもよし酒の友
墓地までの一本道を曼珠沙華
灯明を点せば己れ小さい影
箕面市　椎江清芳

厄年は耳鳴りするほど鈴を振り
財布から諭吉が逃げる十二月
予定にはなかった今日のお香典
出雲市　小白金房子

紺碧の海を見おろす紅椿
十二月怠け心を風が押す
から風が大根乾せとやって来る
鳥取県　津村八重子

歩く日は夫と歩幅をそろえよう
背の孫と童謡うたう秋の天
夢だけで終りたくない夢をもつ
大阪市　冨岡温子

深呼吸少し頭を切り換える
何も彼も流した朝の澄んだ空
抗議する孫に出したい助け舟
大阪市　横山為子

停電で本当の夜を知りました
枯葉にもプライドがあり紅を引く

シャワーより肩までつかる風呂の味
静岡市　安本晃授

戦争史忘れ気儘な竹トンボ
酒壺にまた躓いた老いの足
無駄はぶき一発主義の父の銃
伊丹市　山崎君子

子が真似る柏手神もじっと聞く
絵馬に書く願いいろいろ梅匂う
枝まげて指ふれてみる秋の彩
鳥取市　小谷美っ千

火と契り水と睦みて和を祈る
笹鳴に師走の空が澄みわたる
与作の斧に冬の逃げ足早くなる
鳥取県　乾喜与志

目がさめてみたら散髪屋の椅子に
和服着た方にコーヒーすすめられ
大阪市　塩田新一郎

手助けをしてもやりたい蟻が曳く
生きていて迷い死ぬのも迷ってる
奈良県　中原比呂志

札束の煉瓦が敷いてある角地
ハンドルは好調少しの遊びあり
大阪市　宮下とし

白菊をこよなく愛し逝った爺
外人と美事英会話の露天商
豊中市　一瀬福一

束の間に勢揃いする葱坊主
まっすぐに帰らぬ靴を磨く妻
岡山県　松本元江

捨て切れぬ古巣に灯す里あかり
懸命に生きたし使命ある余生
河内長野市　植村喜代

右の善左の悪に仕掛けられ
風邪を引く家族の中にいる私
岡山県　直原七面山

雅びな台詞で夫婦喧嘩を
それなりに生きて来て逝きし父
和歌山県　岩崎瑞穂

生半可医学書読んで日々不安
水底に民話がねむる人造湖
和歌山県　西口忠雄

財産と言えぬがらくた山と積み
過去は過去いまはお前のいう通り
大阪市　松永すすむ

これ呑めと夫が妻に玉子酒
潤いのある三世代の温かさ
奈良市　米田恭昌

神無月でも欠かさない月参り
城壁の矢玉の跡の反戦歌
大阪市　神保拓生

ぜんまいを巻けば聞える亡父の声
焼増しをルーペでのぞく孫の顔

自選集

元朝に寄す

水粉千翁

嘶きの暁闇寂として動き
元旦の目覚めへ一二三呼吸
踏みしめて今朝の跫跡たらしめん
地についた背伸び今年の骨が鳴り
よろめいて笑い合うかな夫婦かな

児島与呂志

初春がある餅を搗く音羽根の音
一月のプランに約束などはない
三度目の寝直す夢に妥協する
しばらくは無言で父の迎え傘
足音が止まると不安な耳になる

黒川紫香

まっ先にお屠蘇酌がれるお正月
春や春八十二歳で食う雑煮
年毎に増える賀状が楽しくて
まだ今年行くとこがあり達者です
曽孫から楽しくいじめられてます

藤井明朗

ひとみんな正月の顔初詣
初鏡平和な顔も三ヶ日
中流の暮しと思う巡り合い
寄付金を集める人の話好き
平成二年結婚ブーム呼び寄せる

藤村〆女

落人の語らいなるか風さわぐ
馳け足で来て踏切で待たされる
えらいやっちゃ嘘をだまって聞くゆとり
えらいやっちゃ肚の座った政治論
栄枯盛衰羽振りを語る庭の石

正本水客

一服のお茶に装う旅ごころ
旅やよし雲あり人が生きている

紅花染やわらぐ深さ持っている
夢殿を模した旧さに湯があふれ
蔵王天狗のすみかそのまま岩間の湯

野田素身郎

昼間から定年退職落語聞く
兄二人おわす九段の大鳥居
階段で息ととのえる後遺症
厚着して出る冬枯れの散歩道
熱戦のテレビ画面に赤とんぼ

山内静水

うさぎ小屋に住んで豊かに妻も古稀
金婚へ夢がふくらむ夢じゃない
ゆっくりと歩こうどっちがころんでも
嗚呼無情CTに召し捕られ
倒れて本望今日が今日まで生かされて

工藤甲吉

国会もチーンジャラジャラと打ち合いし
泣く泣くもご先祖からの田をつぶし
松葉ガニ貰いわいろに問われそう
勤労へ感謝も何も無い無職
焼け跡を見てくる煙草吸いながら

波多野五楽庵

浮かんでは消える月日の女かな
皿いくつ割れば気がすむ妻の鬼
二人いてとろりとろりと湯の話
秋晴れの英語がすぐに出てこない
吝嗇で輪ゴムが風化してしまう

有働芳仙

新しい柄に馴染めぬ古希の帯
遠回りして美しい人に会い
行先は問わず貴方についてゆく
信じ合う握手の裏を風が抜け
不自由はさせぬと貴方言ったのよ

八木千代

はる なつ と神に返してきた暦
耳たぶに夏が残っていて困る
重そうな冬をふんわり受けておく
桐一葉 柿一葉とてつまされる
ひそやかに草咲いておく光っておく

本田恵二朗

枯れた味と悟った味が差向い
寝転んで話す言葉に角がない
針のあるひと言急所をよけて刺し
熱心を買われ適所に座らされ
古臭い話へ相槌打ってやり

即位金貨　花博銀貨待つ平和
いい方にとって良かったなと思い
原告も被告も負けぬ顔でいる
本心に反いて党で物をいい
嫁の産　娘の産　母の打つ動悸

大矢十郎

左遷地の椅子はなかなかぬくもらぬ
母さんの足音漫画引っこめる
隣には負けぬ笑顔で店守る
茶柱を信じる姑に逆らわぬ
瀬戸ぎわで軽いジョークをこころみる

小林由多香

今年も生きて川柳塔は十二冊
造花がいつも咲いている私生活
悪いことしていないのに鳩の糞
夫婦の夢をちさい袋に入れ替える
秋から冬　逢いたい人もないままに

小出智子

イヤリング悲しいことは聞き流す
わさび漬買うて終ったある旅路
玉葱を刻む男に職が無い
余生とは言え年金が待ち遠し

月原宵明

鬼瓦　月へ虚勢を張りつづけ

久家代仕男

お茶いれて尖るはなしは止しましょう
銭湯を出ると師走は婆婆が吹く
頬かむり　うちの与作は煤払い
微笑みが生活の中のスパイスさ
お月さま　そなたにならば告げ易い

遠山可住

年金で還らぬ戦友に会いに行く
精一パイ咲いて貧しさためらわず
太陽へ真直ぐ立っている安堵
塩カラがとろりと溶けて夕映える
倶会一処　仏縁ここに極まれり

野村太茂津

孫誕生　七福神の揃い踏み
この先も建て直し行く道標
鞭はもう手放そう日日おだやかに
ひたむきに生きて急がぬ倶会一処
倶会一処未だし菩提樹下に座す

金井文秋

運命に任せて生きるのに飽きる
マイホームが夢とは大志小さくなり
子育てが済んで女が若くなり

生きていたかと言う程の久しぶり
ポックリ死で終りにしたいなと思う

橘高薫風

初光り森羅万象影あるな
お元日香水なんぞつけぬこと
還暦の妻と易々諾々と旅
絵双六　妻の子供のときの顔
天馬よりポックリポックリ歩く馬

河内天笑

水道の水が信用されてない
清貧の暮しを馬鹿にする株価
銘水を犯しはじめたゴルフ場
アメリカが四つも買える地価の闇
一年の早さ加速度ついてくる

阿萬萬的

淡路島洲本文学碑を訪ねて

蔦かずら文学碑の道秋深む
師の句碑のこころに触れる陽のぬくみ
拓本に師の筆蹟が浮いて来る
碑(いし)の石の言葉にある絆
島先生の情熱並んだ石の艶

西田柳宏子

子供部屋与えて親は閉め出され
蟬　トンボ脇目も振らぬ塾通い
肩書が背負う床柱と気付いてず
顔中の皺を伸ばしたい笑顔
手のとどくとこで逃がしたのは大魚

麻生路郎先生句碑建立募金のご案内

かねてから麻生路郎先生の句碑が地元大阪にないことを、私たちとして寂しく思っていましたが、今回、「夕桜とんぼがへりがしてみたし」の句碑を左記により建立することとなりました。同人・誌友のみなさまのご支援をお願いします。

一、**建立地**　大阪市阿倍野区北畠
　　阿倍野神社境内
一、**募　金**　一口　二、〇〇〇円
一、**除幕式**　平成二年四月
★送金は、川柳塔社会計室（高杉鬼遊方）へ
〒581　八尾市中田二―三〇二
振替口座　大阪8―三三三六八

川柳塔社

川柳太平記（140）

川柳の群像

藤島茶六

東野大八

「そもそも私が、古川柳の持つ、うがち、軽味、滑稽、人情味などの大衆性に魅せられて、というより惚れ込んでこの道にのめり込んだだけに、古川柳は私の心のふるさとでもある。従って私にとっては川柳という以上、いかに時代が変っても川柳の持ち味、真髄は永久に心の中に生き続けることであろうし、六十年を共にして来ただけに、川柳は私の生活の一部でもある。

しかし、いかに伝統の世界に浸り切ったとはいえ、若い一時期衒気の赴くままに、革新的な句作りに走ったこともあったが、所詮生涯を変えるに至らずに中絶した若き日の思い出がある。どんな良薬でも体質に合わなくては良薬とはいい得ないもので、以来古川柳を基盤とし、現代生活にマッチした句作りを指向して今日に及んでいるのである。

私自身個性の赴くままの奔放で独善的な句作りは慎み、一読明快の句作りを念願としているのである。そして、世界に冠たる省略の一行詩であることを思うなら、お喋りに過ぎぬよう、一字たりとも疎かにせぬよう、日本語の持つ妙味を十二分に発揮したいものと思っている」（川柳全集10・藤島茶六〝わたしの川柳〟構造社　昭58刊）

川柳に手を初めたのが大正7年とあるからその川柳生活はまる七十年になる。ながい川柳一筋に歩いた、右はその信条である。

本名藤島広司。明治34年2月5日東京銀座生れ。新聞・雑誌の投句から川柳に入る。

「実は、僕は銀座生れとて戦災で千葉へ逃れてから、僕にはふるさとがなくなってしまった。しかし、ふるさとは失くなっても、せめてその名残りだけはと

本籍は東京に置く負け惜しみ　　茶六

と千葉は寄留地として、何時かは東京へ帰る日を夢見ていたが、千葉で会社を持ったり、市会議員出馬の話を持ち込まれたり（そんな柄ではないので勿論辞退はしたが）また、子供達の独立などから、その都度戸籍謄本を東京からとり寄せる面倒が起きたので、心ならずも断腸の思いで千葉へ本籍を移さざるを得なくなった。（「同上」あとがき）

柳号の茶六の茶は、好きな一茶から、そして初代川柳の号「緑亭」の緑を頂き茶緑・緑茶となぶった末、緑は養の目の止りの六にかけ、結局茶六としたものの柳界では、サロクのつもりがチャロクで通ってしまったので衆望の赴くままに任せたという。生年が昭和天皇と同じだということから

身を潔くもつ天皇と同い年　　茶六

という句をよく染筆している。

川柳は久良伎、剣花坊、三面子らは別格として、茶六の川柳仲間は村田周魚、川上三太郎、冨士野鞍馬、西島〇丸らがいた。特に新

橋の芸妓が恋患いをして死んだという伝説をもつ○丸さんとは、格別な間柄で、作句の方もこの人に兄事していたらしい。年若くして逝った先妻は「白帆」同人だった川柳趣味豊かな人で、西念寺の○丸和尚の川柳結婚は、○丸司祭のNO・1といわれている。現在のキノ未亡人との間には二男二女をもうけ、金婚式まで挙げている。角帯に和服姿の若い頃の粋な茶六には、当然、数々のロマンスがあったらしいが省略する。

江戸っ子の茶六の川柳趣味は、大正15年に彼がリーダーで出した『川柳寿ずめ』のすずめ吟社からエキサイトしていく。この柳誌に「雀は踊る」という匿名の穿ったコラムは好評で、この筆力が昭和35年からきやり吟社の社友として、昭和40年以来十七年間、「前後左右」という川柳コラムを二百回以上も書きつづけた。その傍ら構造社刊の『川柳』にも一頁柳文を連載している。

この茶六式粋文の冴えは、右の構造社の川柳全集第三巻に『西島○丸』(昭54)一冊をまとめあげている。茶六にとって○丸という川柳人は、格別の友誼厚き柳友であったことがわかる。

「大正十四年頃、故○丸さんが『出題は作句のヒントだから作句にも選句にも、題意は極めて広く自由に扱いたい』と主張していたが、当時若かった僕らはその説に賛同したものだった。その後、「米」という出題に「亜米利加」が出るに及んでは、無下に賛成もしていられなくなった。だいたい課題吟は、雑詠より軽んじられる傾向にあるが、課題に拘束される点に思いを及ぼすと、雑詠より遙かに面倒で難しいのではなかろうか。課題吟は遊びになるとよく耳にするが、僕は課題吟作りに当っては十句が十句とはいかないまでも、常に従来の生活の体験を生かし、また、現在の生活様式を詠み込んでいる積もりである。従ってそこに課題吟の難しさがあると共に、作句の醍醐味が生まれて来るので、それに魅せられて川柳と離れられなくなっているのである」(藤島茶六「前後左右」=昭44・3きやり)

茶六先生は、元来課題吟を得意とされている(山本宍道郎)の世評を裏付けたもので、川柳生活七十年の茶六川柳の持味がよく語られている点でサンプルに挙げておく。

昭和54年川柳人協会会長。東都川柳長屋連大家。同56年東洋樹川柳賞受賞。同年六月日本川柳協会理事長に就任。この間川柳人協会文化賞を受賞しているが、なんといってもこの人最高のグランプリは、昭和60年11月勲五等双光旭日章の叙勲の栄に浴したことだ。

豊明殿涙して起つ同い年　　茶六

川柳一筋の川柳人茶六身に余る栄誉として同年3月叙勲祝賀会が東京で催されている。川柳史上初の輝やかしき記録といえる。

祝賀会といえば、叙勲に先だつ昭和57年には藤島茶六傘寿祝賀会が東京で盛大に催されている。また同63年10月には、藤島茶六先生米寿記念句碑除幕式が地元千葉市で盛大に催されている。賛助柳人実に四百数十名という盛況で、千葉川柳作家連盟の西村在我世話人代表らは労苦報われ、胸を張っての喜びよう。

息切れのした石段のいい眺め　　茶六

の句碑をきざんだ巨大な自然石が千葉市亥鼻山公園の一隅を飾ったその喜びを一期に、それから二週間後の昭和63年11月12日肝臓ガンのため死去。享年87。法名慧照院法廣信士。

「今にして思いますと、この八十余年川柳一筋に育くまれ、育てられ、立派な句碑まで建てて頂いて、これも全川柳人皆様のおかげです。柳恩無窮とはまさにこのことで、私ほど川柳に抱かれ、見守られた倖せものは他にはありません」(昭和63年9月筆者宛絶筆)

★次回は「**奥田白虎**」

柳籠裏三篇研究（二丁）

佐藤要人・八木敬一・七久保博
岩田秀行・紀内恒久・西原　亮
大野温干・青木迷朗
鈴木倉之助　故岡田　甫

20　**壱人して土手をかけるとげびる也**

八木＝土手は吉原に近い日本堤。吉原が近付いたので（多分船で着いたのではあるまいか）、血気にはやって待ち切れず、一人だけ駆け出すとは、まことにハタから見て品が無い。

七久保＝素見の連中の一人ではなかろうか。四ツ手で行くのならわかるが、土手を駆け足でとは、何となく野暮ったいという意味か。

岩田＝賛。四ツ手でかけるのがイキなのである。

西原＝岩田さんに賛。素見ではないでしょう。むしろ素一分でありましょう。

佐藤＝岩田氏説に賛。ただ素見の一人でないことだけは確か。駆けるのは遊意のさせる業であり、一刻も早く女に逢いたいからであろう。素一分の客とする西原さんの説が妥当か。とにかく安い客である。

鈴木＝小生も素一分の安い客に賛。大引け近くかけつける。

岡田＝鈴木説の通り。

21　**威有てたけき骨柄が赤ク座し**

八木＝論語巻の四、述而篇第七、三十七章、終章に、

子温而厲。威而不威。恭而安

とあり、この文句取り。不動尊の像を詠んだ句としたい。

七久保＝威有ってたけき骨柄とは浅黄裏の武士を指しているのであろう。遊里では坊主でも持てるに浅黄は余程毛嫌いされたようだ。赤くは怒りをもってという意味であろう。

どのうらへ行ってももてぬ浅黄うら　六24

岩田＝七久保説、明解と思う。浅黄を「匂ひ」で示した。「論語」の文句取りは、

女房の威有ってたけき朝かへり　拾じ20

佐藤＝論語の文句取り説は明解。ただ「赤く座し」に異説を出したい。これは芝居の所詮「赤面」であろう。すなわち敵役、たとえば、時平とか将門といった悪方のことで、

所作の内まじいりましじり赤っつら　拾二15乙

などと同様、舞台上に豪然と構えている風情を詠んだものと思う。

鈴木＝小生は吉原句にとっていました。新造。

岡田＝つまり芝居の赤面めかしい表現にしてあるのが句の山で、ふられた浅黄裏。

22　**ワキと供とを兼帯の御万才**

八木＝よくわからぬ。御万才は万才薬の事を言ったものか。

七久保＝周知の通り、ワキ・供の語は能狂言用語。万才や才蔵を表して正月のあのふざけながら演じる様を詠んでいる。でも興に乗じかなりバレ的なものをやったらしい。

　万才ははねられるだけはねていひ　九7

岩田＝「兼帯」は二つをかねることと思いますが、その点わかりません。また、どうして「御万才」と、「御」がついているのでしょうか。

西原＝三河万才の太夫は「折烏帽子に麻布の素襖、大小二刀帯云々」、それにくらべて才蔵は「無袴、是亦米袋を携ふ」（守貞漫稿）。才蔵はワキと供に、供をも兼ねているのだ。「御」は別に敬語でなく、字たらず防ぎとヤユをふくんでのつけたしである。

佐藤＝西原説に賛。万歳に御を冠した句もいくつかあり、敬称というほどのことではなく、ちょっと丁寧に呼んだ感じである。

鈴木＝西原さん御明解。才蔵です。

岡田＝同。

23　**不届な四火をすへるは三味せんや**

八木＝四火患門の灸等といい、背中へ四角の紙を張り、その四隅に灸をすえると、腎虚等に効くといわれた。

　三味線の皮は猫のメスのそれもサカリのつく前のものが上等であるが、問題は「八乳」である。現在、三味線の皮で片面八乳のものはないようだ。したがって、両面四乳のものを八乳といったものか。すると胴の裏側に張るのは背中の皮ですませる事ができる。即ち生きた猫の背中に四火の灸を据え、それが治癒した時、殺して皮を作ると丁度四乳のように見える。そこで三味線屋……四火の灸は不届きと言った句であろう。

七久保＝不届きなという語からして後ろめたい、ごまかしを意味しているのではなかろうか。例えば、犬とか馬の皮などで四火を据えて雌猫らしくごまかす。

　安い三味線は太鼓の皮で張り　一四15
　三味線屋錠をおろして干して置き
　天五表2

岩田＝『宝暦元来集』に「三味線の皮の四ツ乳八ツ乳迚、猫の皮なりと古へより云ひしが兎の皮なりと云へり誠敷事也」とある。

　三みせん屋うしろくらくも灸すへ　二11

佐藤＝礎稿＋七久保説＋岩田説で完璧と思う。猫の皮は高価なので、犬の皮を用いることが多いのである。

　犬に灸据えると猫にばける也　一九5

鈴木＝賛。

　犬へ灸とは欲張った三味線屋　一五六15

岡田＝同。なるほど片面八ツ乳はないでしょう。小生、糸にうといため教えられました。

24　**中啓で和尚年玉さし図する**

八木＝中啓とは一種の「扇子」のようなもので、寺でも偉い坊主しか持てない。檀家の年玉の指図をしている場面であろう。

西原＝賛。軍配に見たてたものか。

佐藤＝賛。お寺さんの年玉は、多く納豆が使われたこと、多くの川柳に詠まれている。

　わきの僧納豆箱を持ってかけ　一五29

鈴木＝賛。中啓は和尚の持ち物。

　中啓で自慢しているかきつばた
　安九桜2

岡田＝同。納豆箱をくばるのです。

川柳塔用箋（一冊二〇〇円）
一冊二五〇円・二〜三冊　三六〇円
※数量がまとまれば、「ゆうパック」がお得です。

同人特集

私の一句

歌垣の呼び合う兵の花芒
大空を舞台に踊る奴凧
はげましの言葉を耳の奥に溜め
ひとりだけ叫ぶと波にさらわれる
いのちの火とろとろ人の和を信じ
余命いくばく時間は私の宝もの
そんな事又失言の塩送る
襟巻の狐よっぽど美人です
ゆっくりとわがものにする下り坂
公園の鳩株式市況聞かされる
太陽も夕暮れ時はやさしいね
ひたむきに生きて急がぬ倶会一処
花びらの重みひとひらずつ違う
自分なりの解釈をして争わず

八尾市 西尾栞
大阪市 井上白峰
米子市 小西雄々
海南市 三宅保州
和歌山市 児島与呂志
堺市 高橋千万子
寝屋川市 北田綾子
黒石市 相馬英三
倉敷市 水粉千翁
竹原市 信本博子
呉市 槇田英詩
和歌山市 野村太茂津
米子市 八木千代
大阪市 小林トメ子

孔孟子三国志悲嘆天安門

闘ってこそ人間をとり戻し

お迎えは則天去私になった頃

不摂生してストレスを飛ばす秋

筋一本通して遠くなる灯り

老いまじきなさけ受けまじ万歩計

腹八分権利も八分丸く生き

親と子のいい約束は風呂の中

浮き草の定めで群れを出たがらぬ

弁解をするから濃ゆくなる疑惑

逢うている安らぎを見る夫の瞳よ

人の名がすぐに浮かばぬもどかしさ

望郷の想いで結ぶ夢いくつ

平成へ賭ける昭和の尾骶骨

絆かな孫が小さく来て座る

青春も戦野も夢幻昭和消ゆ

この帯に消えない結びじわがある

盃をまわして票を読んでいる

ある日ある時無口になって村捨てる

西宮市 瀬尾六郎太

今治市 越智一水

姫路市 人見翠記

川西市 松本ただし

和歌山市 桜井千秀

福岡県 横地正好

美祢市 安平次弘道

岡山県 小林妻子

大阪市 津守柳伸

和歌山市 青枝鉄治

岸和田市 清野こう

豊中市 上田登志実

広島県 田村新造

伊丹市 樫谷寿馬

大阪市 正本水客

尼崎市 春城武庫坊

尼崎市 春城年代

岸和田市 高須賀金太

和歌山市 堀端三男

着飾ってみても昔に戻れない
お隣の猫が夕食時に来て座り
すかんぽや飢えし暮らしの話など
知らぬ間にとし取っていた母の眉
似たような昔があった子の謀反
悪いことしたと善人だけ思い
元気ですが神のつぶては受けている
再会はさくらの花の咲く頃に
限界に来ても妥協の道を閉じ
繋がれた犬に安らぐもののあり
にんげんの動物めいてくる末期
定年が近く義理チョコまでも減り
とうさんと白いごはんに飽きぬ幸
忘れない文字てのひらに妻と書く
ジンクスを賽銭箱へ入れておく
石ひとつ軽い命の名を残す
背を向けた島に余生を住んで老い
鬼も蛇もみんな出といで春ですよ
女房の何と不思議な記憶力

高槻市　川島諷云児
岡山県　荻野鮫虎狼
奈良県　長谷川春蘭
米子市　石垣花子
神戸市　仲どんたく
今治市　矢野佳雲
米子市　田中亜弥
和歌山市　山川克子
岡山県　岩道博友
唐津市　浜本ちよ
唐津市　浜本義美
倉敷市　野田素身郎
島根県　堀江芳子
島根県　堀江正朗
松原市　小池しげお
寝屋川市　稲葉冬葉
箕面市　椎江清芳
京都市　都倉求芽
倉吉市　奥谷弘朗

正直者だろうはだしで歩いてる
お嬢さん鼻からけむり出さないで
扁額の「誠」うすれて来た歴史
鼻歌が聞える今日はいい天気
離婚して娘になれたわけでなし
終章へ花咲く種を播いとこか
十五夜の秘密を明かす糸車
年金の坂道妻の愚痴も連れ
微笑めばほほえみうつる朝の窓
同じ絵の中で踊っている私
山門をくぐる心に経がある
旅のプランに銀河の魚釣りがない
思想無い小石の角が丸くなり
ご近所の売値で我が家値踏みする
乳母車押してる顔が嬉しそう
老いて今死後の世界の地図を書く
赤肌の山に安らぐ樹を植える
明日の為精一ぱいに今日生きる
平成へ昭和の靴を穿いて出る

奈良市　天正千梢
鳥取県　新家完司
廿日市市　林野甦光
富田林市　新開千代女
出雲市　板垣夢酔
岡山市　井上柳五郎
出雲市　石倉芙佐子
和泉市　西岡洛酔
倉敷市　小野克枝
米子市　青戸田鶴
岸和田市　芳地狸村
倉吉市　渡辺菩句
鳥取県　松下たつみ
羽曳野市　佐野白水
西条市　片上明水
貝塚市　行天千代
鳥取県　羽津川公乃
大阪市　黒田真砂
青森市　工藤甲吉

自信過剰だんだん酸素薄くなる
メロディーに乗る句に出会う嬉しい日
男を選ぶ基準としての父がある
丸い背な亡母の歩んだ荷の重さ
寒い水いっぱい呑んで力瘤
風は身軽で悪口ばかり言う
金の世を横目に生きて考古学
毛糸玉もう遊ばない猫の春
手のひらに皺が残っただけのこと
百歳を生き穏やかな仏顔
難民の怒りが叫ぶ神のエゴ
単刀直入失うものは俺にない
この人に笑顔だけならあげられる
温度差を部屋に持ち込む見舞客
寒波去り夢をはぐくむ蘭の鉢
浜木綿に滴となりて月の恋
子を五人産んでひとりの米を研ぐ
土筆坊季節変調に周章たり
捨て去って心も軽し身も軽し

下関市 石川侃流洞
静岡市 渥美弧秀
大阪市 金井文秋
吹田市 茂見よ志子
倉吉市 淡路ゆり子
弘前市 波多野五楽庵
寝屋川市 堀江光子
豊中市 辻川慶子
高知市 北川竹萌
守口市 野呂右近
河内長野市 井上喜酔
竹原市 山内静水
弘前市 真喜内實
倉敷市 田辺灸六
出雲市 小玉満江
鳥取県 林露杖
高知県 赤川菊野
柳井市 弘津柳慶
倉敷市 本田恵二朗

いつみても母の乳房のような山
人生の花は散ったがいぶし銀
掌に乗せるとたわいない喧嘩
錦秋の野をチンチンと行く電車
気がつけば引き返せない位置にいる
春の水水車小屋までまっしぐら
寝たきりへ話相手になりにゆく
いいことがありそう雀が窓に来る
肩書は愚妻とかいておけばよい
面壁九年達磨大師と蛞蝓と
赤ワイン似合う小さな江戸切り子
ストレスをファイトに替えて朝の靴
むつごうて穴子にしとく土用の丑
亡母の味思い出してる祭ずし
信玄の秘湯にギャルの顔浮かぶ
悠々自適明日は雨の方がよい
旅だちの日はお天気がよいように
新しい柄に馴染めぬ古稀の帯
空青く花紅くあれ太郎の絵

寝屋川市 平松かすみ
加賀市 細呂木魯木
富田林市 松本今日子
松原市 谷垣史好
大阪市 神夏磯典子
倉吉市 渡辺独歩
岸和田市 古野ひで
大阪市 中川滋雀
豊中市 安藤寿美子
八尾市 鷲見章
茨木市 堀良江
高石市 浅野房子
姫路市 植村客遊子
姫路市 中塚遊峰
大阪市 神保拓生
奈良市 宮口笛生
松山市 谷信夫
熊本市 有働芳仙
大阪市 本間満津子

落ちそうな学生ばかり絵馬を買う
森の深さふかさへ息を深く吸う
てのひらを返すと男でなくなるぞ
神代から人とお酒のいい絆
足音が高い男の上り坂
ふるさとに花を絶やさぬ母がいる
墨つぼの昼寝が少し長すぎる
曲がり角からいのちが欲しくなってきた
新聞の出鱈目珊瑚礁に見る
苦労した思い出楽しそう誇る
肌着ばかりほして朝湯に気兼ねする
フルムーン女房が腕を組みに来る
絵の上に突然雪が降りつもる
血の動く音が伝わる背中の子
弾まない毬に酸素を足しましょう
ならいっそ口をつぐんでフグになる
茶柱を今日の私は信じたい
青田風宵の蛙は話し好き
鬼と和し仏と和して四十年

寝屋川市 **江口　度**
羽曳野市 **吉川寿美**
和歌山市 **寺田裕美**
和歌山市 **内芝登志代**
和歌山市 **玉井豊太**
鳥取市 **小谷美っ千**
鳥取県 **土橋はるお**
鳥取県 **土橋　螢**
仙台市 **川村映輝**
大阪市 **中西兼治郎**
寝屋川市 **宮尾あいき**
兵庫県 **遠山可住**
米子市 **澤田千春**
八尾市 **宮崎シマ子**
和歌山市 **福本英子**
茨木市 **井上森生**
岸和田市 **島崎冨志子**
平田市 **久家代仕男**
七尾市 **松高秀峰**

青竹を踏む楢山へ登る足

巣立ちする息子と並ぶ屠蘇の席

年金のくらしに酒量衰えず

飽食へ自愛の箸を軽く置く

羅漢さま消費税をどない思わはる

コンパクト女の戦意たたみこむ

勲章の半分妻という祝辞

着陸の姿勢故郷の川光る

花蕾色が出て来て愛される

弱る心臓蟬千匹の合唱に

膝頭おさえ拳の物語

花ビラは踏まずに犬も弾んでる

転がり落ちたところで石は光りだす

お隣の干場のシャツが白すぎる

漠然と拝めば神も迷わされ

いとおしむ命たしかに日が暮れる

父の言葉が残る竹の切り口

巡り会うまでの下絵を何枚も

母の針錆びて夜なべも忘れられ

兵庫県 辻 文平

八尾市 山下 美津留

鳥取市 小林 由多香

大阪市 北 勝美

京都市 松川 杜的

今治市 月原 宵明

寝屋川市 近藤 一途

守口市 結城 君子

大阪府 坂口 公子

吹田市 栗谷 春子

岡山市 時末 一灯

大阪市 松尾 柳右子

高槻市 河瀬 芳子

尼崎市 黒川 紫香

高槻市 竹内 花代子

大阪市 江城 修史

米子市 林 荒介

和歌山市 田中 輝子

出雲市 園山 多賀子

ちぎれ雲ははとのえにしうすかりし

歩こう会考古学者にした飛鳥

子の地図に確かに残す父の森

三猿を守り都会の隅に生く

花の名をかぞえて笑顔取り戻す

太陽へ自分を飾る術もない

翔ぶ子らへ母の祈りの届くまで

それなりの私に満ちた日が続く

メルヘンに遊んでいます孫の守り

ドライブインほっと幌馬車駅に似る

子に意見され口惜しさと嬉しさと

青年の樹は挑戦を忘れない

一日に法事が二つ花吹雪

みな高い次元で物が売れて行く

うるおいを枯らしたくないペンを執る

ままごとのママも支払う消費税

大阪に生れ育って川が好き

この町に生きていっぱい知恵もらう

女かな細い縁が断ち切れぬ

広島県 藤解 静風

大和高田市 岸本 豊平次

西宮市 門谷 たず子

東大阪市 崎山 美子

米子市 寺沢 みど里

米子市 政岡 日枝子

島根県 松本 文子

岸和田市 植山 武助

八尾市 内海 幸生

大阪市 渡部 さと美

宇部市 平田 実男

和歌山市 福井 桂香

豊中市 田中 正坊

豊中市 江口 明光

寝屋川市 柴田 英壬子

岸和田市 原 さよ子

大阪市 岡田 ふみ

八尾市 宮西 弥生

西宮市 奥田 みつ子

駑馬いまだ天翔る夢捨てていず
俺だけの歌が聞こえる独り旅
父はこころに七つの海を持っている
妥協せぬ父頼もしいとも思い
街並みが昔のままで人恋し
ある時は私をさらうような波
古寺巡礼塔も私も秋の色
巣の中に抱いているのは不発弾
慢心が危ない橋を渡らせる
畦道も野良着も老いて柿たわわ
滅ぶものの声を風には任せない
鍋みがく今日の命のありがたし
文章にするとわたしが淡くなる
十二神将えとの仏に願い事
幸を呉れる友あり長生したし
笹舟に乗りたし小川のある故郷
約束へその日桜になっている
群衆となるしか弱者すべがない
ボランティアの視界は不憫な子だけ見え

奈良県 上田翠光
寝屋川市 里小路
大阪市 西出楓楽
高知市 川竹松風
奈良市 米田恭昌
富田林市 藤岡花梢
羽曳野市 田中透太
岡山県 松本元江
岡山県 千原理瑛
松江市 恒松叮紅
鳥取県 中原諷人
鳥取県 中原みさ子
鳥取県 中原汲香
大阪市 町田達子
米子市 菅井とも子
岡山市 行吉照路
米子市 野坂なみ
竹原市 森井菁居
和歌山市 西口忠雄

背負うても抱いても私の重さ
女には過ぎた気骨を惜しがられ
生かされて真実一路の旅をする
傘寿今日はじけるバラの絵を描いて
ガーベラはとてもはっきり物を言う
飽食の猫にふざけているねずみ
好きだから騙し舟など折りましょう
頼りたる君なき余生鎧着る
核と核の狭間に生きる赤トンボ
火の鳥よなぜそれほどに火を食べる
ころがされ転んで丸くなった石
影法師私の席で待っている
知恵熱か突如わたしが燃えてきた
順番に咲く花さえも世が変る
倖せな余生と思い上を見ず
吉野ヶ里又康平の夢の旅
海峡を渡ると風が肌にあう
父の日も頭の中はカネのこと
過去の絵にこだわっている赤トンボ

和歌山市 西山幸
吹田市 藤村〆女
守口市 羽原静歩
富田林市 和田維久子
島根県 小砂白汀
島根県 石田清泉
島根県 松本はるみ
島根県 藤原鈴江
島根県 岸本輝水
島根県 細木歳栄
島根県 北川民子
島根県 河原恵美子
島根県 小田川智重子
河内長野市 植村喜代
唐津市 久保正敏
唐津市 田口虹汀
唐津市 山口高明
鳥取県 谷口次男
米子市 光井玲子

天と地と人の恵みを享けて喜寿
一日一句疎かならぬ米を研ぐ
おにぎりと次元が違う握り飯
叱られたぬくさが残るのも絆
仮縫いのままで終った恋いくつ
てのひらに哀しく溜まる女の荷
ロマンスは内緒内緒で海は凪ぎ
わが家には宝はないが妻がいる
お元日おどけて夫の肩を揉む
孫の背丈こちらも応援しています
陛下病み給う昭和を引きずって
平成を生きるバリウム飲んでいる
骨埋める土地でゆっくり生きている
花のころは花に流れてゆく命
冷や奴いのちの先のうす明り
齢ですね靴下までが匂わない
生きているいのちが汚染産むそうな
帰路いそぐピエロに星が降りかかる
株下がり僧侶読経がつまりがち

和泉市 岡井 やすお
和歌山市 坂部 紀久子
和歌山市 若宮 武雄
桜井市 岩本 雀踊子
和歌山市 木本 朱夏
尼崎市 奥山 美智子
岡山市 川端 柳子
藤井寺市 笠原 吸江
松原市 北野 久子
大阪市 鈴木 節子
新宮市 大矢 十郎
松原市 玉置 重人
京都府 田中 笑風
松原市 佐藤 奏月
八尾市 高杉 鬼遊
泉佐野市 阿萬 萬的
大阪市 神谷 凡九郎
岸和田市 福浦 勝晴
藤井寺市 福元 稔

世辞一つ言わぬ鏡がにくらしい

巣作りの上手なお嫁さんを待つ

雲海に寝ころがりたい山男

口下手を除けば頼りに出来る部下

てんびんのくらしが残る父の肩

一日一善何も出来ない日が続き

ちぐはぐな話も聞こう老父じゃもの

安いものたんと抱えて母帰る

着せかえ人形かくて総理が誕生す

秋空のどこかに嘘のある散歩

意地通し蓼喰う虫になっている

仏壇がだんだん大きくなる節目

渋滞を見ながら歩くおばあちゃん

縋る樹があっておんなとして生きる

揺り椅子の老母メルヘンの中にいる

竜宮へ行く亀にならついて行く

ほんとうは逃げる気のない街の鳩

陛下病み給う昭和を引きずって

老司祭黒にも無垢の衣あり

大阪市 藤田頂留子

大阪市 小出智子

羽曳野市 塩満敏

高槻市 辻白渓子

大阪市 吐田公一

大阪市 西田柳宏子

藤井寺市 吉岡美房

堺市 河内月子

堺市 藤井一二三

羽曳野市 榎本吐来

岸和田市 宮園射月芳

富田林市 板尾岳人

堺市 河内天笑

和歌山市 松原寿子

西宮市 林はつ絵

西宮市 西口いわゑ

西宮市 秋元てる

新宮市 大矢十郎

豊中市 橘高薫風

—同人吟

秀句鑑賞

—前月号から

黒川紫香

久しぶりの秀句鑑賞、今回はどこにでも転がっていそうな身辺句から拾いました。

御座候の列に並んで御座候

浅野房子

御座候とは俗にいう太鼓焼、または回転焼の事で白餡黒餡があり、適度な甘さが好評で姫路が本場。御座候という名も面白いのでよく売れている。そこで私も並んで御座候。

茶粥など用意してある法話聞く

林瑞枝

静かな禅寺のひとときが浮かんでくる。ことことと煮える茶粥の匂いが届いて来そうだ。

鰯雲ギョーザが食べたくなってくる

安藤寿美子

雲にもいろんな形があって楽しませてくれるが、鰯雲は斑点の列状が美しい。それをギョーザに見立てる寿美子さんは食いしんぼだ。

大臣になって一寸先は闇

吉岡美房

大臣になった途端、旧悪が暴かれるのも時世か。叩けば埃の出る御仁は気をつけて。

海の子はプールで泳ぐのは嫌い

奥谷弘朗

荒々しい浪で育った海辺の子は、プールのような動きのない水では頼りないのだろう。

父似だと言われて淋しい父知らず

辻文平

生れ落ちた時にはもう父がこの世に居なかった。大きくなるにつれ父似だと言われてもピンと来ないし、味気なさを感じるばかり。でも独りになるとそっと亡父の写真を見る。

交替で母看取る子等の眼も赫い

筒井朴竜

奥さんの交通事故でご入院以来、看取られるご家族のご心労は如何ばかり。早いご快復を祈って止まない。

千の鈴つけて倅せ呼ぶつもり

政岡日枝子

人間の欲には計り知れないものがある。数さえあればと思う日枝子さんの願いに、ほのぼのとしたものを感じる。

呼び出してくれる友ありペダル踏む

寺沢みど里

生き生きとした心がこの句に漲っている。出たくて仕方がなかったが、家族の手前辛抱していると誘いの声、待ってましたとばかりに。

先ず亡夫に報告がある菓子の折

福本英子

いつも留守番をして居られるのは、仏間のご主人の遺影である。いただいた菓子折を供えて話すのは果して何だろう。一番、愉しいひとときだと思う。

よう値切る妻で少うし離れとく

江口度

値切るのが上手な妻のやりとりを、少し離れた所でてれくさそうに聞いている夫の姿にユーモアを感じる。

そっと手を掛けてくれてる思いやり

川崎秋女

ふと気がつくと、夫の手が病身な妻の肩を支えるように触れている。言葉では言わぬが、夫の優しい思いやりに目頭が熱くなる。

あたたかい息をしている木の玩具

新家完司

完ちゃんらしい温味と柔かさがある句。木の玩具のよさがしみじみと出ている。

オッチャンと呼ばれて嬉しい二度の職

田中隆二

形式ばって袴を着た職場より、給料は安くても俺とお前でつき合える二度目の職の方が、余程楽しい。特に若い者からオッチャンと親しそうに呼ばれるのが嬉しくなる。

新空港噂話をする魚

片岡智恵子

大阪湾はいま、新空港建設で沸いている。日ごと喧噪になる周辺で海の魚たちはどんな気持でいるのだろうか。



黒川紫香選

雑草の根っ子を初春に包まれて
大樹からの便りの重み噛みしめる
千枚の鏡へ君の面影を
人間くさい鬼と出逢った夜が和み
戒めのなかで気ままが顔を出す

浜田市　中尾まゆみ

仏壇に好物供えふと空し
教え子が酒下げて来た誕生日
消息に犬の家出が出る平和
出不精に旅の土産が又届く
余白には幸せだったと書いとこう

熊本市　宇野昭代

ここで手を切るのも情けかも知れぬ
快調な空気に何時も流される
譲歩する相談色気抜きにする
開店の花輪気勢を上げている

尼崎市　児玉歌子

逃げ腰の自分と出会う水溜り
一日を仕上げる父に燗が待つ
話題ない夫婦にお茶を入れに立つ
一心に愛を編んでる毛糸玉
こころにもゆとりの出来た歌が洩れ
満月が誘ってくれる腕を組む

島根県　山根八重

懸命に毎日皿を洗ってる
一声をかけ合い今日も満ちている
つまずくといつも背中に亡父の声
信念は決して曲げぬ喉仏
やすらぎがある部屋だから行ってみる

米子市　足立由美子

団体の笑いが残る土産店
からませた指が火種をかき立てる
秋の夜長ペットの服を編む平和

兵庫県　森脇和子

痛いとこ突かれて広い海に出る
逆境へ自信をくれたにぎり飯
京都市　松川芳子

豆を煮る母の根気に負けている
その時の気分で叱るママの声
親切を信じる事の難しさ
ペン先に女が残す淡い恋
方向音痴同じ美人と二度出逢い
静岡市　沢田きん

贅沢な悩みを持って生きている
あの人に逢えば優しい顔になる
松茸を食べた話を聞かされる
青春へ種がつきない娘の電話
何んとなく地蔵を拝む通り道
名古屋市　藤井高子

めぐり来る干支春駒の緋も冴える
レモンティー老いには老いの幸があり
ピノキオの足の軋みよ外は冬
地図にない国へと誘う　あかね雲
良かれと吐いた嘘がこんがらがって行く
広島市　流奈美子

ひょっとこのお面が外れなくなった
湯をはじく娘の肌にちょっと妬け
愛情も一緒に煮込む妻の味
電線にいない雀を思いやる
笑いじわ気にしながらも又笑い
富田林市　池森子

つるべ落しの夕陽孤独を置いてゆく
深いわかれを笹舟にのせました
吊し柿　肌に触れてから熟す
神様に頼んでからはよく眠る
父の時計で母の暮らしがまわる
熊本県　大川幸子

詫び欄は気付かぬ程の小さな文字
効能の手ごたえお世辞が拾いもの
居酒屋でほんとに偶然なんですよ
本心が喉元あたりでストップし
近頃は男性も乗る玉の輿
今治市　野村京子

断ち切れぬ絆ひとつが手にあまり
裏切った背を残月が責めたてる
濡れ衣へ胸の段差がひびくなる
花散って以後は無口なおんな達
淋しくてよりをもどした秋最中
大阪市　上田柳影

それまではじっと秘めてた変化球
今日だけの喧嘩も平和すぎるから
そんなこともおましたなあと注いでやり
借景の庭そのままに秋が敷く
バス停に花あり今日のよき暗示

広告に招かれ妻と列にいる
欲どしく深追いをして火傷する
想い出の宿でのんびり妻と風呂
朝早く波と遊んだ宿の下駄
与作がする一生一度の海の旅

尼崎市　森安夢之助

切られ役に徹し何回死んだやら
カラスなぜ啼く寡婦の私も子があるの
魚からみれば毛バリはだまし討ち
秋の灯へ家内企業の座りだこ
そこのけと違法駐車がでかい顔

尼崎市　住谷石舟

君ヶ代には弱いオバタリアンでよい
紀子さんのような佳人がうちもいる
宿帳へまさか人妻とも書けぬ
三の矢を浴びてもタオルなど投げぬ
俺を化かすタヌキが永田町にいた

久留米市　鶴久百万両

触れるもの見るもの秋ぞ病友見舞う
歩道橋寂れる町を見て別れ
野仏があるから拝む散歩道
川に鮭が戻った声で町がわき
壁取れば西も東も縁続き

出雲市　金村青湖

それなりに優しくなってお年頃

寝屋川市　太田藍子

頃合いを見て一人抜け二人抜け
ことわりの電話切るまで緊張し
花博へどうぞどうぞと年賀状
うちの娘にだぶらせて見る披露宴

箕面市　中嶋民子

自分史に添える花なく十二月
指揮権を妻が握って十二月
カウントを数える孫に十二月
老いふたり師走の渦の外にいる
反省をする程呑んだ反省会

尼崎市　山田保蔵

快調だ今日は検診受けに行く
公園でグチ聞く犬があくびする
消費税かからないのは空気だけ
快調にとばしすぎたか子沢山

鳥取県　西浦小鹿

屋根裏に夢をもってるねずみ住む
吊し柿秋の秘密をしゃべり出す
妻という脇役がいる人生譜
木枯しに涙をひとつ盗まれる

出雲市　金森知恵子

届かない思慕一日の昏れやすき
握りしめ掌の温もりは忘れない
この友情いつかは報いねばならぬ
ひと夏のドラマを消して波がしら

和歌山市　森　茜

何ごともなかったように佗住まい
しゃっくりへびっくりさせた細い肩
割箸をさき損ったまま駅弁
どうしたやら眼鏡ずらして怒ってる

藤井寺市　高田美代子

数の子が少しあったらいいおせち
手をつなぐ為に地球は円いのに
定年退職明日から武器はもう要らぬ
手本よりいい絵を描いて嫌われる

吹田市　井上照子

看護婦の優しさしみる黄昏れて
病窓に鳩たわむれている自由
退院の日を待つ指を折りたたむ
迷路にもそれなりにある面白さ

米子市　新正子

冬の子が窓に張り絵をしています
釣りの日はひとりで起きるお父さん
一食の恩を知ってるポチが好き
売り物じゃないが自慢の娘がいます

堺市　宮本かりん

いつになくおつかれさまと出迎える
冗談に本音が包みこんであり
水玉のネクタイわしに似合うかな
着飾ってみてもおんなじシルエット

岐阜市　渡辺杏村

暖かい初春でちらほら千鳥足
予定では一泊だけの親の家
若向きのおせちはハムやハンバーグ
ファミコンで遊び凧など振り向かず

京都市　渡辺圭坊

夫婦独楽コツンコツンとよく当り
週末の愉しさのない素浪人
不器用で浮気一つも出来ぬ僕
塞翁の馬が運んだ幸不幸

姫路市　松本一郎

長短があるから夫婦仲がいい
ナツメロに青春の日をダブらせる
最終の任地余生を過ごす町
あれもこれも流れに浮かぶ泡一つ

尼崎市　的場十四郎

煩悩を静かにさとす月の冴え
トランプのキングあやつる白い指
すこやかな頭に明日の地図がある
言いかわす言葉のなかにある温み

尼崎市　尾宮弘治

クーラーのないうどん屋でよく流行る
名物の朝市　嫁が茄子を売る
過疎の村　鳥居に父祖の名が見える
万歳で見送ったまま額の夫

尼崎市　野瀬昌子

頭の差せり合っているアワダチ草

腹立てぬ夫がそばにいる安堵
ウインクする金魚眩い一人者
子は三人どれも甲乙つけがたし
尼崎市　鈴木良征

人間不信どなりつけたりぼやいたり
さよならと別れて旅の切符買う
ロボットも右へならえが上手くなり
単身赴任　一、二年なら受諾する
宇部市　中村三良

じらされてポケットベルが鳴り騒ぐ
本ものと知ってダイヤが良く光り
風船が割れて惚けから目が醒める
絵ろうそくの武者絵が笑う自衛論
東予市　小山悠泉

野仏の孤独を野菊なぐさめる
一人住む不安は言わぬ負け惜しみ
相槌の拍手が欲しい発起人
美人ＯＬねらわれそうに一人住む
徳島市　宮武まつ女

自叙伝に誇るページのない余生
観光でむかしに逢えた水車小屋
池の面叩く小石になってみる
一言で大きく揺れている波紋
静岡市　浅子まつゑ

紀子さんの十二単衣はさぞすてき
回ってる地球の速さ感じない
運動会どの子もみんな孫に見え
過ぎし事話してみたしコスモスに
熊本県　高野宵草

欲張ったカルチャー余生の日が足らぬ
航跡の向うに楽しい旅が去る
終焉の時に差し出す句を作る
寝ころべば天高くたかく木守柿
川西市　野村静雄

負けておくことを覚えてきて利口
満員車手招きをして譲られる
いいことがあったとみえてよく喋り
妻に世話焼かせる余地を残しとく
熊本県　岩切康子

この怖気見透されてから口を閉じ
そう見れば皆ピクニックに見える客
神宮の巨木に触れて神秘めく
神宮の川に清める手を洗い
兵庫県　酒井靖子

夢がまだいくつもあって煮こぼれる
おしゃべりの女が囲む小さい秋
幸せの余韻枕に敷いて寝る
素焼です器用な言葉知らぬから
酒田市　永沢裕子

冬枯れの公園で聞く重大事
一応は皆善人の初日の出
どの神も縋りつきたい七福神

ストレスを溜めてばかりの弱気者
西宮市　上嶋ふさ子

髪結えば好きな着物も着てみたく
あどけない明日の夢見る子の寝顔
ＯＬの小言聞いてる湯沸器
秋日和母を連れだす墓詣り
和歌山市　堀畑靖子

とんぼめがねかけてはしゃいでみても秋
制服の白さ私を引き締める
自業自得わたしが蒔いた種拾う
目を反らす癖は自信のなさかしら
尼崎市　新井泰子

真夜中の路線修理を虫と聞く
訃報聞く同年齢と知った朝
地下道にだあれもいない靴が鳴る
一族の顔で出ている披露宴
奈良市　米田芳子

青春を語る娘の目がまぶし
天高く車窓に飛び込む秋の色
あちこちが痛い痛いと老いが来る
お隣も別れ話があるそうな
大阪市　亀井円女

待ち侘びる亡母が見えます萩の道
四の五のを言わせぬ夫の薄い背
罪のない可愛い嘘をくれる嫁
不思議です貯った頃に孫が来る
出雲市　岸桂子

石段を登れば一段ずつの視野
拡げれば夢いっぱいのおもちゃ箱
一杯の盃地球が回り出す
山彦をかえさぬ森がふえて来る
佐賀市　江口万亀子

見れば見るほど親父の耳に生きうつし
オバタリアン見本のようなかあさんで
折り紙の袴をはいたヤッコさん
牡蠣フライでささやかに誕生日
和歌山市　山口三千子

わたしの絵の中にあなたの詩がある
青空がつづいて油断してしまう
売り言葉買うてストレス又溜まり
齢かなと思う瞑想ばかりする
尼崎市　吉永伊三郎

一輪を活けると机眼を覚まし
衛星放送が受けて夜疲れてる
寺詣り地図を広げて京の秋
片道の切符で逢いに行く女
和歌山市　内田結実

学生さん朝の電車でよく眠る
たっぷりのお世辞をもらう菊の鉢
言い勝った悔いから長い夜となる
夜叉の顔写す鏡を拭き清め

部長席まともに見れぬ二日酔　　熊本市　北川一進
お見合に母もすこうし塗る化粧
蛇の目傘似合う芸妓の舞扇
逆風に惜しくも逃がすホームラン　　尼崎市　木下義嗣
あきらめがついて男を送る朝
夏つかれ人間ドックで一休み
敗戦の歴史を綴る古日記
売出しの名物品は値が高い　　尼崎市　明壁敏之
秋の蚊めいやと言うほど食って逃げ
釣竿にトンボがとまる秋のくれ
ごちゃごちゃと言うだけ言って帰る姉
金持に金の相談言いそびれ　　尼崎市　中澤向西
トランプの占いだけは吉と出る
北の風道に落葉がまといつく
宅配の母の荷物が温かい
あたたかい縁に小猫も背伸びする　　旭川市　朝倉大柏
銃よりも怖い指先持つ他人
数にいるだけで役立つ顔がある
嘘をつく勇気も持てて幅が出来
蠅一匹叩き落した秋日和　　青森県　福士トキ

さわやかな朝で豆腐がよく切れる
失敗を笑い話にして聞かせ
予算オーバー帰りの籠の重いこと
両の手を合わすと心清められ　　寝屋川市　宮崎菜月
意のままに腕をとられた冬の風
本物のドラマが書ける神の筆
忘恩を思い出させる古日記
年の夜や忘れることが倖せに　　摂津市　木下道子
ゆっくりと寝てなら治る患者増え
デパートで揃わぬ物がある夜店
捨てに行く恋も運んでいる夜汽車
金木犀匂うあたりへしっこさせ　　相生市　中塚礎石
なめられているから結論先に聞く
あきまへん　これからだっせが聞こえてき
総入歯秋の味覚を噛み締める
北風をまともに受けて本音吐く　　大阪狭山市　桜井荘次
愛情の機微に揺れてるイヤリング
一度だけした外泊がきな臭い
戦列を離れて日和を見る男
黙々と皿を洗っている野望　　鳥取市　美田旋風
透き間風吹かぬ障子を妻と張る

暮し向き隣の猫が知っている
馴れてないひな壇とんと落ち着かぬ
ぶつぶつと何やら探す母のくせ
北九州市　香月直平

水槽の金魚と同じ日を送る
産むまいとした三男が田を守る
仏様留守番ばかりさせますね
守口市　森川春子

ギンナンを拾う人見るおじいさん
ギンナンを巡査も一つ拾うなり
紅葉を踏まねば行けぬ塚があり
広島県　森川抜智

もういいよ言うた子先に見つけられ
開けてみましょう外科医あっさり言うけれど
記念写真横向いてる間に写される
鳥取市　西村黙光

木枯しが誘ってくれる縄のれん
故郷の便りが届くおでん鍋
隣よりきれいに窓は飾っとく
鳥取県　市村京子

好きな色と似合う色とがちがう秋
草むらに隠れ棲もうかキリギリス
好きですとうちあけましょうあの角で
枚方市　有松玲子

おにぎりを作る手許を孫が見る
画廊にて白樺の絵に見とれたり

港町窓を開ければ港あり
静岡市　中西雅

笑い声昔のままのクラス会
ヨーイドン園児らの眼のきらきらと
一歩二歩尺取り虫の樹は高い
静岡市　久保きぬ

補聴器が孫の話を聞きたがる
味方だと思いし壁に耳がある
七転び耐えて主役の座を貰う
貝塚市　池田寿美子

プレッシャーをかけられ強い貌になる
充電に知恵を貰うたクラス会
湯の宿に月下美人とめぐり逢う
静岡市　宇佐美寿美

靴音が晴れた心をひびかせる
底抜けに明るい孫に夢楽し
万国旗明るい声を呑みこんで
寝屋川市　北岡波留吉

お役所の緊張ほぐす花時計
ポスターが画鋲にすがる強い風
狂いながら自己主張する古時計
米子市　小塩知加恵

年金の暮しに寒い十二月
聴診器　嫁の不満も聞えてる
親がいて子がいて孫の笑う声

堺市　山本半銭

九時間の時差へ夕陽がついて来る
ながき旅へ雨はやさしく降ってくれ
鳩を追い鳩のつぶらな瞳に出逢う

西宮市　菊池トミエ

絵馬堂の百の願いに風さわぐ
陰日向ないのに仕事はかどらぬ
厄神に祈る石段四十二

枚方市　森本節子

蔓紅葉客くる日まで散らないで
孫よりの花束の名はもう忘れ
紅葉散る葛城古道に風はなき

島根県　高野律子

土の香を我が物顔の父の鍬
街路樹の落葉ころころ吹留り
生きてゆく顔が並んで朝が混む

岡山県　土居ひでの

片言が背いています真正直
故郷の秋をはぐくむ栗がはぜ
受胎告知ゆっくりゴング響く朝

芦屋市　根来敬

カナリアが無心に鳴いて夢誘う
おとぼけが上手で今日も恙ない
平穏に暮らして何か飽き足りぬ

熊本県　増田一乗

菊作り土造りから教えられ
万粁に近づく今朝の万歩計
名筆の馬は万年生きつづけ

十和田市　阿部喜久江

無人駅花一輪に迎えられ
倖せは可愛い孫がそばに居る
靴の紐結びなおして余生生き

川西市　西脇冨美

あの日から手品のように涙壺
寄せ書きはあなたの横へ小さく書く
テレビ故障じっくり本を読んでいる

尼崎市　佐野六浦

松と梅小唄稽古の音合せ
大海で泳ぐ金魚が夢を見る
スイッチで遠隔操作をする科学

羽曳野市　福田満洲子

仕事するだけに生きてはるみたい
雨の日も風の日も好き万歩計
姉妹想い合ってて口喧嘩

鳥取県　太田幸枝

八ツ当りされた茶碗が欠けている
女です宝石の店のぞく古稀
ひと山をくずし出湯のジゲおこし

伊丹市　小熊江美

手品師のトランプ指から沸いて出る
息子の家の頭金だけ出してやる
説明書面倒がって人に聞く

唐津市　野田旭恒

障子張る妻の手元に老いを見る
厳めしく故人の表札揚げてある
甘酒とおこわで済ますお祭り日

東大阪市　大平太一郎

美しい老いを求めて辞書を繰る
鈴虫に励まされもして八十路越え
気持よく酔えばつい愚痴罪な酒

十和田市　阿部進

無愛想な顔でも心あたたかい
閉山に涙を見せた山男
運動会風船割りにかりだされ

砂川市　大橋政良

真面目くさって音痴の歌を聞いている
目を洗うとても楽しいものを見た
虹を摑んだこの手しばらく洗わない

高槻市　芦田静江

朝日まん丸新居に光る床柱
火の章に悔いは残らぬ丸い背な
フルムーン湯の町ぬくい返り花

京都市　小林英子

白い雲透かせて塔のもの想い
もみじ一葉秋を彩る京料理（梨ノ木神社吟行）
出来心なんて男の捨台詞

枚方市　中山おさむ

忙中閑しばらく冬の音を聞く
無記名に真正直なアンケート
温もりを忘れぬ手紙したためる

兵庫県　奥野テル

まだ女残り火抱いて風に佇つ
ねぎらいのひと言うれし老いの背
柿ひとつ残して里も冬仕度

広島市　名和喜一郎

妥協癖ついて握手も軽やかに
割勘に負けないだけは飲んだはず
健康に関する本を読んでいる

新潟県　高野不二

保険屋に結局負けた判を押す
試着して覗いて心満ち足りる
歩いてばかりの蟻もいるはずだ

豊中市　三宅つえ子

喧嘩することもなくなるさるすべり
会ってみたい顔が写真の中にある
こおろぎの声を引き摺る車椅子

兵庫県　倉垣恵美

明暗が分かれる場面に居合わせる
殺意などないのに蜈蚣だけは別
草の実をあちこち付けて夕御飯

出雲市　原章峰

釣竿の先から夕日落ちていた
胴上げの心地　女は夢心地
医者の卵と軽い会釈ですれ違い

肩書がついて足音変えている
終点に着くまで座る椅子となる
波風が立つのが見えて輪を抜ける
　鳥取県　美浦美代子

あれからは村へ帰らぬ渡り鳥
ポケットでかるい財布があくびする
欲求不満の顔で雨音聞いている
　鳥取県　黒田くに子

口紅を落とせば疲れどっと出る
ほろほろと指にこぼれる萩の恋
日記買うしみじみ今年ふりかえる
　鳥取県　中村幸代

窓全部カーテン引いて帰り旅
コスモスにゲートボールの高い声
門柱に頬杖ついた松の枝
　伊丹市　猪原石荘

寝たきりの見舞泣かれて困り果て
大欠伸隣も講話あきたらし
咳払いもう起きている母の部屋
　静岡市　永倉柳華

一坪の庭それなりに四季があり
家中を明るくさせる孫の唄
全身で媚びる子猫を捨てられず
　弘前市　村田善保

こっそりと盗んで磨く芸の道
慌てると足音までが狂い出す
足音に少し本音見せて置く
　鳥取県　山内芳江

元朝や先ず仏壇にお目出度う
齢寄せてまぶれてこない家の猫
煩悩が浄化するころ夜は明ける
　鳥取県　乾隆風

消えそうな火種へかかるいい電話
運動会孫を探すに一苦労
再会のよろこび若い服を選り
　静岡市　片平静代

生甲斐をくれるライバルなら欲しい
頂点に立つ夢だけは捨てず老い
尻餅をついてゆっくり空を見る
　鳥取市　松本伊都子

決断をしたら後ろは振り向かぬ
三輪車乗る子はやたらベルを押し
ハイヒール丸い背中は似合わない
　静岡市　小木久子

善人の顔で聞いてる除夜の鐘
熱演の一人芝居の幕がおり
都会の夜溜息に似た風が吹く
　吹田市　山本希久子

紅葉のバスの中まで染め尽し
稲刈に自動車でくる若夫婦
部屋中が明るくなった青畳
　静岡市　増田扶美

大阪市　今西静子

恋人に犬は好きかと遠慮がち
み仏と対話がしたい古寺めぐり
本棚に拝借の本忘れられ

島根県　松本聖子

病人へまことしやかな嘘をつき
洗濯の泡へモヤモヤ流し込み
ワープロの手紙もらって寒くなり

豊中市　村上とく子

卒業写真でっかい夢を抱いていた
カチンコが鳴って言えなくなるセリフ
名曲に酔ったふりするリサイタル

尼崎市　新井朋子

かたつむり家を探しに旅へ出る
風になる私を誰も気付かない
ここだけの話とうるさい週刊誌

鳥取県　岩原喬水

市場籠一円玉が怒ってる
福祉国家国民みんな病んでいる
怒っても親なればこそ金をくれ

岡山県　伏見すみれ

普段着のままの見合が見染められ
エプロンのままで友情かけつける
四面楚歌　森の出口が見付からず

岡山県　後安ふさえ

子と孫と住む幸せをかみしめる
冬の蠅叩けば悔いが手に残り
どんぐりの仲間でいつも歩が揃う

米子市　服部朗子

秋の個展絵とは思えぬざくろの実
いさめても眉つり上げて逆う娘
思い出が漂う里の亡母の部屋

鳥取市　武田帆雀

年金を鶴の首ほど待つ老爺
碁は止めて家庭教師の来る時間
掛け時計まだなじめない新世帯

鳴門市　八木芳水

泣き顔を見せたら僕の負けらしい
借金の負い目で糸協甘んずる
起き上れないから狸寝入りする

岡山県　富坂志重

夏やせが少しもどった秋の風
クリスマス逢う約束の友が逝き
身ぎれいに老いる話がすきな耳

富田林市　大澤三四子

海鳥は恋しい君を浜で待ち
泣いてる子むげに引っ張る市場かご
大海に夕日が沈む安堵感

静岡市　大村正雄

めでたさを三本〆めでかたく締め

慌てれば後から失敗ついてくる
忘られぬ素敵な恋の名場面
今治市　渡邊伊津志

木の瘤のごとし被爆は風化せず
来客の性格を知る押しボタン
思い切り指を広げて歩く鳩
泉佐野市　大工静子

読みかけのページにはさむ友の文
人嫌い人恋しい八十となりて
赤福の空箱ササ舟乗せている
川西市　田中喜俊

水玉のネクタイ一本で部長です
生き方をかえて友達多くなり
カラオケの嫌いな人と仲よしに
寝屋川市　豊福路子

シャンとする背中をひとつ隠してる
身を引いた吊鐘草を愛してる
子の巣立つ歓びだけに賭ける愛
枚方市　山崎彩子

出来すぎた景色満月の白鳥湖
ふる里に私の座る場所がない
枯尾花昔駅舎のあったとこ
愛媛県　八塚三五島

偕老同穴温い情けのとけ合って
乳房からペットの逃げる反抗期
もったいないと注目される喪の女
松江市　原長三

白雲のカンバス描く赤とんぼ
負けぬ気がどこ迄続く老いの坂
ただいまと付箋をつけて玄関口
鳥取市　池本山人

呼びとめて熱いお灸をすえて置く
大工さんが鮮かに釘ぬいている
理髪屋の椅子が男を眠らせる
出雲市　伊藤寿美

散る花にやさしい嘘をつきとおす
跳んだまま帰って来ない赤い毬
残業の靴が忘れぬバースデーケーキ
鳥根県　菅田かつ子

大根がぶくぶく肥えて冬に入る
人形の寝顔に猫が見とれてる
寂しくはないと強がり言って去に
佐賀市　古川一徳

勝ち負けは言うまい初心に疵がつく
一途さは聞く耳持たぬ青リンゴ
保険屋が万一を説く余命表
岡山県　中嶋千恵子

底辺を明るく生きた母の知恵
眠れぬ夜安眠枕のささやきが
人肌のゆとりで包む夫婦愛

嫁不足四十男も願をかけ
しがみつく未練の枯葉風さそい
五十円出して比叡の鐘をつき
泉南市　坂根流水

愛のあるところに退屈などはない
ライバルは女房という睦じさ
与えるだけの自転太陽の愛無限
岡山県　江口有一朗

何気なく覗いた壺の闇深し
白ばかりすぐになくなる絵具箱
ともかくもひっくり返す砂時計
豊中市　小林一夫

逢うてみるひょっとご縁が出来るかも
口止めをすれば走ってゆく噂
大胆な台詞に少し熱がさめ
岡山県　大石あすなろ

同居して物差違う嫁姑
一杯の酒から本音ポロリ出る
お年玉揃えて孫を待っている
岸和田市　三輪通彦

里帰りする渋滞は苦にならぬ
半分は眠って見ている水戸黄門
ライバルは射程の距離に入れて置く
島根県　加本義良

利口なネズミにいつでも見られてる
助けての声に騙されそうになる
赤い服着るのは五十になってから
田辺市　染道佳明

童謡で今日も明るい朝となる
ばてるほど呑めた昔がなつかしい
迷うほど女性にもてた夢を見た
鳥取市　中居武士

寒風に枯葉の吐息きいている
祖母失格孫が相手にしてくれぬ
仲なおりしたいきっかけ待っている
鳥取県　伊吹富恵

茹栗の甘味微かに秋夜長
初めから尻が引けてる甲斐性なし
羽子板は昔々の美男美女
大阪市　川原章久

又一つじげの文化に陽が当たり
日本一の顔で初孫抱いている
夜の蝶舞えば淋しい鈴を振る
鳥取県　石尾かつ乃

長になり仕事の鬼がついてくる
親方を信じて猿は肩に乗る
神主の子も合格は神頼み
吹田市　廣屋利通

結納をきめて恥かし孫娘のしょさ
岡山県　後安江山

野の花にやさしい心教えられ
秋の菊供えて亡夫の笑顔見る
鳥取県　西原艶子

水平線を眺め安定剤にする
銀婚へ馴れ初め語るほどでなく
家計簿を締めて枕を高くする
泉佐野市　真崎浪速子

脇役はどうであろうとよい主役
晩成の手相と易者うまいこと
母さんがグループにいるレオタード
岡山県　福原悦子

追い焚きがちょっぴりほしい仕舞風呂
幾山河汗と涙の凡夫婦
核心にチクチク触れる老いの愚痴
島根県　岩田三和

豊かだね田舎の豆腐かたいねえ
ジャングルのてっぺんで待つ園児たち
日本海を村の屋根から見るトンビ
姫路市　谷清流

ひと押しが足りず日影に甘んじる
すて猫を抱いて途方にくれている
九回の裏があるさと励まされ
豊中市　滝北博史

サイ銭は妻と一緒でございます
暗闇で身仕度できる戦中派
日に一度メガネを置いた場所忘れ
静岡市　大神静枝

石一つ投げて波紋の行方追う
木犀の香一人占めして散歩する
錫杖の湯に浸る風秋の声（大師の湯　伊豆修善寺）
大阪市　喜多佐津乃

夢を追い夢に願いをかける明日
時たまに素手に受け取るレタックス
引き絞る力が欲しい絵の具箱
藤井寺市　田中孝子

窓ベリの雀に朝寝叱られる
鰯雲みつめて車椅子の母
大阪市　清水利武

女湯の方が喧し露天風呂
気苦労も秋が勝負の菊造り
岡山県　杉本伊久栄

三日月に語りかけたい亡母のこと
菊もよし紅葉亦よしハイキング
鳥根県　今本早苗

病んでみて感謝の気持強くする
子育ての戦い終えて手話ならう
倉吉市　青砥菊枝

つつがなく今日も小鳥の声で明け
ちっぽけな城でもローンない暮らし

溜息をひとつこぼして飾り窓
尼崎市　那賀島　雅　子

二つ三つ咳してさがす風邪ぐすり
鳥取県　前　田　嘉津江

のっぽビル日照権でもめて居る
しみじみとぽっくり寺の会話する
寝屋川市　井　上　すみれ

新車来て親戚中を回り出し
三世代思い思いの部屋の家具
岡山県　牧　野　秀　香

泥水に咲いても純白蓮の花
小春日に釣人点々糸をたれ
静岡市　柳　沢　たま

地球儀で孫に教わる知らぬ国
筆達者　夫の書いた古日記
鳥取県　中　瀬　さつき

泣いた子の寝顔涙の跡がある
夕映えに落葉をのせて川流る
和歌山県　森　三枝子

アイロンでのびる皺ならのばしたい
振り向けば噂の顔がそこにある
岡山県　福　原　辰　江

どの距離にいても通じ合う母子
ライバルがすぐ後ろからくる不安
藤井寺市　武　部　敦　子

札束に縁がないからよく眠れ
ヨチヨチと歩く我が家の王子さま
唐津市　入　江　喜久夫

裸婦の絵の前で見惚れるパパの顔
吸込みの出来ぬ掃除機粗大ごみ
羽曳野市　麻　野　幽　玄

変更をするためにあるような予定表
悪筆へ良く書けそうな筆を選る
静岡市　三　浦　つ　ね

富士の山　雪の化粧が素敵だね
灰皿もぐんと大きな社長室
富田林市　楠　美　子

泣き言を言わぬ娘がいじらしい
潮風と太陽が好きみかん山
河内長野市　大　西　文　次

均等法夫婦茶碗があざ笑う
松茸の話に力入り過ぎ
唐津市　山　口　ふさ子

ゴマ摺りの腹を読まれて逆効果
陽だまりの窓に飾りのような猫
唐津市　福　島　紀　一

パチンコ玉政治がらみのいやな音
秋の天私もうんと食べてます
大阪市　山　北　三三三

仲直りするきっかけとなった孫

口下手に横から妻のたすけ船
寝屋川市　河合時弘

木枯しへ日課をこなす万歩計
青竹を踏んでライバル追っかける
奈良市　井上大

不出馬に続いてほしい人ばかり
パーティーがたのみの政治とは佗し
大阪市　桝本蕗児

道祖神人間臭い顔で立つ
まっとうに生きた証の無位無冠
静岡市　青柳金吾

ミニの足　和服の裾をもてあます
寝不足の顔で下車するブルートレーン
富田林市　山原昭水

今日もまためんこい子馬歌う母
ふる里の黒豆届きお正月
鳥取県　西川和子

三ヶ日過ぎればせわしい母になる
少しだけ風を下さい火が燃えぬ
静岡市　大石たき

へらず口たたいて人に嫌われる
姉の愚痴くどくて耳にたこが出来
竹原市　古田比呂子

髪伸ばしたいなと思う日もあって
秋の蝶この指とまれ欲一つ
青森県　波ただお

イチイの実遠い昔の顔写す
紅葉の奥の家からピアノの音
和歌山市　北山好笑

出かかった言葉のみ込む咳払い
適当が好きな夫で物足りず
米子市　大田みさと

芸ひとつできないままで生きて来た
腹芸で冷たい空気温める
鳥取県　木下芙葉

パチンコの疑惑は出ても玉は出ず
交通安全犬も左右を見て渡り
藤井寺市　楠昭子

猫のように妻も甘えて欲しいのに
善人の夫でストレス溜めさせる
島根県　福間博利

郵便のこない日もあり秋の昏
献金で数十億の家に棲み
大阪市　乾哲静

盆栽をいじる気になり老いを知る
案山子にも時代の波がおしよせる
岡山県　森下正子

友情で貸したお金が行ったきり
留守番の用心棒が先に寝る

団体で行けば気ままな虫が鳴く　鳥取市　森山豊子
朝帰り仁王のように妻が立ち　茨木市　藤井正雄
這うて出た虫指先で殺される
年金を妻の口座に入れて秋　大阪市　堀口欣一
住吉の空晴れ渡り太鼓橋
祭神とまがう老女の美しさ　流山市　神田治
家で妻に管理をされるのも仕事
後列の瞳が恋してる写真帳　堺市　井上たかし
美男美女造り分けたは神の罪
電卓をすぐ手に夢のない女　河内長野市　岡崎実
紀子さんが秋の学園祭に笑み給う
浮気した罪ほろぼしに土産買う　鳥取県　横山房子
体重計乗れば溜め息出るばかり
逆らってすねても夫にすがりつき　鳥取県　幸家単車
美しい夕日がビルに引っかかり
写経三昧極楽行を信じ切る　吹田市　西岡豊

ウインクが赤信号を越えてくる
蒜山の牛を眺めてバーベキュー　青森県　荒田つる
民宿が青息吐息の雪不足
沈む陽の色を都会にとどけたし　標原市　西本保夫
値引きする前の値段が見たくなる
太陽を拝むと天祐まだ信じ　神戸市　岩田信義
まん丸になれないままに昇る月
事務局長母への便りも活字体　鳥取県　武田照女
習性が淋しい人にしてしまう
居酒屋で海の男の裏話　豊中市　額田明吉
救助袋訓練どおりで笑顔見え
半鐘の近づく音に児は怯え　八尾市　片上英一
金もなく芝居も下手な男帰る
顔付きが猫に似てきた女がいる　富田林市　加藤ミツエ
干せるだけ干してふとんの秋日和
ふと目覚めると終電車通り行く　米子市　小西五十鈴
フィルムを忘れたままでハイチーズ

銀行で隠しカメラを意識する
静岡市　山中竹野

万歩計見ては頑張る朝の道
負けん気は半分にして余生行く
大阪市　清水絹子

海が好きテレビの海に深呼吸
靴音の近くで消えて夜がながし
藤井寺市　中島志洋

アレコレと振っていい音の土鈴買う
木枯しに骨折損の庭そうじ
八尾市　松本芙美子

自転車で配達犬もお供する
検診に異常ないのが気に入らず
鳥取県　鈴木芙美

遺伝とや孫も左を良く使い
幸せをかみしめながら今日生きる
豊中市　みきわきみ

赤裸々な人間知ってる戦友会
カレー好き俺はビルマで戦った
出雲市　高橋きよし

台風に遭ってみじめな兎小屋
感激で謝辞も泪で途切れがち
富田林市　浦田トシエ

浮草の蔭の金魚の安否見る
鶏の詩が聞えるのどかな日
堺市　船越夕子

遠慮なく歩くふたありだけの道
好きな事出来る仕合せ老夫婦
鳥取市　萩原ミユキ

若葉マークの私冷や汗かく夫
どなたさんですかと呆けた母が聞く
高知市　山崎一求

遺族らに悲しいかとのインタビュー
リトマス紙色分けをする日教組
島根県　今川三津江

階段が物の置場になってきた
正月のプランへ子らを呼び寄せる
島根県　梅木梅園

雪が降る気配へ重ね着してこたつ
孔雀の羽根が一輪ざしで新春を待つ
大阪市　家村高雄

幕合いが早うて折詰食べそこね
花道に布が敷かれて雪の道
八尾市　向井しづ子

金閣をゆらして鯉がはね上る
不手入れで小菊になって笑ってる
八尾市　橋本信江

比叡山の旅

修羅もみえ菩薩もみえる比叡山
法灯と五体で開く比叡山

妻はそば我はうどんで昼済ませ　唐津市　浜本治幸

同期生俺とお前で花が咲く　広島市　中村要

素寒貧なれど正論持っている

わが宿はひとりぼっちで猫と寝る　東大阪市　岡田寿美礼

夕陽照り老いの心は燃えてます

秋空に兄を慕いて語りかけ　羽曳野市　芦田絢子

遠まわりするから迷い深くなる

目立ちたくない日もあろう胡蝶蘭　弘前市　肥後和香子

使いすてホッカイロの如き男増え

恋多き虹かも好みに染められて　静岡市　西村千代

晴れた日に逝きたいですね葬式日

突然に彼氏を連れて驚かせ　鳥取市　近藤秋星

車中からあれが私の故郷だ

秋の雨永雨となって冬が来る　鳥取市　前田一枝

やっとなれ遊ぶ頃には来る別れ

露天風呂落ちてきそうな昼の月　八戸市　島田昭治

墓参りかすかな音で塔婆ゆれる

若者の車モラルを積み忘れ　鳥取県　石谷美恵子

痩せたいと願いやせれば医者に行く

大漁の無線　家中みな起こし　島根県　児玉幸子

朝霧が包む峯寺も冬近し

暮近し峯寺の鐘にせかされる　大阪市　平井露芳

献金の玉も出しますパチンコ屋

充電は面倒　電池取り替える　藤井寺市　菊地繁男

死に花を咲かせる場所を考える

オイだけで呼ばれた女房この世去り　倉吉市　橋本さつき

やさしいねぞくぞく悪い予感する

駈け抜けた蹄の跡が痛み出す　岡山県　三村美恵子

北風のまだまだ元気写生に出

見まわりを欠かさぬ畑いきいきし　大阪市　平山登代

曖昧な気持で同居は無理でしょう

呆けるまで独りでも住む夢を持ち　岡山市　河野青銅

柿ひかり縁いっぱいに秋を告げ

勲章の顔が並んで文化の日

銀河系

河内天笑選

米子市　八木千代
たましいの疵にふれてはくださるな
受話器から虹の漂うときがある
こだわって舌に季節をおぼえさす
弘前市　波多野　五楽庵
残金はないがカードを押してみる
空を見てごらん疼みがなえて来る
青森市　工藤甲吉
胃カメラをうどんと思いぐっと呑み
老いぼれの戯言として片づける
鳥取県　新家完司
きのうより重いバットを振ってみる
連敗の力士の顔を見ておこう
和歌山市　田中輝子
生まれ変わった日付で発車する日記
泣く時は泣こう切り札何もない
米子市　石垣花子
母の手の中からみんな抜け出した
かまぼこが腐らないので恐ろしい

羽曳野市　吉川寿美
伸び縮みする物差しで世を渡る
百人に百の絵がある初春暦
大阪市　板東倫子
異邦人と思うて孫と一つ屋根
和洋華折衷正月節料理
寝屋川市　堀江光子
無欲だが菊のことには別な人
和歌山市　山川克子
優劣はなし食堂の丸い椅子
島根県　小砂白汀
ねぎ大根おいしシベリア高気圧
尼崎市　奥山美智子
女心に是か非かなどと問うなかれ
藤井寺市　菊地繁男
気がつけば嫌な姑になっていた
北九州市　香月直平
父母のいつ死んだかをよく忘れ
大阪市　神夏磯典子
聞き上手尖った話丸くする
豊中市　滝北博史
何一つ不足ない顔きらいです
出雲市　石倉芙佐子
旅なれて昨日も今日も自由席
和泉市　中川楓
割り切って六法を読む淋しい日
砂川市　大橋政良
すがりたい少し汚れた手でもいい
米子市　林荒介

掌の中にふる里がある雪が降る
米子市　林瑞枝
振り向けば十指に余る熱い過去
鳥取県　谷口次男
臆病でこっそり月に吠えている
島根県　榊原秀子
平和の祈り私一生つづけます
西宮市　西口いわお
一日ぐらい悪でもいいと影が言う
今治市　矢野佳雲
触れ合うと独楽は仲間をぶっ飛ばし
大阪市　家村高雄
一円玉おとした筈に音がない
竹原市　信本博子
筋書はあなたに逢えたから変える
唐津市　入江喜久夫
腹の立つ嫁に可愛い孫が居る
和歌山市　古久保和子
どっこいしょ荷物と一緒に母がくる
川西市　野村静雄
病院で長生きをする誕生日
寝屋川市　稲葉冬葉
恋をしてなさるお肌が美しい
伊丹市　猪原石荘
マラソンの中継風光明媚なり
大阪市　亀井円女
平常心よどこへ消えたか不眠症
宇部市　中村三良
自己暗示かけて生き抜くことにする

米子市　青戸田鶴

生ぬるい私を叱る海の青

岸和田市　古野ひで

彼岸花ひと畝埋めて燃えている

名古屋市　越村枯楢

齢を忘れてゆらりゆらりと夢をみる

和歌山市　松原寿子

マンネリの怖さを背負い渕に佇つ

鳥取県　さえきやえ

いい人のお葬式です晴れました

和歌山市　福本英子

漫画字の礼状が来た秋日和

米子市　新正子

輝いておごりの春のお振袖

鳥取県　西浦小鹿

故郷に桃の流れる川がある

橋本市　岸本木魚

付いて来る母は嫌だが有難い

唐津市　福島紀一

口悪い医者で患者に親しまれ

有田市　松井かなめ

秋風が笑って見てるダイエット

広島市　名和喜一郎

恋人のふりするように妻が言う

堺市　高橋千万子

なかなかの履歴書とほめことわられ

島根県　堀江芳子

威張ってるのはかあちゃんでうまくいき

今治市　月原宵明

素晴らしい会の名付けて飲んでいる

堺市　宮本かりん

にっこりとしてはっきりと断られ

堺市　小西小雪

ひと口で幸福色になるワイン

寝屋川市　宮尾あいき

いつまでも長生きしてねめっそうな

岡山県　山本玉恵

古里のぬくい訛りが消えている

宝塚市　丸山よし津

墓の石久しく水に飢えていた

西宮市　奥田みつ子

観音様にみとれて祈るのを忘れ

唐津市　久保正敏

クレヨンの海メルヘンの波が立つ

唐津市　田口虹汀

玉葱の涙ではない姉の顔

唐津市　山口高明

百姓をしない約束嫁が来る

名古屋市　藤井高子

正札を消して首売る二度の職

堺市　山本半銭

古机磨き自分の城つくる

八尾市　向井しづ子

立冬の夏日がらがら来はせぬか

羽曳野市　福田満洲子

長寿国せかせか歩くことはない

姫路市　大原葉香

左は原発右は古墳を掘り起し

鳥取市　小谷美っ千

手袋の白さ忘れた金バッジ

倉吉市　渡辺菩句

日本の癌はやっぱり永田町

和歌山市　森茜

別荘とロールスロイス嵌めた指

堺市　井上たかし

願かけていっちょ神様試したら

奈良市　井上大

買う人も売る人もない過疎の土地

唐津市　浜本ちよ

役得と思う不遜が国を売る

唐津市　筒井朴竜

海部丸波浪注意の消費税

堺市　近藤豊子

ベルリンの灯影あかるいクリスマス

茨木市　井上森生

霧の中から城柵の古代村

川西市　松本ただし

均等法傾きすぎたヤジロベエ

岡山県　土居ひでの

雑魚遊ぶ母なる川を濁すまい

東京都　吉川一郎

歳時記を狂わせている冷蔵庫

岸和田市　三輪通彦

聞く耳は持たずに増える交通死

海南市　三宅保州

肩たたき役もいつかは叩かれる

今治市　越智一水

パチンコ疑惑ジャラジャラと見送られ
大阪市　大福留吉

下げる度頭が禿げる海部さん
広島市　中村要

尻馬にのって慶弔派手になり
八戸市　島田昭治

あまりにも金にまつわる汚れごと
田辺市　染道佳明

ロボットが来て歳時記を書き直す
寝屋川市　江口度

容赦なく獲物引いてくレッカー車
島根県　岩田三和

考古学うらの畑でポチが鳴く
相生市　中塚克巳

みの虫の風にゆられて三次元
鳥取市　美田旋風

二つ目の柏手妻のために打つ
高槻市　河瀬芳子

ひとを踏み人に踏まれてゆく枯野
和歌山市　木本朱夏

煮えきらぬ男が寒い嘘を吐く
藤井寺市　高田美代子

また明日会うサヨナラで振り向かぬ
大阪市　今西静子

海に石投げても父は帰らない
八尾市　片上英一

モジリアニのあとで一杯新世界
和歌山市　桜井千秀

高層ビルに住んで翼が欲しくなる
島根県　堀江正朗

空想は妻の話を積み重ね
和泉市　岡井やすお

老人の出番来そうと錆落し
岡山県　江口有一朗

陰影の幽玄床の間違い棚
枚方市　森本節子

安全牌一つ握って余生ゆく
米子市　小村てい子

仁王さま赤い鼻緒にうれしがり
米子市　金山夕子

赤ランプ点滅してる溺れそう
黒石市　相馬一花

稲刈りが済んで蝗も出稼ぎに
河内長野市　岡崎実

差しだした手を振り払い友が去る
豊中市　三宅つえ子

長らえて頼る梯子が軋み出す
大阪市　中西兼治郎

かあさんの胸になやみを埋めに行く
弘前市　真喜内實

男なら顔に責任持ちましょう
有田市　生馬芙美子

里の風に逢うて思わず深呼吸
箕面市　椎江清芳

お祈りは効かずやっぱり医者にゆく
西宮市　松永清太

寄書にじんと嬉しい添えことば
大阪市　北勝美

本読もう気だけが焦る老眼鏡
岡山県　小林妻子

一つずつ情けを解いていく余生
松原市　小池しげお

秋深し胃散ぐすりを買い足して
吹田市　西岡豊

酩酊の島の芸者に絡まれる
岡山県　矢内寿恵子

潮満ちて戸籍にひとつ名を増やす
大阪市　稲本凡子

青春は灰色余生をバラ色に
和歌山市　堀畑靖子

ビタミン剤補給昼寝の出来ぬ日は
枚方市　有松玲子

眼の玉の黒いうちさと飲んだ亡夫
高知市　北川竹萌

名も書いて名刺に代える筆袋
芦屋市　根来敬

煩悩が哲学の道歩いてる
姫路市　丁坪サワ子

突っ張るとどこかが綻ぶ老いごころも
和歌山市　青枝鉄治

旅の金たまるとバイト辞めてゆき
大阪市　山北三三三

貧乏を信心しない所為にする
東大阪市　今岡貞人

大声で笑う話は罪がない

羽曳野市　田中透太
年金のくらしに馴れぬ父の靴
倉吉市　奥谷弘朗
風を切る男へ何時も敵が居る
米子市　光井玲子
幸せをつかんで欲しい娘がひとり
兵庫県　倉垣恵美
大胆なこと書きたがる筆を持ち
神戸市　岩田信義
設計図手直し難き老眼鏡
摂津市　もちづき遊美
ひとときを私に還るレモンティー
流山市　神田治
大人の恋をチャンとわきまえてるワイン
寝屋川市　岸野あやめ
おみくじの筒へ迷いを振ってみる
静岡市　渥美弧秀
はしゃぐ子とおどける父の顔とかお
吹田市　栗谷春子
今見てはいけない夫の日記帳
倉吉市　青砥菊枝
初恋の貴方は今も美少年
京都市　松川杜的
占いの好きな女が怖くなる
鳴門市　八木芳水
出来すぎた嫁へ姑口開かず
富田林市　松本今日子
予定にはなかった出会いまだ死ねぬ
羽曳野市　徳山みつ子

ともかくも話を聞いてくれる顔

岸和田市　芳地狸村
たこやきもパチンコも好き老夫婦
鳥取県　西條艶子
気づまりな姑と二人の昼御飯
鳥取市　西尾呼風
秋晴れはガラス戸拭きがしたくなり
藤井寺市　武部敦子
玉子酒のんで充電する私
茨木市　堀良江
ワープロもビデオも知らず世を渡り
唐津市　山口ふさ子
わら草履作った頃がなつかしい
唐津市　浜本治幸
老いたとは思えぬ力まだ残る
唐津市　野田旭恒
どことなく妻に似ている丸い背
羽曳野市　麻野幽玄
人の目にどう写ろうとマイペース
和泉市　西岡洛酔
夕焼けこやけ俺も塒へ急ごうか
岡山県　池田半仙
植木市枯らす一鉢買ってくる
姫路市　中塚遊峰
節くれの指も誘われいで湯旅
茨木市　藤井正雄
もう一度行きたい島の釣れ具合い
大阪市　桝本露児
山彦と話したくて山に来る
河内長野市　植村喜代
太陽が少しゆるんで秋が好き
岡山県　松本元江
北国の情けに酔うて舞うもみじ
岡山県　千原理瑛
山小屋の灯りが誘う里ごころ
十和田市　斉藤劦
僕の秋りんごりんごに包まれる
大阪市　冨上朝世
コスモスのひそひそひこと噂好き
八代市　増田一乗
安否問う小二の孫よありがとう
鳥取市　近藤秋星
一夜にして裸になった木を仰ぐ
鳥取県　乾喜与志
満月がそうかそうかと窓を入る
広島県　田村新造
初日の出宮島ゆきの船の上
枚方市　山崎彩子
新しい年に山茶花紅の笑み
豊中市　辻川慶子
弘法の水はきよらか竹の春
鳥取県　土橋螢
ともかくも六十一歳の春とゆく
伊丹市　樫谷寿馬
別離とはこれか愛染帖を閉ず
豊中市　田中正坊
新年や銀河鉄道発車ベル

投句先＝川柳塔社事務所へ

女性コーナー

前香の花

八木千代選

忠告だろうくずれた朝の目玉焼　　大阪市　西出　楓楽

朝ごとに欠かさぬ目玉焼、それこそ眼をつむっていてもできるほど手慣れたはずなのに。「忠告だろう」と自省することによって負の句にならずに済みました。日常の小さなことも見捨てにはしない心から出るつぶやきを私もまた聞き捨てにするわけにはなりません。

それぞれの口に合わない飯を炊く　　米子市　茂理　高代

家族全員の自己主張のまん中にいて、誰もをよろこばせたくて気使う優しさが裏目うらめに出てゆくとき。「それぞれの口に合わぬ」という小さなひかえめの表現から伝わる激しいかなしみが身につまされるのです。

負けが続いている　割箸を割る音も　　和歌山市　西山　幸

最後まで鳴くこおろぎと夜を更かす　　八尾市　宮西　弥生

円心できつい眩暈に耐えている　　和歌山市　桜井　千秀

祈り忘れてか　そわそわと空腹　　米子市　川上より子

樹は天に届こうとして葉をゆする　　西宮市　西口いわゑ

公園のベンチに指紋残っている　　大阪市　堀　いくの

狙われているらし首の背が痛い　　大阪市　田中　弘子

いずこからおいでましたか菊人形　　倉吉市　淡路ゆり子

川の深さは知らないことにしておこう　　高槻市　河瀬　芳子

温もりの外でひとりの歯が軋む　　米子市　林　瑞枝

坂いくつ転べば逢えるシナリオか　　寝屋川市　稲葉　冬葉

終章を敢てラッキーには書かず　　守口市　結城　君子

悪いこと癖になるから面白し　　米子市　金山　夕子

心にいつも同じものだけ見えている　　河内長野市　植村　喜代

私物化をしないで　わたくしは私　　和歌山市　堀畑　靖子

耐えていた世界が遠くなっている　　西宮市　林　はつ絵

うらんでも詮ないことでねむれない　　尼崎市　春城　年代

本棚に私を叱る本がある　　大阪市　神夏磯典子

走りつづけて母は黒子のまま老いる　　岡山県　矢内寿恵子

わが心ときにはつまみ洗いする　　鳥取市　松本伊都子

あすという日の約束はもう出来ぬ　　米子市　石垣　花子

手垢のついた聖書は父の勲章だろう　　和歌山市　福本　英子

マンモスの骨が光っているサロン　　松原市　佐藤　奏月

気兼ねせず水を呑んだらいいのです　　米子市　政岡日枝子

澄んだ瞳で逢いましょ峠越えたから　　和歌山市　田中　輝子

街で会う男の顔がみすぼらし　　寝屋川市　宮崎　菜月

花博近し　花と語らう話をさがそ　　姫路市　丁坪サワ子

兼好もピカソも失望したらしい　　八尾市　向井しづ子

相談にのれぬ　老母は泣いてやる　　岡山県　富坂　志重

愛の回想ながい黒髪梳いてなお　　和歌山市　松原　寿子

逢えばまた秋の雫が邪魔をする　　富田林市　池　森子

かごめの輪　鬼が一人になる夕陽　　西宮市　門谷たず子

少年のたじろぎに似たフォルティシモ　　名古屋市　藤井　高子

逆上りすれば昨日が消せるかも　　西宮市　奥田みつ子

ひざ折って頼めば神の声がする　　藤井寺市　高田美代子

髪も痩せ厭な女になってゆく　米子市　青戸　田鶴
わたしだけの一本の樹をさがす旅　和歌山市　木本　朱夏
無造作に親展とある　夫あて　茨木市　堀　良江
平凡に生きたし絆つなぎ合う　大阪市　鈴木　節子
年の差は蝶結びして忘れます　弘前市　肥後和香子
両の掌に掬うた愛を過信する　羽曳野市　吉川　寿美
千円の謎が解けたら空腹で　寝屋川市　平松かすみ
野菊よ　わたしの気持がわかりますか　青森県　福士　トキ
メリハリを少し利かそう冬の旅　米子市　光井　玲子
ファンタジーの城で一息入れている　大阪市　町田　達子
お隣と同じパターンで安泰で　兵庫県　倉垣　恵美
遮断機よ　向うの傷は癒えたかな　鳥取県　さえきやえ
伴走の紐を張ったり緩めたり　和泉市　中川　楓
一期一会の絵をくり返す街灯り　堺　市　板野　美子
老いふたり　お伽噺の世にひたり　和歌山市　内芝登志代
羊百匹　秋の夜長を歩かせる　鳥取市　小谷美っ千
食べて寝てぷいと出ていくうちの猫　藤井寺市　楠　昭子
踏まれても自信のついた朝の靴　宝塚市　丸山よし津
かな文字を車が坂を行くように　米子市　服部　朗子
ポケットベルはずして妻と話そうよ　田辺市　染道　佳明
森にゆく道に大きな石がある　米子市　澤田　千春
二杯めのコーヒー冷めてまだ迷い　大阪市　本間満津子
母のよに大根煮えてルンルンよ　倉吉市　青砥　菊枝
このごろはカイロのような母でいる　米子市　新　正子
根性はベビーフェイスの2カラット　大阪市　津守　柳伸

父がふと無口になるは月の夜　堺　市　三浦　和子
赤ちゃんの泣き声　芸術だと思う　米子市　小村てい子
減塩のことは言えないおむすびだ　寝屋川市　岸野あやめ
夫にお茶入れる小さい小さい幸　和歌山市　坂部紀久子
結び目を確かめ合って旅鞄　藤井寺市　武部　敦子
気がかりな事かさなって冬の霧　富田林市　片岡智恵子
ふと逢った視線にひるむことはない　枚方市　森本　節子
愛余熱　微熱のままでまだ続く　竹原市　信本　博子
縫いぐるみきれいに包む嘘もよし　徳島市　宮武まつ女
みなドラマ持って寝ている四人部屋　羽曳野市　徳山みつこ
ジャンケンに負けて泣かない鬼になる　出雲市　園山多賀子
プレッシャーを背負うてまるい貌になる　貝塚市　池田寿美子
胸の炎は消そうコーヒー呑みこんで　島根県　松本　文子
自転車のきしむ音して友が来る　和歌山市　古久保和子
二度の職　隣もほっとしてくれる　大阪市　日阪　秋子
どの枝の実を残そうか木守柿　鳥取市　前田　一枝
豆の蔓　頼れるものを信じきる　大阪市　上江洌勝子
春新た私の虹を追いかけよう　寝屋川市　井上すみれ

一年の早さを感じています。選を試されているという緊迫感を持ちつづけようと新しく誓い直しています。

◇

投句先　〒683　米子市花園町14―8
八木千代

平成元年度　愛染帖賞

受賞作品

八木千代

書きすぎぬように大事なひとへ書く
今はたましいの時間で月の下
書き終えた手紙と二枚貝の殻
思い出のありすぎるのも刑のうち
すすき野に小さな弓を負うてゆく

評　麻生路郎の精神は、「二階を降りてどこへ行く身ぞ」の句が示唆をしている可能性の追求であろう。八木千代さんの句には、心と言葉の格闘が常に快い調和を保っている。新家完司さんの投句はいつも速達便であった。

句柄の斬新さ、大きさ深さは他よりすぐれているが、ややもすると手馴れたところで物を言う匂いがする。それが余裕であるとも言えるが…。岸野あやめさんは、対象を句にする素質にすぐれ、表現は多彩で柔軟性がある。

川上より子さんは純粋な句をつくられる。めっきり力の備わって来たことをたのしみにしていたが、某主幹の受章祝賀大会の作品にもそれが現われていた。

このほか堀江正朗・上藤多織・松本文子・政岡日枝子さんらの作品にも注目した。常に変らぬご支援を頂いた投句者皆さんにあつくお礼申します。（橘高薫風）

新家完司

星を見るみんなよく似た顔になる
仏たち黄河の西を懐しむ
怠ると大きな足が踏みに来る
お月さま一途な芸をくりかえす
まごころを分解してる哲学者

岸野あやめ

雛据えてノラにはなれぬ我と知る
三枚目裏の裏まで見てました
花びらの蠱惑に負けて触れるとき
職退いて人間ダービー観て居ます
女なら少しは妬いてみろなんて

川上より子

蜘蛛の子のはじめての巣に春の雨
恋の文書いている間の草の乱
秀峰を慕い澄んでゆく庭の井戸
あわてまいきっとわたしの角の影
波が消しなかったことにする戦

平成元年度　茴香の花賞

受賞作品

西口いわを

蓋をしておけば誰かが開けにくる
晴着きる女に年はないのなり
マネキンが冷たく笑う飾り窓
パッチワーク恋のかけらを継ぐように
姫だるまやさしい顔で起き上る

評　今回もまた選ぶことのむつかしさを思い知らされながら、十二冊を何度も読み返し、それぞれの独自の世界を見直させて頂いたのでした。作品を掲げさせてもらえなかったが、西出楓楽、佐藤藤子、藤田泰子、茂理高代、林はつ絵、稲葉冬葉、松本文子のみなさんに続き、倉垣恵美、西原艶子、田中弘子さんたちの句も心に残りました。

十二か月間のみなさんのたゆまぬ作品を、どんなに大切に思ったかしれません。ありがとうございました。

（小出　智子）

田中輝子

カーテンを引く想像はご自由に
切り売りのカボチャも自信なさそうな
どこへ行くのと時折聞いてあげている
求人欄読むとファイトが湧いてくる
いつかわたしの足で歩いてみたい月

本間満津子

よく売れて淋しくなった風鈴屋
歩きつつ話せば楽に言えそうな
さっぱりと片付けたので探しもの
防音窓ときどき開けて音を聞き
老いの坂ゆっくり歩けば混んでくる

受賞のことば

平成元年度愛染帖賞



八木千代

賞を受けることは意識していませんでしたが、毎月の愛染帖をひじょうに大切に思っていましたから、どの月もこころいっぱいに作句して投函はしていました。

今まで受けた賞のうちでいちばん嬉しく、そのよろこびは日を追うて大きくなってきています。有難うございました。

愛染帖より銀河系へと移行する、その最後の賞ということの重みにもゆれています。

略　歴

大正十三年　一月二十九日生
昭和三十八年　川柳を知る
昭和四十四年　川柳塔同人
現在、川柳塔きゃらばく代表

平成元年度茴香の花賞



西口いわゑ

「茴香の花賞」受賞のお知らせを頂き、私は自分の耳を疑ったほどでございました。

本当にありがとうございました。喜びいっぱいでございます。この喜びを胸に、一生懸命勉強させて頂く所存でございます。

今後とも、どうかよろしくお願い申し上げます。

柳　歴

昭和五十五年四月　西宮北口川柳会に初出席
昭和五十八年十一月　川柳塔社同人
昭和五十九年四月から高島屋ローズカレッジ西宮教室で橘高薫風先生に師事、現在に至る。

—水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

高橋千万子

姿見に姑となる日の帯の位置

奥野テル

位置の二字に、姑の立場・役割・資格などいろいろふくまれていると思います。嫁さんを迎えるしっかりとした心積りが伺えます。

嬉々として婚家に帰る娘に妬ける

宇野昭代

嫁ぐ娘の言葉が恐い程嬉し

尾宮弘治

二句とも、娘を持った親心の複雑な心理描写、心が打たれます。

横顔をほめられてから首がこる

木下道子

ほめられたことがうれしく心に残り、何時も皆から横顔に視線を受けているような感じがして首がこるのでしょう。ほめられたことが、大きな重荷になりますね。

首一つ捻って人形艶を増し

山口ふさ子

首を上下・左右に動かすことによって、人間よくも悪くもとられます。人形でさえ首一つですから、我々も日々気をつけて首を上手に使いましょう。捻ってがよくきいてます。

豪華な鼾をかいている内気

桜井荘次

愛されていると信じていびきかく

森山豊子

いびきは人間の自然現象です。どうすることもできません。愛を信じている人も、内気で遠慮深い人も、夜は自分の天下です。気楽にいびきをかきましょう。

二番手が好き追いかけて行けるから

片上英一

一番になれば、その先はありません。二番でこそ大きな希望があり、追いかけるたのしみはまた格別なものです。がんばってください。

一日中話相手のない不幸

滝北博史

会話がないということは、ほんとうに淋しいものです。心痛みます。

耳もとで怒鳴って祝う長寿の日

柳沢たま

耳が遠いお年寄りに怒鳴ってがよくきいておりうれしく思います。一日中、話相手のない方へも、だれか怒鳴ってあげてください。

使い捨て元祖は割箸妻楊子

平井露芳

実にその通り。今はどうでしょう。日本は金持ち豊かな国と海外に知られ、難民もぞくぞく来ますが、やがては使い捨てにされるのかと心配です。

ときめきを隠した同士の散歩道

木下義嗣

とても言いづらいロマンスなのでしょうね。

年賀状元気に受けて根競べ

大平太一郎

年賀状は生きている印。元気を相手に報告いたしましょう。根競べは適切な言葉。

古疵を忘れたいのに秋がくる

吉永伊三郎

秋の空過ぎしロマンを呼びさます

松岡久留美

時節柄、秋の句がたくさんありました。秋は一番詩になります。好きな二句頂きました。

電柱へ家買いますのビラ貼られ

太田藍子

時間外に怪我してしまいスミマセン

江口万亀子

失業へ三度の飯は変わらない

中塚礎石

二人三脚もつれたままでゴールイン

豊福路子

消費税割勘出来ず個々払い

田中喜俊

最後にユーモアの五句を頂きました。とても味わいがあり、それぞれの一句で一つのドラマが浮かびます。

川柳展望60号山陰大会

第６回火の木賞発表

日　時　　1990年４月８日（日）10時半開場
場　所　　ホテル一畑
　　島根県松江市千鳥町30　（☎ 0852-22-0188）

◇**話の饗宴 60 分**　　八木千代　奥山晴生　中谷道子

◇**題と選者**　記名係チーフ：高杉鬼遊　　司会：住田三鈷

席題「　　」……

兼題　家　……金築　雨学
　　水　……若草はじめ
　　恋　……安藤　亮介
　　遠い　……八坂　俊生

雑詠（事前投句）……天根　夢草
雑詠……寺尾　俊平
雑詠……橘高　薫風
雑詠……中尾　藻介
雑詠……柴田　午朗
雑詠……時実　新子

各選者秀吟２句呈賞

各２句　雑詠は各選者に同一句を出さないこと

◇**新子なんでも答えます**

○大会終了後懇親パーティーを行います（当日受付）
○事前投句（清記選）ハガキに２句のみ（無料）
当日欠席の方もご参加下さい。
〒689-24　鳥取県東伯町徳万597　　新家完司宛
締切：1990年３月20日
○宿泊受付（ハガキ予約）
〒691　島根県平田市小伊津町1414　金築雨学宛

主　催　　川　柳　展　望　社

事務局　〒563-01　大阪府豊能郡豊能町ときわ台3－4－17
天根夢草方
（☎ 0727－38－1845）

川柳たけはら

〒725 広島県竹原市竹原町田中
山内静水方

本年もよろしく
お願い申し上げます

会長　山内静水
副会長　小島蘭幸
会計　岩本笑子
時広一路
三宅不朽
古谷節夫
岡本清水
岩本文晴
古田太虚
古田比呂子
藤解静風
田村新造
石原淑子
信本博子
山内房子
ほか一同

あけまして
おめでとうございます

柳友各位のご健勝を
神話の里　出雲から　念じあげます。

平成二年　歳旦

いずも川柳会

迎春　おめでとうございます
十一月十一日は十周年記念句会です

川柳塔鹿野みか月

〒698-04　鳥取県気高郡鹿野町鹿野一二七九　中原諷人方
電話（〇八五七）八四―二一〇〇

土橋　螢　　中原義和
森山盛桜　　西浦小鹿
中原汲香　　石尾かつ乃
中原みさ子　伊吹富恵
乾　喜与志　今本早苗
土橋はるお　太田幸枝
田村きみ子　黒田くに子
津村八重子　鈴木芙美
小谷美っ千　谷口百合子
中原諷人　　西川和子
　　森　明美
乾　隆風　　安井博子
小倉利男　　山根八重
木下　覚　　横山房子
鈴木公弘　　吉田孔美子
徳岡本丸　　他一同

ＹＦＣ文化センター
川柳セミナー

西　岸浅大坪人
尾　野野塚田見
　　あ房節紅翠
　　やめ子子葉記
栞

高槻川柳サークル　卵の花　一同

事務局　高槻市富田町１－７－７－905
福盛京童

南大阪川柳会

毎月句会は19日です

気軽にお越し下さい

参会者一同

謹賀新年

川柳塔とっとり

池本山人
岩田秀和
岩田林太郎
岩原喬水
上田俊路
上村洋平
武田帆雀
武田粗粒
谷口侑里
中島一歩
西尾呼風
西原艶子
西尾茶山花
早瀬友夫
春木圭一郎
福田多可志
前田一枝
美田旋風
山沢新風
両川洋々
小林由多香

川柳塔まつえ

原　長三　松江市大正町四八一
福間芳枝　松江市東忌部二三四二
竹内寿美子　松江市国屋町三八一
浦部静江　松江市南平台二一二五
安食友子　松江市本郷町四一二五
佐野木みえ　松江市北堀町九三
松本文子　島根県八束郡宍道町三五一三
久家代仕男　平田市灘分町一三九〇
金村青湖　出雲市大津町大曲二〇九七
舟木与根一　松江市西忌部町六一八一一
豊田巡歩　松江市上本庄一六九一一四
恒松叮紅　松江市雑賀町一六八六
柳楽鶴丸　松江市菅田町二四一九

賀春

むらくも川柳会

（川柳塔同人・誌友）

堀江正朗　加本義良
城角鶏生　川津幸夫
榊原秀子　梅木梅園
堀江芳子　兒玉幸子
錦織文子　今川三津江
槻谷一葉　小田川昭子
山根峰雪　藤井明朗

東大阪市川柳同好会

会長 片岡湖風（カタオカコフウ）

会員一同

頌春

笠原吸江　吉岡美房　中原比呂志　児島与呂志　中島志洋　福元稔　菊地繁男　高津三郎　赤木和子　高田美代子　吉田つや子　高田治子　楠昭子　三崎伴子　武部敦子

他一同

川柳藤井寺

もくせい川柳会

橘高薫風　黒川紫香　安藤寿美子　一瀬福一　上田登志実　江口明光　興津典子　小畑よし子　栗原富子　小森洋子　滝北博史　田中正坊　玉井房子　玉置英子　辻川慶子　額田明吉　春城武庫坊　星野登代子　桝本蕗児　満仲きく子　三宅つえ子　村上とく子

定例句会　毎月第3月曜日　豊中市立中央公民館

謹賀新年

うみなり川柳会

会員一同

〒680 鳥取市相生町３－204　森田熊生
電話　0857－23－4672

姫路　川柳化粧櫓の会

平成二年　頌春

釣　遊光
越田みつこ　増田とし　丁坪サワ子
松浦輝月　松浦大鷹　北山越山　大原葉香　保西岳詩　吉原紅月

植村客遊子
内海美代　菅原朱玉　本多茂章　美原　嘉　福島姫女　福本好花　丸尾はる子　中塚遊峰

あけましておめでとうございます

翠洋会

橘高薫風　末次真
高杉鬼遊　園田文子
山根いつを　寺井東雲
阿山みよ子　中西兼治郎
井上照子　西出楓楽
稲本凡子　藤井正雄
上田佳秋　藤村宏子
上田登志実　堀良江
奥田みつ子　堀江光子
片上英一　松永すすむ
北田綾子　横山為子
栗谷春子　米田恭昌
坂本仙吉郎　渡部さと美
清水絹子

平成二年　頌春

川柳クラブ　わたの花

粟野千鶴子　橋本信江
生島楽天　服部春子
岩倉能子　平川幸枝
小澤泰成　松葉君江
片上英一　松本みき子
川崎友甫　水谷その
杉村龍襄　宮崎弘直
高橋初子　宮崎シマ子
田中久美子　籾山隆
田中トシエ　由良信一
田辺市子　吉村一風
西沢一雄　鷲見章
二瓶道子　高杉鬼遊

明けましておめでとうございます
ことしもよろしくお願い致します

米子　川柳塔きゃらぼく

石垣花子　桑原伊都
青戸田鶴　小塩智加恵　野坂なみ
足立由美子　小西登栄　林荒介
新正子　小村てい子　林瑞枝
池尾保子　沢田千春　服部朗子
石中時子　坂口一江　広江富枝
大田みさと　さえきやえ　藤井文世
大塚恵子　塩谷八重子　堀江純子
門脇晶子　白根ふみ　増田竹馬
神崎あい子　菅井とも子　政岡日枝子
金山夕子　田中亜弥　光井玲子
川上より子　寺沢みど里　三好寿々子
木村富美子　中井ゆき　茂理高代
木村春枝　野中御前　矢野満子　八木千代

始まる

藤井一二三選



始業ベル鳴って企業の貌になり　鉄治
友人もライバルとなる入社式　富恵
髭剃って今日が始まる向かい風　豊
恍惚の一歩足から出始める　青銅
年始め神社の吉を信じます　利通
今日の戦が始まる朝の洗面器　雀踊子
ふり出しに戻れば頭冴えてくる　悟郎
始めからもう結論がわかってた　抜智
親の脛噛り始まる新世帯　白峰
祈りから始まる朝の風さやか　博子
協定をよそに始まる青田買い　浪速子
拝啓が身につく祖父の筆始め　多賀子
目覚ましに始まる朝の凡夫です　洛酔
おはようで始まる朝のティーカップ　正子
手始めは軽うくお茶に誘てみる　寿美
晩学を始めて老いに灯をともす　静枝
始まりを気づかぬほどの淡い恋　艶子
祝辞略先ず乾杯で始めます　史風
終りなき始まりがあり舟を漕ぐ　比呂志
暮れて行く年に第九の幕があく　新一郎
当選の日に始まった次期選挙　やすお
仕合せな朝が始まる目玉やき　敦子
苦労から始まる道を踏みしめる　裕美
花時計回り始めて愛はずむ　玉恵
始まった頃は坂道考えず　典子
始まると留守番も来る村芝居　笑風
子が巣立ち二人暮しの始まる日　秀峰
七転び八起き出直す始発駅　清芳
交際が始まっている犬と猿　冬葉
事始め夫婦おんなじ橋渡る　博友
誓詞朗々社の色となる第一歩　大柏
歩き始めへ思わず四囲の手がのびる　通彦
顔見世が京の師走を開けにくる　あやめ
事始め古い掟と老母がいる　寿恵子
親と子の対話はじめる糸つむぐ　紀一
間違いは秋に始めたダイエット　小雪
紅葉が始まる少女脱皮する　京子
幕あけたドラマは運に任せよう　佳
均等法おとこ化粧をしはじめる　サワ子
自然から付け来はじめた酸性雨　柳五郎
蛇口から今日が始まる母の朝　ただし
始まった愚痴に補聴器外しとく　テル
朝市で始まる旅のロマン買う　人
恋序奏ゆっくりグラスなど鳴らす　和子
太陽が昇る私の絵の中に　地
ひとり芝居が始まる妻の掌の上で　天
軸　寿恵子

逢う

宮崎シマ子選



逢えそうな予感が走る花時計　颯云児
一遍は逢いたかったと言うお世辞　ただし
逢うまではああもこうもと思うたに　高子
夢で逢う只それだけを気がとがめ　勝美
逢う日まで待たせておこう適齢期　正子
虫でさえ逢うため命賭けて恋う　ちよ
極楽で逢う約束で夫看取る　悠泉
夫なのに心ときめく待ち合せ　信江
いいことに逢いそう今朝の青い空　みつこ
秋霖を傘にあつめて逢いに行く　柳五郎
筋書で逢うた結末物足らず　智加恵
さりげなく逢いたい人に生みの母　笑風
逢う筈の道もう一度引き返す　明水
飛び去った魔女の箒の跡に逢う　伊津志
逢うてみてはじめて知った声美人　よし津
女房と広い宇宙でよう逢った　次男
忍び逢いした素うどんの島の内　清芳
こちらから逢う約束をばかりする　しげお
逢わなけりゃ良かったなどと仲が良い　旭恒
逢いびきにちょっと照れてる赤とんぼ　狸村
ハンカチを右手に巻いて立ってます　豊
六千歩前後で朝のひとに逢う　史風

逢うて来た余韻が残る袖たたみ　雀踊子
お日さまに一度も逢えぬ水中花　京子
逢いに行く片道切符を懐に　元江
この道を行けば女神に逢えそうな　欣史子
ふるさとは良しステテコで風に逢う　喬水
恋人の様に出逢うて共稼ぎ　愛論
逢う時をきっと信じてこぼれ花　敬
モナリザの笑に出逢うてから狂う　寿恵子
語り部と逢うてひと夜を哭きつづけ　理瑛
許すとも言わずひっそり逢うてくれ　静歩
逢いに行け行くなとも言う帯の芯　寿美
逢うドラマ別れるドラマ大時計　重人
もう一度逢いたい人に似た背中　美代子
うす雪の独り住まいに客がある　妻子
矢印は無くとも逢える道を行く　雄々
　佳
どんぐりの何度逢うても同じ顔　三五島
埋れ火をほじくるように逢いにゆく　螢
春を待つ逢いたい人はないけれど　正坊
逢いそうで道替えたのは貸した方　宵明
逢う度に裏もきれいな人に見え　艶子
　人
三度目に逢うた鬼には角がない　清柳
　地
虎の巻秘めてうきうき逢うている　恵美
　天
逢えるなら遮二無二走る石の道　玉恵
　軸
逢わいでも残る悔いなら逢いに行こ　あやめ

玉

青枝鉄治選



掌中の玉あしたから人の妻　杏村
雪の玉美人めがけて発射され　三和
飴玉を舐めさせられた禁煙車　白峰
シャボン玉昔の空は青かった　雀踊子
それぞれの子供に持たす玉手箱　佳雲
どうしても一円玉がいるくらし　妻子
神様と縁を結んだ五円玉　小雪
商談のソロバン玉をひとつ下げ　高明
玉の娘を恋の悪魔にさらわれる　一乗
くす玉を翔び立つ馴れた鳩がいる　枯楠
くす玉が割れてあわてる眠り鳩　夢酔
美人だが口の軽さが玉に疵　諷云児
寡婦にしておくには惜しい玉の肌　石舟
玉葱の芽を毟りとる寒の入り　蛍
玉垣が神の私有地ガードする　正子
ルールなどいらぬ園児の玉おくり　史風
竜宮へ返事はしない玉手箱　しげお
妻の夢のせてころがる毛糸玉　高子
毛糸玉小さくなってゆく夜寒　結実
玉の汗知ってる土は裏切らぬ　理瑛
陽だまりの子等と七色シャボン玉　愛論
みぞおちで善悪の玉こぜり合う　玉恵
逆境を胸に秘めてる玉一つ　あやめ
玉乗りの象の哀しい瞳をみたか　寿美
したたかに手玉にとってる女郎蜘蛛　サワ子
玉砕の島を観光の靴で踏み　忠雄
替え玉は台詞の要らぬシーンだけ　白渓子
手の中の玉をさらいにきた釣書　裕美
磨くだけ磨いた玉にそむかれる　重人
掌中の玉を無くしてより自失　白光子
ビー玉を捨てたその日に恋を知り　四郎
どう穴を明けたか遺跡のガラス玉　勝美
古墳から陽の目を浴びたガラス玉　保夫
身の軽い男が乗った玉の輿　よし津
倖せな音で弾ける玉のれん　宵明
玉すだれ嫌な話は通せんぼ　富恵
占い師の水晶玉に賭ける明日　輝子
　佳
決心がつかず眼鏡の玉を拭く　正坊
玉の肌露天の風呂に月冴えて　典子
遺伝子の善玉だけを選り分ける　雄々
失敗をするたび玉が丸くなる　保州
匂玉が静かに語り出す古代　大柏
　人
水晶の玉から神秘引き寄せる　比呂志
　地
一生の愚痴でかためた繭の玉　美代子
　夫
ビー玉の中へメルヘン閉じこめる　京子
　軸
やるだけはやった達磨の待つ目玉

初歩教室

題―和服

辻　白渓子

和服の題は、想が広く、大体七五三や神詣り、成人式、お茶席、形見、結婚式の晴着、和服を着て変る娘等着こなしの情景を句にしたものが多く、楽しませて頂きました。

七五三親子和服できそい合う　さつき
（七五三親子和服で派手に来る）
明治生まれ和服からだによく似合い　呼　風
（身のこなし明治生れに合う和服）
服も良し和服も似合うお隣さん　さつき
（洋服も和服も似合う隣の娘）
わたし似で和服似ですが鼻に付く　太一郎
（わたし似で和服が合うと自慢する）
赤いべべ着てパパに抱かれて七五三　ミツエ
情景は出ていますが、単純ですので
（七五三パパに抱かれて寝た晴着）
秋まつり亡母の形見に手を通す　富　恵
（秋まつり亡母の形見で間に合わす）
着せたくてローンいとわぬ娘の和服　芳　水
着せたくてが説明口調なので「一人娘」に替えてみました。
（一人娘へローン厭わぬ晴着撰る）
小雪降る仲を蛇の目の粋姿　信　一
（雪降ると蛇の目が粋になる和服）
粋に着る和服へ主婦でない姿　艶　子
（粋に着る和服は寡婦と思わせず）
結婚式今日は和服に手をのばす　つえ子
（結婚式和服の友と見比べる）
和服に着替えると膝に孫がくる　喜与志
（和服着た膝へ遠慮をしない孫）
飼犬が和服のママに吠えるどし　一　乗
（間違えて和服のママへペット吠え）
和服着て出ると近所で噂され　治
（近所の目和服は意識して出掛け）
ローン終え和服売場へ足が向き　方　子
（この次のローンも和服と決めている）
和服の娘多いと思えば文化の日　玲　子
（和服の娘街へ溢れる文化の日）
自転車で和服のすそに風が吹く　幟
（自転車の和服は風を気にしない）
晴着和服で赤子泣いても背負えない　美代子
（晴着でもお構いなしに子がぐずり）
お茶席は和服姿の方がよい　秀　香
（お茶席へ並ぶ和服が人目引く）
女らしくなるかと和服着せて見る　志　重
このままで頂戴出来る句ですが、その結果は次のようになります。
（少うしは女らしさが出た和服）
和服着て外人さんもお正月　高　雄
（外人も和服で写す幕の内）
グリーン車の粋な和服は京訛り　金　吾
（グリーン車へ似合う和服の京言葉）
和服着て引立て役に付いて行く　ひさ子
もう少し突っ込んだ方が面白い。
（和服着た引立役がよく喋り）
腹いせに貯金をはたく着物展　時　弘
（うっぷんを晴らしに着物展へ来る）
屠蘇機嫌妻の和服に目を見張る　章　久
（屠蘇機嫌和服の妻と目が出合う）
成人の娘に晴着縫う母の愛　志華子
（成人の娘にへそくりで買う晴着）
女房も和服の似合う齢になる　小　鹿
（妻もまた和服が似合っている初老）
眩しくてこれが我が孫お振袖　すみれ
（振袖の孫の美しさへ案じ）
何事かふり袖群れる花畑　隆　雄
（ふり袖が集う茶席へ花囲む）
余所ゆきを着て行く何かあるらしい　敬
（縁談の和服と娘には知らさない）
ダイエットしてまで着たくもない和服　円　女
（ダイエット効果出たので着る和服）

晴れ舞台揃いの和服ろうろうと　㈡美恵子
（晴れ舞台揃う和服にある自信）
眠ってる和服の私語にはっとする　㈥美恵子
（和箪笥へ和服の私語は愚痴を溜め）
嫁ぐ娘に和服縫わせる母でした　喜代子
（浴衣ならどうにか縫える娘に育て）
父母の形見の着物もて余す　幸枝
（皆地味で形見の着物ゆずり合う）
街頭に和服の女稀になり　圭坊
（和服着てくるから街で振向かれ）
和服の娘太鼓結びで泣かされる　春風
（帯結べないから和服嫌い抜く）
地下足袋の私に和服馴染まない　光子
（地下足袋に馴れて和服似合わない）
雨の中裾をからげて和服駆け　繁男
（降り出して和服の裾が慌て出す）
ここ一番和服ぴったりの将棋指し　昭治
（対局の一手へ隙のない和服）
ジャジャ馬も和服を着たら跳ねそびれ　和子
（別人のように振舞う和服の娘）
京の旅くつろぐ浴衣嵯峨の月　君江
（嵯峨の月見えてくつろぐ宿浴衣）
疎開した和服は米になったっけ　登代
（疎開して和服を米に替えた過去）
和服からニョキッと外ふんばりの足　芳枝
（外股で歩き和服にない魅力）

見違えるここにも和服の身のこなし　保夫
（見違える程におしゃれをした和服）
ジーパンの足に和服が合いかねる　しづ子
（ジーパンの足にはぎこちない和服）
お呼ばれに和服存分食べられず　菊枝
（お招きに和服で来たを悔いている）
恋を知り和服欲しがる娘に育つ　和子
（恋知ってからは和服にしたデート）
吉日の振袖傘を持っている　遊美
（吉日の振袖傘が要る天気）
和服着て妻と並ぶと漫才師　義
（相方の和服が派手な漫才師）
買い物をしている舞妓のトレーナシャツ　隆雄
（買い物へ舞妓は和服を替えて出る）
新しい着物箪笥で欠伸する　とく子
（新調の和服着て行く当てがない）
消費税和服のゆめは遠ざかる　宏安
（消費税つくと和服も手が出せず）
PTA母のかたみの和服着る　宏安
（PTAかたみの和服が丁度合う）
ジーパンのあの娘も和服初詣で　三津江
（しぶしぶと和服に替えた初詣で）
玉砂利に和服の似合う子等混じり　芙美子
（玉砂利へ和服が似合う七五三）
愛と見得着ない和服も嫁がせる　彩子
（嫁の荷へ見栄の和服を持たす母）

四十年タンスで眠る嫁衣裳　トキ
（嫁に来た衣裳が箪笥に忘れられ）
和服着て小さく座る母の席　和子
（和服着た母が小さくかしこまり）
おてんばも和服を着ればシャナリする　一枝
（お転婆と見せぬ和服のしとやかさ）
ダンサーも茶道の時には和服です　喜代子
（お茶席の和服ダンサーとは見えず）
和服姿ビデオへ主役の七五三　サワ子
（七五三ビデオの主役になる晴着）
モンペ脱ぐ晴着の和服肩がこり　光子
（モンペから晴着へ替えて来た見合）
今回の着想、表現が秀れている句
着こなしに過去が見えてる帯結び　志重
帯締めてセーヌの河畔歩く夢　すみれ
着痩せした影が和服を誉めてくれ　章久
横縞を粋に着こなす亡母でした　富恵
江戸小紋うす紫の似合う妻　志華子
私の句
スリムではないから和服着たがらず
緊張の疲れ感じてきた和服　白渓子

◇

題「**微笑**」**1月15日締切**（3月号発表）
宛先　〒569 高槻市桜ヶ丘北町3―19
ハガキに**3句**以内　辻　白渓子

〈寄　稿〉

川柳塔碑の建立に思う

感謝と感激

中島小石

川柳塔九月号を手にし、何気なく第一頁を開きますと、高野山の霊地に「川柳塔尉霊碑」の文字にびっくりいたしました。しかし、栞主幹の巻頭のお言葉によりご奇特なお方のお力を頂き、これを基にしてのご発願と判りまして、何と有難いことかと思いました。十一月十二日には早くも完成とのことに、お世話なさる方々の一方ならぬお骨折と感謝いたしました。

私も当日には是非、出席をとは思いましたが、右足の骨折が完治せず、無理かと思いますが一方、この機会をはずせば二度とは参られぬかもしれぬと思い悩みましたところ、薫風様、柳宏子様方から手をひいて上げるから、席もとってあげるからとのお言葉にはげまされ、ご迷惑を承知の上にて出席を決心いたしました。

当日は朝からの快晴に恵まれ、また、平素はお目にかかれない沢山の旧知の方々にかこまれ、立派な碑の前に立ち、拝礼いたしました時は、よくぞご好意に甘えさせて頂き、参列させて頂けた感謝と感激で胸いっぱいでございました。



生々庵が路郎先生に入門いたし、川柳に手を染めましたのは昭和十三年四月十七日。それを記念して買い求めた小さな手帖に第一日目の詳しい記録が書いてありました。今はボロボロの手帖を懐に入れて出席いたしました。入門のその日から川柳人として生きつづけ、最後をこの碑の下に同好の方々とご一緒に眠らせて頂く幸せをさぞかし喜び、有難く思っていることと思い、私もともども嬉しい限りでございます。お骨折り頂きました多くの方々に、心から厚くお礼申し上げます。

（写真は、碑前で小石さんと栞主幹）

心のよりどころ

野田素身郎

昭和四十年七月、麻生路郎先生が逝去され同時に『川柳雑誌』も廃刊されました。

昭和二十九年七月から、故木村千容氏のご推薦により、不朽洞会の末席を汚していた私には、このことは大きなショックでした。

師と仰ぐ方を失い、師の選を頂いて発表される柳誌がなくなったことで、川柳に対する

私の愛着心は急速にしぼみ、川柳を放棄しようとすら思いました。

この思いを、当時同じ県庁舎内に勤務しておられた直原七面山氏にお話したところ、「素身郎よ、路郎師が亡くなられても、生々庵氏、栞氏等々の後継者には事欠かない。従って、これらの方々に師事し、川柳を探求すべきだ」と諭されました。

この一言で、再び作句に励むようになり、今日まで、『川柳雑誌』、『川柳塔』に約四十年、投句を続けることができました。

この度、「川柳塔」碑が建立され、われわれの絆と心のよりどころができたことを喜んでおります。いずれの日か、「川柳塔」碑に参り、路郎師、生々庵師を始め多くの諸先輩方のご指導を得たいと念願しております。

倶会一処

小出智子

冒頭から私事で恐縮ですが、高野山には私の祖父母の墓があり、一族はみな奥の院へ納骨する習わしがありますから、この地にはとても愛着を覚え、お彼岸やお盆以外にもチョクチョクお詣りしています。

初冬の高野山——特に奥の院への参道では杉の落葉を掃き集めて焚かれ、その煙が苔むしたお墓を一基ずつ慰めるかのように杉の木立を縫って立ち登り、筆紙に尽くし難い風情と寂寥を漂わせ、心の安らぎを覚えさせてくれます。

その奥の院のほとりに、西尾栞主幹の麗筆による立派な川柳塔の碑が建立されましたことは、私にとりましては何か因縁めいたものを感じ、唯々〝素晴らしい〟の一言。それ以外の言葉は見つかりません。碑は奥の院のバス停から五分ばかり足を延ばした所に、生い茂った森を屏風にして、遙か下界を見下ろす静かな地に建てられています。

倶会一処

川柳塔同人並に川柳愛好家は死して
尚柳号で呼びあい永遠に川柳を
語りあう絆を以て此処に愉しく眠る

と、裏面に刻まれています。川柳をする者にとって、何と感動的な碑文でしょう。さぞやあの世も楽しからずや——の思いを深くするものです。そして安住の地を得たようなそんな気持さえいたします。

私にはお詣りをする所が一つ増え、高野山の参詣も一層意義のあるものとなりました。

人間陶冶の詩

工藤甲吉

仲間—いっしょに物事をする人。同志—志を同じくする者が、あの世でも又一緒になれる所。即ち倶会一処の「川柳塔」碑が、霊場高野山に建ったという。なんともめでたく、川柳塔社に身を置く者の一人として、しみじみ幸福に思うのである。

もちろん、自分ばかりではなく、五楽庵、叶、劦、彩人、實、一花、義峯をはじめ、「川柳塔あおもり」連一同とて、同じに違いないので、出来るものなら一度、一同打ち揃い、碑前にぬかずきたいものと思う。

それにしても、霊地の一区画を寄贈して下された奇特の御方をはじめ、いろいろ奔走された栞主幹ほか各位には、改めて敬意を表したい。

さて、石標の表の柳聖 麻生路郎 語録「川柳は人間陶冶の詩」であるが、路郎師はその著書「川柳とは何か」の自序の中で、次のように言っている。

私は川柳を人間陶冶の詩であるといってい

る。人間へ締め木をあてて絞ると、いろんな悪汁が流れ出て、そのあとには朗らかな脱俗した人間が残るのではないかと思う。その締め木の役を川柳が果してくれているように思えてならない。句はその人の心であり、十七音字はその人の姿であり、リズムはその人の呼吸であるからである。

と。我々はこれを機会に、この「原点」を改めて肝に銘じ、精進したいものと思う。

柳聖とともに

野村太茂津

「これでよいのか」という疑いを持つことを、仏教で『妙観察智』と言い、「俺は正しいのだ、間違ってるのはお前だ」というのは「妙観察智がない…と言います」（ある老僧のお話）。蓮如上人（一四一五―一四九九）には五人の妻がいましたが、五人とも完全に、蓮如さんが好きでした。これはすごいですね。それで二十七人も子供ができました。

女性を知ってるお坊さんと、知らない坊さんと、どちらが宗教的心境の力が強いか……「どちらも強い」。人間のケタが違うから。女も同じで、もっと知らなくちゃいけない、よく知らなくちゃ、生きた甲斐がない。

男女の体が接触したから知ったことになるか、というと、全然ちがう。仕方がないからやらしてやろう、という夫婦は沢山いるはずですよ、一番大事な「心」は開いてないでしょう。『知る』ことがなかなか難しい。

それには、やはり目を磨くことだ、修業とは、見るものに愛情をもつことだ、愛情がなければ見えません。植物でも人間でも…。

よくよく理解して一体になれる位の訓練をしていればスッスッと入ることができる。

『人間陶冶』とはこれを言ったのだと、私なりにわかってきたようです。

急がず焦らず、ひたむきに陶冶して、霊地高野山で、川柳塔に祀られ、柳聖と共に、まほろばで倶会一処できるんだ、ゆとりを持って現世で川柳を楽しみ、陶冶しよう、と少し賢くなって下山いたしました。

ひたむきに生きて急がぬ倶会一処　太茂津

頑張らなくっちゃ

内海幸生

平成元年十一月十二日、全国の柳人有志各位のご浄財を集めて、高野山大霊園に川柳塔碑が建立され、その除幕開眼法要に参列させて頂く機会を得た。

全山紅葉に少し早かったとはいえ、快晴の中を式場に着き、正午少し過ぎから高野聖による開眼法要の読経と除幕が行われた。紅白のテープが引かれると、真新しい碑、川柳塔のシンボルマークと「川柳塔」の文字がクッキリ浮き上がる。一同、思わず拍手!!裏側には、栞主幹の名文で墨痕鮮やかな文字が刻まれ、霊標にあたる碑にも栞先生の達筆が見事に躍っている。

目を閉じればすでに幽界に入られた柳界の諸先生方や諸先輩のにこやかな顔がはっきり浮かぶ。「これからは、ここにお参りすればお会いできますね」「ウン、ウン」「私もここへ入れてもらえますか」「バカモン、君ら十年も二十年も早いわ。もっと修業を積んで出直せ」の厳しいお言葉に、「ハイ」と引き下がって目を開けた。

頑張らなくっちゃ！

高橋操子さんのこと

岩佐ダン吉

「ああ来てくれたんけ、遠いとこをすまんなあ」。そんな操子さんの言葉が聞けないのは淋しいと各選者が語っていました。

昨年十月二十二日の第三十九回岸和田川柳大会のことです。新参者の私も、操子さんが川柳界の皆さんにどんなに愛されていたのか、その存在の大きさを今さらながら知った思いでした。

思えば三年前、岸和田でふと見かけた川柳大会のポスター、出会った操子さんの次女の幸代さんに誘われてはじめて川柳の会なるものに参加しました。

操子さんは「あんたが岩佐はんけ、聞いとるよ」と声をかけてくれました。あの日からお亡くなりになるこの一月まで、ほんとうに短かい日々でしたが、岸和田の句会や生滝山の吟行、そしてお宅にも寄せてもらい、親切に教えてもらいました。

「入選せんかてええ、真実の句を作りや」と作句の姿勢、麻生路郎さんへの熱い思い出から川柳界の皆さんのこと…今思えばもっと学んでおくのやったと悔まれるこの頃です。

操子さんは亡母とほぼ同い年、戦争未亡人として小さい旅館を営みながら苦労を重ねた母と話しているようなうれしさ、楽しさがありました。

私は一年前に大阪の本部に仕事をかわりましたが、「ダン吉さん苦労や思うたらあかんでえ、みんなこの世に生れてきた責任やしょ」操子さんの言葉は、今も私の胸にあざやかに生きているのです。句ができず、しんどい時も「あのなあ、仕事第一や、できん時はそれでええんよ」ともなぐさめてくれました。

座右の句、操子さんの「明日あるを誓い太陽沈みます」。辛いことがあっても太陽はきっと公平に見てくれている、明日がある…たくましく優しかった操子さんの人生が偲ばれてくるのです。

わが家の小さい床の間には戴いた「ちっぽけな善意でもよし心満つ」の掛軸も飾っています。操子さんが「自分の心を偽らぬ句をつくりたい、そのためには正しい人間の道を歩みたい」と語ってくれているのです。

私はこの十月に武助さん、敏さん、吐来さんの推薦をいただき、川柳塔社の同人も許されました。これを機に、岸和田川柳会も一年生の私ですが、操子さんの心に学び、多くの先輩に学んで少しずつ川柳の道を歩んでいきたいと思っているのです。

高橋操子 一周忌追悼句会

とき 平成2年**1月14日**(日)午後1時

ところ 薬師院
岸和田市宮本町28―22
電話〇七二四―二二―七五六五

おはなし 西田柳宏子

兼題 「子」 板尾岳人選
「操」 河内天笑選
「橋」 半井甘平選
「高」 高杉鬼遊選

席題 当日1題発表(兼・席題とも各2句)

会費 500円(句報呈)

賞 各秀句に呈賞

主催 岸和田川柳会
連絡先=植山武助
岸和田市上町七―三六
電話 〇七二四―三九―〇八三六

■ずいそう

神馬白雪号

西尾栞

私は戦前、帝塚山に住んでいたので、散歩範囲は、住吉神社、住吉公園、高灯篭であった。住吉神社に神馬が居ることを思い出して、師走の一日、天王寺から我孫子行のチンチン電車に乗って鳥居前で下りた。正面に昔ながらの反り橋があった。左側は絵馬堂で、楠の大樹で囲まれた午後三時の宮居のたたずまいは、文字通り森閑としていた。

ざっと拝んで絵馬堂で待ち合せ

というかつての句が思い出された。待ち合わす場所は絵馬堂と決めてあるが、彼氏(彼女)がまだ現れないと言うて、神社まで来て拝まないのは、今日のデートの首尾にもかかわると言うて、参拝に来たのでないから、ざっと拝んでということになる。ざっと拝むという大阪弁は正に川柳用語である。

反り橋を渡らず、暫らく左へ行くと思い出の神馬舎があった。

青嵐神馬は眠る外はなし

かつて俳句をやっていた時の句をふと思い出した。近づくと神馬舎の横に白ペンキ塗りの囲いの馬場が出来ていて、神馬「白雪号」が砂地の馬場をぐるぐる回っていた。昔は時間がくると、神馬守が手綱をもって広い境内を運動させていたものだ。すでに老齢の神馬はヨボヨボと歩いていた。今日の馬は私の知っている次の馬で、天武天皇十年(六八一)以来だから、何代目いや何百代目の馬である。

ここに住吉大社の神馬のパンフレットがあるので抜粋してみると、住吉大社の神馬は代々白馬で、平安時代以降、白河法皇や源頼朝などによって奉納されていたが、江戸時代よりは、大阪炭問屋仲間が、平素、黒い炭を扱うために反対の「白馬」を養うことに意義を求めて年間の飼料とともに奉納してきた。この伝統は現在もなお、大阪府燃料卸商組合の神馬講の方々によって伝承されている。

昭和六十二年九月、二十八年間奉仕してきた先代白雪は、頽落(たいらく)して神馬塚に葬られた。二十九歳で人間なら百歳前後の老衰であった。神馬は三十三年四月生れの木曽

「一路賞」新設のお知らせ

『川柳塔』の賞としては、毎年十一月に「路郎賞」「川柳塔賞」、一月に「愛染帖賞」「岡香の花賞」、四月に「各地柳壇賞」を発表、授賞してきましたが、今回、課題吟(一路集)の年間最優秀句の作者を表彰するため、「一路賞」を設け、「各地柳壇賞」とともに、四月に授賞することとなりました。

選考方法は、一年間(四月~三月)にわたる各月三題の天位句三十六句の中から三人の選考委員が三句ずつ、計九句を選び、主幹が授賞句を決定します。

選考委員は毎年、交代することとし、第一年度は月原宵明(今治市)・遠山可住(兵庫県)・松川杜的(京都市)の三氏に委嘱いたしました。

なお、「愛染帖賞」は来年度から「銀河系賞」と改められます。

川柳塔社

駒で、紅彩のメラニン色素がうすいので生れながらにして白く赤い目をした佐目月毛馬であった。

昭和四十五年に昭和天皇の行幸に際し、天覧馬となり、先帝の御乗馬の白馬「白雪」と同名のかどで陛下自ら頭を撫でて「元気でいるよう希望します」と言われたとか、言われなかったとかいうエピソードがある。

現在の「白雪号」は、昭和六十三年五月生れの北海道の恵山町の道産子馬で、十一月に晴れて大社の神馬として、白雪号を継いだのである。馬場を歩いていた白雪は、はや夕餉のため馬房に入っていて、ものうい瞳をしていた。

ひっそりと神馬は孤独申の刻
神の馬あくまで白く白く生き
神の馬ものういまなこ閉じてよし

私の兵科は、馬に関係のある騎兵隊であったが、太平洋戦争に入ると、あの勇壮な騎兵の襲撃も、帽子の顎紐をかけて、騎兵銃を斜に背負った果敢な騎兵斥候も、機関銃や無線のために不要となり、戦線の伸長で兵糧弾薬の輸送のため、輜重兵になったことを馬の長い顔を見ながら思い出していた。

馬上より指さす夏野ソ聯領

川柳塔社常任理事会（12月1日）

▽「川柳塔」碑建立がとどこおりなく行われたことについて某主幹からあいさつ。柳宏子氏から経費の明細について報告、了承。

▽平成2年度本社句会における各月のおはなし・各題選者・兼題・司会者などについて天笑氏から提案、説明あり。

▽平成2年度の川柳塔賞選考委員を河内天笑氏から宮口笛生氏に交代。

▽前月から持ち越した「一路賞」の選考方法・選考委員（3名）を決定。

▽阿部野神社に建立する麻生路郎句碑の除幕式を平成2年4月に行うことを決定。

「川柳塔」建立募金

ありがとうございました

青木惜春・小野克枝・川崎秋女・恒松叮紅・舟木与根一・柳楽鶴丸・浜本義美・京極君枝・寺田裕美・赤川菊野・中森葉士人・坂本仙吉郎・上田翠光・田辺炙六・石曽根民郎・北川竹萌・有働芳仙・小谷仙山・板尾岳人・小林妻子・野中御前・山下美津留・原さよ子・津村志華子・岸本豊平次・永田俊子・藤井明朗・岡井やすお・谷口信子・根岸方子・豊福路子・中原比呂志

（12月9日現在・総計三二七件）

奥田白虎・かよ子夫婦 句集発刊記念川柳大会

日　時　平成2年2月10日(日)正午開場
会　場　大阪市立労働会館301号
題と選者　「カップル」　萩原金之助選
「磨　く」　本庄　東兵選
「追　う」　木野由紀子選
「釣　る」　古川　一高選
「　駅　」　加藤　翠谷選
「帽　子」　森中恵美子選
「自　由」　橘高　薫風選
「開　く」　儀野いさむ選
（各題2句　出句締切午後2時　席題なし）
会　費　2000円（句集・記念品）

千原理瑛さんから
「風ぐるま」発刊お礼として
金一封拝受しました
川柳塔社

▼訂　正　本誌11月号の川柳塔鹿野みか月記念句会案内（78P）の投句料が2000円とありましたのは、1000円の誤植でしたので、改めて訂正いたします。

じげおこしキャラバン
川柳塔鹿野みか月の記念句会を訪問

鳥取県じげおこしキャラバンの西尾邑次知事一行は十一月九日、鹿野町を訪れ、短冊展や城跡公園、山中鹿之助の墓などを見学、トレニングセンターで開かれていた川柳塔鹿野みか月の記念句会に参加しました。

同知事は、激励のあいさつを述べるとともに、土橋螢会長にじげおこし記念杯を贈りましたが、当日の課題は、「村」森山盛桜選、「じげおこし」小林由多香選で、知事もジゲおこしお前もやるかわしもやるジゲおこす句会のこころ里に満ちの二句を出句しました。当日の入選句（一人一句）は次のとおり。

湯けむりの朝市村の和をひろげ　芙美
メダカいる限りわが村生きている　明美
村かどでピンクの風に道を聞く　菊乃
村はいま嫁も娘もドライバー　富恵
村育ち情あつくて明るい娘　三千代
村一とほめて仲人よくまとめ　房子
墓ひとつ守って村に住んでいる　小鹿
村はずれ石の地蔵は寝ずの番　としを
二年後の定年むらが待っている　かつ乃
旅の僧村に清水をおいてゆき　八重
村祭子供の頃の顔になり　武子
蛍舞い三日月光る村が好き　公弘
トレンディー村敏感に化粧する　本丸
人生をふりむく村の真ん中や　諷人
ランドセルの子たちと帰る村の道　汲香
不器用な蛙で村を出たがらぬ　くに子
村に行く道には花を絶やさない　和子
真っすぐな足跡があるむらの道　蛍
その朝を信じて村は雪を抱く　盛桜
いい道をつけてそれからじげおこし　武子
句碑句木建てて一歩のじげおこし　みさ子
じげおこし一役になうなめこ汁　八重子
じげおこし町の椿は新美人　きみ子
川柳もじげおこしだと認められ　早苗
知事さんの熱意こだますじげおこし　幸枝
一億の智恵くらべするじげおこし　隆風
じげおこし嫁の世話役買って出る　智恵子
じげの夢太く長い線で描く　本丸
嫁の尻叩き始めたじげおこし　公弘
じげおこし火を吹く案も出揃った　美っ千
じげおこし枯木に花を咲かせます　はるお
みか月が川柳文化して目覚め　栄
じげおこし素朴な色で花が咲き　由多香
ジゲおこし子らと交わり若返る　やまと谷
のぼせもんなくてはならぬじげおこし　あつし

（土橋螢報）

第10回 ときせん賞作品募集

雑詠二句（未発表句）

選者　大野風柳・橘高薫風・去来川巨城・寺尾俊平・小松原爽介

投句締切　**平成2年1月末日**

発表　平成2年4月号誌上

賞　ときせん賞　一名
準ときせん賞　二名
佳作　七名

特別賞　今回は第10回を記念し、各選者の三才に選者の色紙を贈呈します。

投句料　千円（定額小為替）

投句先　652神戸市兵庫区大同町二丁目3―18　卜部晴美方
時の川柳編集室宛

選句方法　無記名清記の上、選句。一句ごとにその合計点で順位を決め、上位十句を入賞とする。
（平抜2点・五客3点・三才4点）
◎多数のご応募をお待ちします。

時の川柳社

柳界展望

集録―敏・武庫坊

の鳥取県川柳大会は3月25日、東郷温泉・水明荘で開かれる。会費1500円、投句料1000円（3月15日締切）。兼題は、息・吹く・池・島・梨・大きい・鉢・伏せる

★くらわんか番傘川柳会は4月12日午前11時から枚方温泉・イベンティ21で創立10周年記念川柳大会を開催する。宿題・選者は次のとおり（各題2句）。選ぶ＝山本翠公▼職＝保木寿▼深い＝木野由紀子▼妻＝上田斗六▼手紙＝岩井三窓▼仲間＝橘高薫風▼明るい＝亀山恭太。事前投句・こころ＝礒野いさむ。投句先＝寝屋川市成田東が丘15―1・丹波三千子。締切は3月31日。会費二千円。

★弓削川柳社は「燃えろ岡山」県民運動の優良実践団体としてこのほど、岡山県から表彰された。

★川柳公論社は、89年度の川柳公論大賞に宮川蓮子、めやなぎ賞に斉藤はる香、双塔賞に荻原久美子、新人賞に小池豊子各氏を決定。

★第31回豊中市民川柳大会が11月23日、同市立中央公民館で開かれたが、次の同人2氏が秀句賞に輝いた。

右側を歩いてくれるのは　男　小出　智子

謎とけて花の咲かない道となる　安藤寿美子

★島根県芸術文化祭の川柳部門で、いずれも川柳会関係者17人が入選、次の両氏が入賞した。

▽**銀賞**

ふる里にどっしり山がある安堵　金森知恵子

▽**銅賞**

終戦日かみしめて食う白い飯　錦織　文子

（久家代仕男報）

★『川柳宮城野』11月号の「川柳アラカルト」欄に本社同人5氏の句が掲載された。

大臣をいじめる記事が面白い　高杉　鬼遊

気晴しにたくさん納めた消費税　本間満津子

嫁不足街はギラギラギャルの群　越村　枯梢

一人では淋しすぎます遠花火　赤川　菊野

水飲んでひろしまの日に水を知る　越智　一水

▽**お便り**△

■橘高薫風本社副主幹から「12月1日、広島NTTの川柳教室の選者に来ています。広島の会場と岡山県弓削川柳社の皆さんと電話で結ぶ催です。各地の親しい皆さんのご支援を得て心強い限りです」（広島から）

▽**同人消息**△

■岩本雀踊子氏（桜井市・本社会計監査）は、昨年11月19日の桜井市展第25回記念会で永年にわたる文化役員としての功績により市長から功労章を授与された。

■渥美弧秀氏（静岡市・本社同人）は、静岡新聞読者文芸に特選で入賞。

年金の歩幅つまずく交際費

■山内静水氏（竹原市・本社参事）体調不調のため、11月15日検査入院。

■北野久子さん（松原市・本社同人）は長らく入院療養中であったが、このほど退院、自宅で療養中。

■佐藤藤子さん（松原市・本社理事）は、このほど雅号を「**奏月**」と改めた。

■田中隆二氏（羽曳野市・本社理事）は、このほど雅号を「**透太**」と改めた。

▼訂　正▲

■川柳塔12月号の本社句会兼題「表面」（71P）の「どろ沼の表面疑惑の目が浮ぶ」の作者は**白峰**氏でした。

■川柳塔11月号の47P上段森下節子さんは**森本**節子さんの誤りでした。

本社十二月句会

十二月七日(木)午後六時
メンズファッションセンター

今年最終の本社句会は、また、一九八〇年代のラストを飾る句会ともなった。おはなしは黒川紫香氏。黒板に明治三十年・大正末年と平成元年の大阪市北区堂島界隈の地図三枚を張出し、幼児時代を過ごした古い大阪の思い出話を一席。とても三十分や四十分ぐらいでは話しつくせぬ内容であった。

初出席は千原理瑛さん(岡山県)。月間賞は小池しげお氏が獲得されたが、同時に席題二題も天位という破竹の勢いだった。(正)

(進行—天笑)(受付—寿美子・冬葉)
(記録—射月芳・月子)

出席者—笛生・鬼遊・萬的・冬葉・寿美子・武庫坊・太茂津・凡九郎・敏・福本英子・幸・小路・白渓子・諷云児・しげお・悟郎・寿美英壬子・柳宏子・勝美・理瑛・眉水・たず子・薫風・礫・仙吉・悦郎・狸村・紫香・美智子・白洋・正坊・岳人・元紀・東雲・絹子・愛論・光代・昭子・美代子・洋敏・みつ子・頂留子・隆二・楓楽・章久・庸佑・吸江・英一・路子・美房・射月芳・公一・度・雀踊子・憲太郎・達子・白峰・満津子・典子・右近・小林英子・杜的・シマ子・甘平・すすむ・勝晴・はつ絵・天笑・月子・幹斉・金太・千秀・智子・房子・栞・重人・利武・いわる・三男・弥生・文秋・吐来・一二三・藤子・寿子・柳伸

席題「儲ける」　半井甘平選

マンションを建てた噂の中の医者　重人
儲かったらしくそれきり寄りつかず　萬的
儲けてるらしい豪華な賀状来る　右近
趣味一つ賢くなったのが儲け　太茂津
金儲けするにも技がいるらしい　美智子
儲けより暖簾大事にする老舗　みつ子
大阪は儲かりまっかで通じ合う　理瑛
お寺はん儲けてますえ祇園街　憲太郎
儲けたら呉れる約束あてにせず　柳宏子
儲けたらキリマンジャロを見に行こう　礫
儲からぬ話に血道あげている　隆二
儲ける気それがやけどのもとでっせ　重人
食べさせていただくだけの儲けです　公一
かたつむり儲け話に遠くいる　いわる
儲かったらしい指輪買うてくる　度
儲けたと勘違いする赤い札　絹子
儲かってくると出すのが惜しくなる　射月芳
落し穴みえて逃げとく儲け口　月子
儲かるまで別れ話は引きのばす　弥生
一円落札あとでゆっくり儲けよう　度
にじりよる儲け話の甘いわな　頂留子
儲けばなしは聞きたがらない蟻の群れ　楓楽
もうかった顔はできない小商人　敏
歳の暮ぼろい話は落ちてない　美代子
政治家の儲けた話聞いている　美智子
ひっそりと暮らし儲けの外にいる　白洋
ボロ儲けないがまあまあ年の暮　太茂津
金儲けへただたしかに私の子　藤子
儲けてる顔は見せない京の寺　武庫坊
六法を開けるあぶない儲け口　雀踊子
儲かったような気にさす売り上手　天笑
儲け話へ一寸傾く左耳　寿美
まわり皆阿呆に見えるほど儲け　天笑
爪に火をともす儲けを税が取り　一二三
暖冬異変儲かる闇が街にある　元紀
座禅して儲け話をひろて来る　白洋
儲けてる男にもある深い傷　礫
一ぺんに儲けさせない紅生姜　しげお
シャボン玉儲けた話ばかりする　しげお
棒上げの株に浮かれて黄昏る　甘平

席題「二人」　林はつ絵選

シーソーがつり合いそうにない二人　幸
スペアキー二人の仲を知っている　しげお
あのふたり噂どおりに住んでいた　月子
八卦見に終りが見えた二人連れ　吐来
恙なく二人の余白後僅か　悟郎
残照がとてもきれいな老夫婦　公一

仲の良い二人を試す落し穴　美代子
そんなんじゃないのに二人だけにする　度
二人っきりになった広さをもて余す　柳宏子
駆け落ちもやり兼ねないと親が折れ　千秀
ピラミッドの旅を夢見る二人です　白洋
いびつでも二人で築く城である　美智子
結論は二人で話し合えという　文秋
御堂筋恋の二人に短かすぎ　甘平
同行二人いずれ一人の旅になる　昭子
老い二人黙ってお茶をのんでよし　柳宏子
二人称でたまには妻を呼んでみる　杜的
ふたり来て結婚宣言して帰り　いわる
唯歩くそれで二人は満ちている　光代
和解したふたりへ月がまんまるい　寿美
紀子さまに笑顔が戻る電話口　柳伸
二人ともどんぐり同士で仲がよい　杜的
一人より二人で歩く道を撰る　隆二
椅子一つ狙う男が二人いる　射月芳
他人前はいつも他人の二人です　弥生
二人なら渡れるだろう丸木橋　典子
神様に頼まなかったのに双子　武庫坊
割勘でアパート借りて街に住み　天笑
愛し合う二人に越せぬ山はない　楓楽
二人の影が絵になる港の街路灯　萬的
二人して築いた家に二人のこり　寿美子
真理は一つ二人の意見いつか合う　太茂津
あの人と見れば瞬く星がある　正坊
中年の夫婦で微熱をたやさない　幹斉
二人の愛そっと見ている車椅子　小林英子

強い妻ついているから大胆に　東雲
そして二人静かに茶づけ食べている　いわる
そしてそして二人の背なも丸くなる　幹斉
同行二人まだ遺言は書いてない　しげお
権力がもはや逆転した二人　はつ絵

兼題「映画」　西山幸選

青春の墓標の下にある映画　信義
次郎長の映画も作るハリウッド　新正子
懐かしい映画の中に僕がいる　小鹿
失恋の数寅さんも老けてくる　柳伸
二十四の瞳に光る海がある　元紀
ローマの休日がボクをときどきなごませる　礫
映画ゆえタイミングよく霧晴れる　薫風
ジョンウェインのファンに今も変りなし　智子
バーグマンと共に歩んできた青春　福本英子
初恋と見た映画なら覚えてる　吸江
映画ならここらで肩を抱かれそう　たず子
映画館闇にまぎれた恋一つ　金太
クローズアップ見事に決まる切られ役　小林英子
寅さんの映画に自分だぶらせる　洋敏
少年の心ゆすったジャンギャバン　武庫坊
映画館出てからドラマ始まりぬ　みつ子
喜劇映画見てモヤモヤを吹き飛ばす　庸佑
それからの映画嫌いが続いてる　冬葉
きっかけは映画それから熱い仲　諷云児
無声映画好きな弁士によく通い　公一
モノクロの映画に若きバーグマン　正坊
パリー祭のしらべに夢の少年期　武庫坊

スクリーンに私を重ね酔うている　満津子
討ち入りの映画を見てる十二月　度
映画ナラ其処で何とかなりまんネ　凡九郎
あのころはアラン・ドロンへ恋してた　月子
シェーンカムバック遠い記憶に黄葉散る　太茂津
モンローのくしゃみ映画に出ていない　瑞枝
一時を自分不在の映画館　いわる
白黒映画で古い溜飲下げにゆく　太茂津
スカーレット・オハラの夢をまだ見てる　英一
白黒でよし阪妻が生きている　杜的
動物が主役で泣いてきた映画　柳伸
ヒロインのいない戦争映画観る　笛生
裏窓の灯りを消さずケリー逝き　隆二
少年は老い易しああ原節子　薫風
男と女別の想いで見る映画　楓楽

平成元年本社句会皆出席者

飯田悦郎・西口いわる・宮園射月芳・楠昭子・北勝美・山本憲太郎・黒川紫香・桜井千秋・松永すすむ・川原章久・田中正坊・玉置重人・吉川寿美・西尾栞・岩本雀踊子・宮口笛生・野村太茂津・松川杜的・稲葉冬葉・清水利武・小出智子・板尾岳人・藤田頂留子・金井文秋・川島諷云児・辻白渓子・松原寿子・奥田みつ子・阿萬萬的・西山幸・堀端三男・高田美代子・西田柳宏子・津守柳伸　（34名）

女ひとり自分の過去に似た映画　萬的
ヒロインになりきって出る映画館　みつ子
映画館出てから僕が粗末すぎ　悟郎
「禁じられた遊び」を忘れてはならぬ　幸

兼題「ケーキ」　板尾岳人選

幸せなケーキ卒寿に賞でられる　柳伸
ケーキ屋になる夢だいている少女　藤子
少年の夢ケーキ屋に憧れる　隆二
その日から女がリードするケーキ　吐来
ケーキが好きでイチゴの赤に騙されぬ　太茂津
ダイエット中とケーキに手を出さず　右近
父としてときどきケーキ買っている　智子
こみ入った話にケーキほっとかれ　仙吉
コーヒーとケーキに胃散添えてある　房子
青い恋ホットケーキは醒めている　甘平
ケーキから恋が飛び出すこともある　敏
誕生日ハートのケーキくれた女　東雲
ケーキ入刀そこからいくさはじまりぬ　楓楽
ケーキぐらいで妻の怒りは解けやろ　シマ子
ケーキ入刀そろそろ酸素切れかかる　福本英子
人生は虹色ですかマドレーヌ　正坊
生クリームの甘さに嘘がかくれてる　武庫坊
誕生日祝うケーキが帰らない　庸佑
ケーキ屋のおばさんお酒が好きである　寿美子
チーズケーキまじめな顔で食べている　紫香
手を添えて愛深々と切るケーキ　右近
ケーキ崩れてアリバイは皆嘘になる　幸
ケーキ下げ父は漫画になろうとも　礫
四季のないいちごが乗っているケーキ　狸村
イブ過ぎて安いケーキを買うてくる　笛生
ジングルベルうんざり聞いているケーキ　洋敏
大家族ケーキ切るのに定規出し　東雲
口惜しくてケーキを三個食べました　楓楽
甘い甘いケーキにわたし殺されそう　金太
ホットケーキ欲しや利休を観て戻り　瑞枝
今年もきっと二十五日に買うケーキ　冬葉
ケーキカット写真にナイフくたびれる　柳宏子
奥さんをときどき騙してきたケーキ　しげお
ケーキなど買うて帰ったことがない　英一
千鳥足冷汗かいているケーキ　度
卑怯者ケーキの切り方など知らぬ　美智子
ブランデーケーキ女の指に嘘がある　萬的
ウェディングケーキへ腹の児が動く　千秀
幸せなケーキは美女の舌にのり　敏
ケーキ焼くことだけ知って嫁にゆき　一二三
ケーキ囲んでどの子も親を裏切らず　月子
ケーキあげると鬼はやさしいことを言う　幹斉
ケーキ屋のとなりのうどんよく売れる　岳人

兼題「明るい」　阿萬萬的選

鼻唄の明るい声が柚子湯船　章久
よくしゃべる明るい窓だ嘘がない　小鹿
野ばらの実熟れて明るい便り着く　新正子
小錦に明るい春が手に涙　憲太郎
お見舞が明るい話題置いて行く　白渓子
世代交替明るい明日を信じよう　寿美
親の気も知らず二浪は明るすぎ　甘平
春を待つ障子明るく張り替える　絹子
明るすぎる友達一人をもてあます　吸江
ボジョレーヌーボーで明るい部屋にする　栞
とても明るい好い娘ですとは他人様　光代
明るくて人気者だが嫁きおくれ　美房
小賢しい女で明るさを忘れ　小路
すばらしい朝餉明るいニュース読む　一二三
皇室に明るい話題紀子ブーム　洋敏
自分史の表紙明るい彩を選る　正坊
出し過ぎた明るい声をにらまれる　達子
明るさが取り柄でうわさ気にしない　頂留子
霊苑に明るい塔の灯を点す　太茂津
難病を抱えかげりの無い笑顔　右近
身障の友を明るく囲む子等　愛論
後添いのとても明るい笑い声　栞

平成元年月間賞杯永久保持者
小池しげお氏に決まる

平成元年本社句会における月間賞は、1月＝ダン吉　2月＝鬼遊　3月＝十歩　4月＝冬葉　5月＝白兎　6月＝シマ子　7月＝恭太　8月＝笛生　9月＝瑞枝　10月＝雀踊子　11月＝楓楽　12月＝しげおの12名で、規定により兼・席題天位獲得数の多い小池しげお氏（5題）が平成元年月間賞杯永久保持者に決定しました。賞杯授与は1月句会で行います。

奢りの灯明るい中に嘘がある　柳宏子
紅葉する明るい渡月橋の人　笛生
ぶっきらぼうな声が明るい野菜市　千秀
仏ごころで明るい話聞かせよう　太茂津
海の見える明るい墓地で掌を合わせ　勝晴
山里の明るい話題嫁がくる　はつ絵
足許の明るいうちに妥協する　諷云児
候補みな明るい日本作ります　敏
シャンデリア明るい話聞きたがる　楓楽
でぼちんを叩き明るい風を待つ　幹斉
終章の幕を引くには明るすぎ　理瑛
逆境にめげず明るい車椅子　隆二
茶筅振る白い椿の明るさに　絹子
補聴器が明るい部屋で聞く童話　狸村
お日様がいつも照ってる園児の絵　正坊
子がみんな揃い母さんよく喋り　月子
明るい声で行商おまけばかりする　シマ子
熱燗に明るい女よう喋る　英一
円高で来年明るく見えて来る　萬的

兼題「納める」　西尾栞選

スキー靴仕事納めを待っている　度
屈辱を胸に納めてバネとする　射月芳
泣きごとを胸に納めて脱皮する　はつ絵
一たす一は三で納める回り椅子　楓楽
納め天神で買うておく祝箸　度
仏にも人にも納める嵯峨豆腐　章久
喜怒哀楽納めるまでの糸車　路子
通りゃんせお札納めにまいる人　正坊
腹に納めて男おとこの貌になる　武庫坊
忠臣蔵の次は第九を聴いている　元紀
子が出来て家出納まりつきました　天笑
エプロンにそっと納めた癌の種　諷云児
燃え尽きるまで納まらぬ火の女　公一
納まって我が事成れり袖の下　美房
御用納め零細企業はまだ夜なべ　勝美
舞い納め姑は達者な芸を見せ　冬葉
手品師のように納める妻がいる　紫香
訥弁で納めるみんな円くなる　太茂津
お札納めてあらたまの願いごと　柳伸
謝ってすむか義憤が納まらぬ　白洋
二度あることは三度納めの軽い怪我　智子
顔見せただけで納まる徳を持ち　文秋
振りあげた拳納める壺が無い　諷云児
丁度いい時間に棟木納められ　笛生
消費税納めてオウムの独り言　悦郎
双方を立てて納める年の功　頂留子
裏通りお札納めに参る道　満津子
納まりをつける笑顔を母はもつ　楓楽
花キャベツやっと納まりつきそうだ　藤子
コックリさんの庭に納まる願いごと　絹子
何も彼も納める母の胸一つ　寿美
片目ダルマ抱いて納まりまだつかず　典子
仕掛人が死んで納まりつきました　天笑
おごそかに御用納めの星が降る　瑞枝
結納の日から無口になった父　美代子
十二月御用納めのない看護　弥生
納税を済ませた足でパチンコ屋　冬葉
相続で揉めて納骨延ばされる　しげお
納骨の高野の雨は雪混じり　雀踊子
納采の儀皇居へ新風爽やかに　寿美
平家納経もみじ饅頭まだ温し　しげお
焼香順まだ納まらぬ伯父が居る　栞
（清記―みつ子）

第24回岡山県川柳大会

日時　平成2年**1月28日**　午前9時
場所　岡山県邑久郡邑久町立中央公民館
兼題（各題2句）
「馬　鹿」　藤本静港子選
「マスコミ」　吹田　朝児選
「研　ぐ」　河内　天笑選
「華やぐ」　卜部　晴美選
「冬　」　岡田　千茶選
「　的」　山田　止水選
席題　当日1題発表
特別席題　当日1題発表（入賞呈賞）
会費　1500円（大会誌、昼食、参加賞）
投句料　500円添え、1月26日必着で左記へ
岡山県邑久郡邑久町山手1116
嘉数　幸栄　宛

吉岡美房氏から
亡父供養として
金一封拝受いたしました
川柳塔社

明けましておめでとうございます

山柳塔わらやま

—— 1990・新春 ——

おねがい

私たちは、今年で創立20周年を迎えます。

本年９月頃、盛大な成人式を多彩に祝いたいと企画しています。

どうぞその節は、格別のご支援、ご鞭撻のほどをお願い申し上げます。

一　同

謹賀新年

西宮北口川柳会

（事務局）〒663 西宮市高木東町９－４　西口いわゑ方
（投句先）〒663 西宮市高木東町９－４　西口いわゑ宛

黒川	紫香	〒661 尼崎市武庫町１―47―15
吉田	笑女	〒665 宝塚市仁川高丸２―11―２
秋元	てる	〒662 西宮市名次町９－２―301
奥田	みつ子	〒663 西宮市段上町6―6―2―202
西口	いわゑ	〒663 西宮市高木東町９－４
林	はつ絵	〒663 西宮市野間町４―22―103
藤村	〆女	〒565 吹田市佐井寺4―52―7―205
丸山	よし津	〒665 宝塚市長寿が丘２－５
山片	紀雄	〒655 神戸市垂水区五色山7-12-38-363
上田	佳秋	〒659 芦屋市翠ヶ丘町19―6―308
山崎	君子	〒664 伊丹市梅ノ木４－２―11
春城	武庫坊	〒661 尼崎市武庫之荘５―25―17
春城	年代	〒661 尼崎市武庫之荘５―25―17
奥山	美智子	〒661 尼崎市上ノ島字地元３－８

例　会　毎月第２月曜日午後１時　西宮中央公民館
（阪急電鉄神戸線西宮北口下車南西５分）

川　柳　大　阪

大阪市交通局互助組合文化部川柳部

部長　平井孝始
責任者　中原比呂志
編集　高須賀金太

おめでとうございます

大坂形水

〒540 大阪市中央区糸屋町２丁目１－７
電話（06）941－8015

はびきの市民川柳会
川柳はびきの

佐野白水
榎本来
田中透吐
吉川寿美
塩満敏

他会員一同

新年おめでとうございます　1990年

岡山　川柳後楽吟社

代表　行吉照路
直原七面山
鈴木九坂
荻野鮫虎狼
花田たけ志
岩道博友
二宗吟平
井上柳五郎
河野青銅
外会員一同

賀春

わかあゆ川柳会

島根県大原郡木次町四六一

小砂白汀　鶴原文子
谷岡芳枝　森山英子
石田清泉　園山世似
岸本輝水　河原恵美子
松本はるみ　渡部悦良
藤原鈴江　小田川智重子
細木歳栄　菅田かつ子
細木志保　松本聖子
北川民子　福間博利
田中ヒデ子　渡部好栄
庄司北斗

ほか会員一同

川柳塔あおもり

〒036　弘前市元大工町五〇―五（波多野）

工藤甲吉　青森市金沢二―七―八
田中叶　北郡板柳町大田字富岡二七―四
斉藤劦　十和田市西五番町九―一八
真喜内実　弘前市蒔苗字堤田一
加藤彩人　五所川原市本町二六
小寺花峯　弘前市清原二―二―二
相馬一花　黒石市元町五一
阿部進　十和田市相坂高清水七八―二三
阿部喜久江　十和田市相坂高清水七八―二三
荒田つる　南郡浪岡町羽黒平
福士トキ　南郡浪岡町郷山前字村元
島田昭治　八戸市鮫町字林通五二
波ただお　西郡鰺ヶ沢町二―一七
肥後和歌子　弘前市宮園四―七―三
波多野五楽庵　弘前市元大工町五〇―五

新年おめでとうございます

三幸川柳教室一同

事務局　〒641 和歌山市東高松３丁目８－12
菅井智水庵

賀　春

川柳の小径・公園
西日本川柳大会

弓削川柳社

〒709-36　岡山県久米郡久米南町下弓削
ＴＥＬ（08687）８－2531（山田方）

謹賀新年

今年もよろしくおねがいします

福浦勝晴　林春栄
植山武助　高橋芳子
宮園射月芳　島崎冨志子
庄司佳生　清野こう
真崎浪速子　古野ひで
狭間希久志　原さよ子
芳地狸村　藪野けい子
三輪通彦　米本喜久子
冨田みのる　小林すみえ
岩佐ダン吉　高橋幸代

岸和田川柳会

賀正

京都塔の会

渡辺圭坊
高沢栄子
小林英子
山田葉子
都倉求芽
松川芳子
松川杜的子

明けまして
お目出度うございます

熊本川柳会

黒田緑
有働芳仙
鶴田謹爾
北川一進
高野宵草
永田俊子
大川幸子
宇野昭代
岩切康子

謹賀新春

尼崎
いくしま川柳会

例会毎月第一金曜日午後1時
サンシビック尼崎三階
（阪神尼崎駅西南三分）

尼崎
おはま川柳会

例会毎月第一、三火曜日午前10時
尼崎市尾浜二丁目五―八
尾浜公民館

明けましておめでとうございます

川柳塔社常任理事会

理事長　西尾　栞里　小路　敏

副理事長　阿萬的　塩満

橘高薫風　高杉鬼遊

黒川紫香　田中正坊

西田柳宏子　谷垣史好

野村太茂津　玉置重人

常任理事　板尾岳人　辻　白渓子

榎本吐来　西出楓楽

神谷凡九郎　春城武庫坊

河井庸佑　吐田公一

河内天笑　藤井一二三

河内月子　宮口笛生

川島諷云児　宮園射月芳

小出智子　吉岡美房

■各地句会だより

京都塔の会

都倉求芽

昭和47年、当時は私たち国鉄仲間にも、川雑支部時代からの「大鉄川柳」があって、大阪で毎月、句会を開いていました。現役はもちろん、OBの諸先輩も水客さんはじめ多数の方々がいつも出席されており、密度の高い、そして和やかな句会でした。

その頃、第二のお勤めをされていた松川杜的さんから「仕事の都合もあって句会にもなかなか行けず、毎日が淋しい。京都でもひとつ句会を作ろうやないか」と、同じ京都に住む私にもちかけられました。すぐ話が決まって、第一回の句会を2月29日、杜的さん宅の二階で始めました。

水客さん、萬的さんも遠くから駈けつけられて出席者七名、投句一名のスタートでした。表紙を萬的さんが京都タワーの画で飾ってくださいました。その時のあとがきに「瓢箪から駒が出る。大鉄川柳から京都塔の会が突然、こぼれ出ました」と書いています。句報はB6判で8ページ、手書きの薄っぺらのものでした。



人数は少なくても、それなりに内容のある句会、特徴のある句会にしよう、と企画も次々とび出し、席題と兼題の一つは毎年テーマを設定して年間シリーズとして楽しい句会を目ざし、二題吟、かくし吟、京都散歩、十二支、会員の住所に因んで、写真吟等々で、最近では、会員の柳号を借りた折り句、オリジナル記号図によるイメージ吟などがあります。雑詠欄も設け、はじめは自選句だったのを二年ほどしてから水客さんに選評をお願いし、これがまた好評で、当会の看板となって今日に至っています。

もう一つ、塔の会を象徴するものに吟行があります。第一回の48年10月の清閑寺を皮切りに、昨秋の御所・梨ノ木神社が第24回となります。回を重ねるにしたがって出席者も多くなり、楽しい行事となっています。会場の選定には、ふんい気のよい所、季節が感じられる所、交通の便の良い所と、そしていちばん大事なことは、句会場を貸してもらえるかどうか、費用などに気を使い、苦労を多いが、その分やりがいもあるのがまた実感です。

月例句会場も、長い間、杜的さんにお世話になっていたのを、府立セツルメントへ移って数年、表紙の絵も私のぎこちない絵から杜的さんの雅趣溢れた俳画になりました。随想のページも設け、ただ、句の羅列から一歩でも前進し、楽しい句報にと努力しております。

第一回から二十年近く、一度の休会もなく百号記念句集「千社札」(二十五名参加)を昭和55年に、「千社札其之弐」(三十五名参加)を十五周年記念として昭和62年に、二百回記念で「吟行特集　千社札其之参」(百一名参加)を昭和63年に発刊させていただきました。

気軽な句会、家族的な句会を目標に小さいながらもここまで育てていただいたのは、ひとえに水客、紫香両先生の力強い後押しと柳友皆さまの暖かいご協力の賜物と心からお礼申し上げます。



1人1句、原則として30句以内、各句会ごとに秀句を精選してご投稿ください。
毎月**25日**締切厳守。　担当・玉置重人

八尾市民川柳大会　飯田　悦郎報

母の梅干しふっと恋しくなる都　はつ子
古都の秋カンナの花が枯れたまま　弘　直
のびのびと充電してる都落ち　仙　吉
生涯の都を探す白い地図　律　子
絆をつなぐ女の井戸が深すぎる　英　一
売られゆく牛の涙を見た絆　雀踊子
妻の絆釣り針に似てはずれない　外　吉
牛の乳母の絆がまだ残る　幹　斉
路地裏の情は乾燥しないまま　森　子
土地を売る話仏壇目張りして　(頭)　隆
やすらぎの場よコスモス地にあふれ　千津子
生きのびた地に還る日を愛と言う　定　子
花すすき母なる川はこの先に　作二郎
それからの話へ川が満ちてくる　千　歩
私をつらぬく川よ火の匂い　紀　乃
平凡な川も流れて海になる　美　幸
冗談の言える相手が欲しい王　幸　生
王様の椅子にもきっと冬が来る　恭　子
王という視野が哀しみ食べている　繁　夫
導かれいよいよ孤独な女王蜂　晴　美
百本の矢を持っている弓がない　鬼　遊
心の中に行方知れずの矢がひとつ　楓　楽
流れ矢が当り夫婦になりました　良
天井の破魔矢三度の飯が食え　恭　太
花好きの男ですこし物足りぬ　長　生
返り咲き女の業を思わせる　てまり
三世代仕える娘に稲の花　春　子
歌垣の流れる丘の花芒　栞

南海川柳会　飯田　悦郎報

編み棒にピッチを上げる早い秋　柳　伸
急ぐのに駅のうどんが熱すぎる　重　人
散り急ぐ花のいのちを惜しまれる　公　一
構成の才能だけは別に持ち　花　仔
構成が済んで人夫へ酒が出る　覚然坊
パレードに花の構成美しい　東　雲
一致する気持があれば和に生きる　真　柳
一致する迄の苦労はふせておく　凡　子
満場一致僕は拍手をやめている　ダン吉
標準語になかなかなれぬモーニング　信　博
化粧落した嫁まあまあの顔だった　眉　水
体型も標準仲人そつがなし　甘　平
標準並みの暮し我が家にある平和　真　砂
簡単に挫折はしない決めた職　志華子
簡単に出来ると踏んでいた誤算　庸　佑
簡単にハイの言葉がすぐ出ない　勝　美
簡単に進まぬ作業のにぎり飯　悦　郎

川柳後楽　井上柳五郎報

童顔でなお善人でお人好し　玉　水
パトロンを持つ童顔に過去があり　鮫虎狼
童顔の奥でおんな策を練る　健　一
童顔もこころに鬼が同居する　金　吾
童顔の仮面の裏で爪を研ぐ　進
童顔と言われ鏡とにらめっこ　清　三
遅きに失した禄盗人の引退　義　親
銀玉が国会議事堂乱れ打ち　拓　治
焼酎に辛い運命を漬けている　たけ志
一人旅焼酎やき鳥かじりつつ　照　路
損の日も儲けの日もあり酎でやり　博　友
スランプになってライバル馬が合い　青　銅
スランプへ開き直れる日の余裕　桃　風
のほほんと生きてスランプなど知らず　浄　美
退屈なシーン微動だにしない　草　風
退屈な女がうわさ持ち歩く　美智子
退屈を予期ほどしない定退後　柳五郎
無意識に窓際族の大欠伸　哲　郎
丁重な返事へガチャと電話切れ　佐加恵
焼酎を引っかけ一言言いに行く　秋　月
焼酎に憂さを晴らしておらが春　みよ子
焼酎が庶民の顔で並ぶ棚　正　秀

川柳クラブわたの花　片上　英一報

転んだらころがりどうし老いの坂　シマ子
夫婦坂喜怒哀楽の詩を刻む　章
稲実り案山子が父の背広着る　春　子
坂の上見渡す空気みんな吸う　その
余すほど豊作なのに米価高　泰　成
食べ頃を小鳥知ってる庭の柿　道　子
実りよい田圃に案山子無表情　初　子
家族には一つ足りない柿がなり　龍　襄

渋柿も枝いっぱいに秋を受け　弘直
芋畑ほめて賜る秋深し　幸枝
病魔こえ人生実り豊かなり　久美子
坂道の千枚田にもブルドーザー　君江
石段のてっぺんに居る神ほとけ　英一
みのるもの稔りて秋の空高し　市子
天高く稔りの秋もベッドより　信一
老いの坂やっと登った七合目　楽天
街遠く上り下りのニュータウン　信江
にぎわいをくの字で登る京の坂　一雄
稔る穂に案山子の顔も苦笑い　トシエ
エンストや中古悲しい上り坂　千鶴子
自転車に弾みをつけて坂上る　みき子
出稼ぎはみのりの便りよみ返し　まさる
発車ベル置いたうどんの汁悔し　隆
稔るほど悩みがふえる休耕田　友甫
根をおろす坂の途中の石ひとつ　鬼遊

富柳会　池森子報

恋人が変心したとふて寝する　花子
へんぴなとこ変人でいる芸術家　昭水
へんぴでも我がふる里に母居ます　(田)勇
平凡に生きて自分史書きづらい　(伊)勇
世を捨ててへんぴな里に住む孤高　智久
平凡に見えて起伏のある生活　荘次
単身も平気地酒の味に慣れ　文次
平凡なくらしゆっくりものを言う　維久子
赤信号平気で渡るニューモード　花梢
菊活けて心変りを追いかけず　美房
出て行くと言われ変心する弱気　岳人
可もなく不可もなく緑側で欠伸　森子

川柳化粧櫓　植村客遊子報

コーヒーが格別美味い良い話　岳詩
ビフテキが大きすぎると不平言う　輝月
店頭で松茸よりも値段見る　大鷹
健康は至宝と思う薬漬け　サワ子
面影を偲びたい日もある仏間　三青
木ノ芽和え娘と妻と違う味　悲子
梅檀の芽だと手放し孫を誉め　鈴代
裂帛の気合い技あり面を打つ　葉香
おふくろと呼ぶ切っ掛けがつかめない　礎石
ワンカップ供えて孝行した心算　紅月
会う度に結び目一つ置いて行き　朱玉
ひぐらしがせわしく鳴いて秋知らす　美代
孫だしに動物園をひと回り　嘉姫女
月も出て鷺も舞うなり調子よく　茂章
紆余曲折女一人の泣き笑い　好花
不眠症老いてワインの味おぼえ　はる子
人肌に温めた徳利へさしむかい　遊峰
亡母の味思い出してる祭すし　永楽
何事も最善尽し運まかせ　客遊子
大学を出たとは言わず包丁研ぐ

川柳藤井寺　高田美代子報

灯を消して思いおもいの闇にいる　治子
幸運な猫で美人の膝で寝る　志洋
酷使した父の歯車軋みだす　修六
仏達救いの網を打ち返す　宗一
秋風が一人の窓辺過ぎてゆく　敦子
ペアのシャツおしゃれしてます嫁はんと　三郎
一周忌済ませおしゃれの紅をつけ　繁男
赤と黒せめて私のおしゃれです　敏
おしゃれする娘に何か起こりそう　吸江
夢だけで過す我が家は二階借り　きよし
家並みが跡切れて出会うわれもこう　伴子
でで虫は後生大事に家を負い　彩
豪邸を訪ねて犬に試される　美房
旅もよしわが家に戻ってもっとよし　与呂志
楽天家手足延ばして猫と住む　須美
長男の嫁にずしりと重い家　和美
ローンより辞令が恐いマイホーム　たかし
家中が知恵の輪ひとつ持て余す　一屯
住む人によって光りを放つ家　みのる
粥炊いて私にぬくい家がある　つや子
意外性ないから家はくつろげる　治

佳句地十選（前月号から）　波多野五楽庵　選

柿熟れて傷もわたしも旅に出る　正一
なに不足ないが名前をまだ呼ばず　白渓子
どのボタン押しても世辞の出る男　好笑
封筒の裏は男の名を借りる　正博
奥さまの垣根を秘書が越えそうで　智恵子
黙とうをして八月の暦はぐ　喜久恵
新しい母と祭りの灯にとける　礫
切札が拳の中で汗をかく　寿美
青春を燃やした妻で裏切れぬ　速水
我も母見るに忍びぬ記事に泣く　八重子

仲よく暮らせば器にこだわらぬ　和子
流れ星ふと人生を振り返り　比呂志
国境の流れはいつも騒がしい　寿美子
流れには逆らうくせのある血筋　昭子
流れ矢のささったままで深む秋　正枝
魂よ鎮まれ流灯西へ西へゆく　雅美
大観の筆が流れて富士を産む　政代
諦めた順に流れて行くんだな　美代子
笛一つ人の流れを左右する　信子

川柳東大阪　森下愛論報

くりめしを食う雑兵の安らぎよ　作二郎
雑兵も散髪をして運を待つ　孤舟
雑兵はすぐ鯉口を切りたがる　章久
雑兵の一人走ればみな走る　度
一日のけじめに上げる般若経　頂留子
手切金ポンと払ったのが女　湖風
父の座を守るけじめのある家庭　美子
他人事なればうるさく言うけじめ　柳宏子
隠された十字架がある古都の塚　元紀
清流の魚も隠れる場所を持つ　文秋
隠れたりしない女がすたるから　比沙湖
オトコ哀し女房に隠れ何をする　愛論
黙認の無理な恋愛みのる秋　喜風
ギャル気質好いた男の無理を待つ　雅士
秋夜長遠く静かに救急車　慶三
静かさが欲しくて下見に行く夫婦　滋啓
静かさを知らぬ地球になりました　凡九郎
無理にとは言えぬ反対署名ペン　隆
七光り無理を承知の尻ぬぐい　公一

尼崎尾浜川柳会　春城武庫坊報

トランプのとっても好きな置炬燵　夢之助
トランプで楽しむ家族秋夜長　義嗣
トランプの占い今日も待ちぼうけ　敏之
トランプの占いだけは吉と出る　向西
トランプの罠にかかったキューピット　十四郎
口八丁頭の蠅に気がつかず　弘治
鉢巻をするとやる気を出す頭　定人
もう呆けてますねと頭叩いとく　紫香
父の日の競輪場に父あふれ　寅之助
投句来てお変り無いと安堵する　いわお
茄子の花咲けば一つも無駄がない　六浦
マドンナのシナリオ弾みすぎている　美智子
温い風母の電話で吹いてくる　昌子
自暴自棄女が糸を引いている　歌子
箱入りの猫で骨まで取ってやり　すみ
十一月の晶闇なし葱育つ　武庫坊

岩美川柳会　羽津川公乃報

ピンボケにカメラ愛想笑いする　忠良
水深の汚泥にカメラ息こらす　嘉津江
カメラの目私の年齢を見抜いてる　美恵子
真心に報いてくれる土が好き　芳江
真心の何と重たい愛だろう　公乃
温い真心冷たいバラの棘をぬく　美代子
茶の間から笑い袋のひもが解け　民子
料亭で国の政策決めていた　單車
しみじみと心のゆとり欲しくなる　大漁
癌でないただの疲れに寝てしまう　蛍
伸びきった絆の中に居る孤独　照女

尼崎いくしま川柳会　春城　年代報

白旗を立てると視野が広くなる　園歩
旗持って幹事走ってばかりいる　紫香
無器用な男の愛に従いてゆく　栄
不器用で折りたたみ傘持ってない　武庫坊
不器用な自分史を書く太いペン　正坊
不器用な夫　幸せだけをくれ　佳秋
無器用で一つ覚えのハトポッポ　定人
サーカスの猿を無器用　笑えるか　散歩
仲人のさても戸惑うことばかり　静夢
参観日戸惑う孫に目を逸し　堯
白黒をつけて戸惑いから醒める　歌子
タラップを降りて戸惑うことばかり　天樹
戸惑うていたら西日に叱られる　美智子
生き甲斐は十指にあまる孫の数　文夫
金もくせい香りによばれて回りみち　正子
手術あと手柄のように見せまくる　みち子
華やかな鹿鳴館にある墓標　伊三郎
シャボン玉こわれて消えるまでの夢　石舟
針仕事ささえた母の座りだこ　芳子
お地蔵さんと隣り合わせにある喫茶　杜的
一度は好きになった女と飯を食い　水声
栗めしの好きなほとけに秋が来る　正一

三幸川柳教室　桜井　千秀報

切なさに今にも絵馬が駆けそうな　茜
波しぶきやがてあなたが折れてくる　桂香
ひとりだけ叫ぶと波にさらわれる　保州
テトラポットの山に雀が来て遊ぶ　智水庵
翔んでいる熟女夫は粗大ゴミ　可笑

冴えないが夫の面子保ってる　隆行
独り言夫の本音洩れてくる　芙美子
死なれては困る夫の尻たたく　親路
路線からはずれた夫ハイネ読む　朱夏
まだ把握出来ぬ部分のある夫　靖子
生真面目な夫でジョーク通じない　昭枝
石橋を叩く夫に遠い春　鉄治
三つ指で夫朝から放り出し　結実
弱気など見せぬ夫の太い眉　正秋
新聞の向う夫の聞き上手　和子
嫁がせた日から無口になる夫　(上)幸子
三くだり半出したい妻に居直られ　みね
誤字脱字真面目な妻の置手紙　(松)幸子
すぐやる気妻の良いとこ悪いとこ　千秀
妻という響きに酔うた夜もある　育子
妻の愚痴聞く補聴器は外しとく　三千子
教え子を妻に娶って甘い点　玉枝
ついて来た妻の寝顔がいとおしい　重次
主婦の座にどっぷりつかり欠伸する　かなめ

むらくも川柳会　藤井　明朗報

朝帰り言い訳とおさぬ母の勘　幸夫
つつましく恋も失恋もして老いぬ　竹乃
美しいばさつへ老いらく恋をする　林蔵
ひょっこりと恋人らしい娘を連れて　はる代
県外就職母が恋しくなる夕べ　秀子
よい癖はみんな私に似ています　一葉
人間に戻って仏の声を聞く　義良
ひと前に出ると黙ってしまう癖　福子
胸のうち開き輝く明日のうた　延子
その話三回目ですと眼が笑う　文子
又会おう手を振りながらバスの窓　武衛
晩酌へ明日の気力が湧いてくる　三津江
裏方が次の総理を作ってる　峰雪
野良守る気力で働く老いの日々　梅園
汗ふいて裏方さんの片えくぼ　幸子
バンザイでお開きになるめでたい日　正朗
あの日から心開いて嫁姑　百代
言い訳は母の笑顔に負けました　芳子
親の癖子のくせ賑やかな家族　明朗

八尾市民川柳会　飯田　悦郎報

給食の子にはエプロン大きすぎ　一風
一向にエプロン汚れないハート　英一
エプロンの妻が一番妻らしい　良伸
エプロンを姑が譲らぬ嫁の愚痴　憲太郎
エプロンにからむ子猫が春を呼ぶ　弘直
エプロンで涙をふいてくれた母　　度
文学碑観光名所に一役買う　和子
文学を肴にボトル燃えている　　章
美しい文学を読む秋の雨　美幸
柿落ちる音文学をこころざす　作二郎
文学論ぬるめの燗にまだ尽きぬ　柳伸
長い物に巻かれて自分を見うしなう　春子
長い坂よたよた駄馬はまだ登る　美津留
呉服屋の買わない客は長過ぎる　シマ子
長い目で見てくれてるのは妻ばかり　一雄
細長く茜めて老後の貨幣価値　喜風
救援を待つ山小屋に風ばかり　覚然坊
どんぐりの一つを選ぶ軽い罪　夕花
新首相押しくらまんじゅうで選ばれる　しづ子
惚れ込んで選んだ嫁にいびられる　東雲
パチプロの選んだ台はよく喋る　壮之助
市場籠何を選ぶか独り者　悦郎
根回しをしたなと思うダルマの目　重人
吉日を選んで灸を据えにゆく　三男
うかつには誘いに乗らぬ風見鶏　勝美
友達の誘いの電話で治る風邪　朝子
舞う蝶を蜜で誘った花の芯　甘平
誘われたお方私の趣味じゃない　　隆
誘う方が悪いと決めてゆずらない　頂留子
誘われて末の世までもついて行く　春堂

川柳塔唐津支部（前月分）　久保　正敏報

真夜中の化粧で店が活き返り　四郎
政治不信パチンコ玉が生む疑惑　杜竜
あんず咲く頃は見られる孫の顔　高明
霜柱踏んで急いだ事件記者　旭恒
酢の効いた嫁で姑のお気に召し　虹汀
脳院の窓から破調のクリスマス　正敏

城北川柳会　神夏磯典子報

青柿にからす一寸もふりむかず　春雄
消費税いつまでたっても押し問答　とみ子
柿くえば思い出すのは寺の鐘　輝子
柿のよう甘えて人に好かれたい　寿美礼
ひと筋の線がもつれて拗ねている　佐津乃
茜ぐも明日の晴天予約する　登美子
満ち足りて言うこともない今朝の膳　公一
本代と言えばおふくろ疑わず　満津子
愚痴を聞く袋の底は抜いておく　テルミ
終の日の空も青いと信じてる　達子
朝刊の記事が家中かき乱す　ふみ

柿一つ残して秋の遍路道　麻　黄
秋晴れが読書の意欲忘れさせ　温　子
見えすいた嘘きく柿をむきながら　静　子
手の届く柿は取ってもどれも渋　市　郎
したたかに生きる女の二十五時　純　子
平成元禄猫はねずみを忘れたり　静　歩
柿喰えど鐘も太鼓も鳴らざりき　仙吉郎
空っぽの心に挑む影法師　ただし
禁煙か長寿か秤にかけている　倫　子
寝そべれて枕返せば虫の声　ふさ子
黄変写真鳴呼青春の二等兵　新一郎
理想論掲げ下積み抜け出せず　白　峰
本棚に私を叱る本がある　典　子
悔い多き過去も六十路の彩として　きくゑ
空文にしたい私のざんげ録　史　風
いぶし銀床し栄光過ぎし日々　久留美
こおろぎよ我が町の地価知ってるか　文　子
泥沼から這い上らせてくれた本　右　近

西宮北口川柳会　松本　一郎報

娘の帰宅母の暗示にひっかかる　春　蘭
枯れた筆跡亡父の正座が見えて来る　萬　的
弁解の効かぬ指紋が一致する　三笑子
真っ直ぐな生き方通す杉木立　みつ子
墓洗い終えて見上げる飛行雲　静　子
妻の酌むお茶が不満を暗示する　諷云児
弁解が過ぎて語るに堕ちてゆく　紀　雄
式辞では決まり文句を聞かされる　美智子
身についた自信こころに花を活け　石　舟
コスモスよ決めかねている事がありどた靴の孫にすり傷癒えぬ秋　てるきよ子

暗示には弱くなってる倦怠期　園　歩
シグナルは赤神仏の暗示かも　国　公
吹き溜まる枯葉のぬくみ恋う流転　光　代
真実を一つ隠して豆を煮る　喜代治
よく消える消しゴム持っている自信　武庫坊
青い目を夢中にさせた観世流　英　子
暗示には弱いピエロですぐ踊る　正　坊
嵯峨菊の花も盛りに秋深み　圭　坊
坂道を転がるとても寒い暗示　(河)芳　子
枯れるから油をさして生きている　京　童
コーヒー一杯軽い弁解聞いている　(松)芳　子
裏返す度にたこ焼丸くなる　杜　的
仕合せに出来る自信のプロポーズ　白渓子
轆轤踏む日暮れが早い陶の里　東　角
土の道に出合う枯野があたたかい　年　代
弁解はよそうみじめになるばかり　〆　女
弁解はやめとこ月に笑われる　いわゑ
大根を洗って糠が自信あり　トミエ
自己暗示かけて舞台に一人立つ　香　子
賞はないが真面目に生きて来た自信　よし津
気前よくくれたが修理金が要り　紫　香

川柳ささやま　遠山　可住報

同じ服街で出逢った慌てよう　純　子
お隣と同じパターンで安泰で　恵　美
さりげなくお世辞が言えて敵がない　精　一
女狐の尻尾が見えぬお人好し　金之助
見てるより踊るアホーになり切って　ヒサ子
さわやかな笑顔が招く温かさ　つや子
ない袖を苦労してまで助け舟　百合子
招待をせめ客がいる床柱　とみ子

黒幕に踊らされてる軽い首　靖　子
高い木に登ると踊るお人好し　和　子
お人好しあとの仕末に流す汗　貞　子
札束が踊り先祖が眠られぬ　富　美
応援に手を振る人も数に入れ　エキオ
魔の笛に踊った果ての鉄格子　テル
運動会応援席をみな立たせ　千代子
応援はするがお金は出しません　越　山
妻の掌の中で踊っている平和　文　平
横に振る首は持たないお人好し　可　住

京都塔の会　松川　杜的報

肥え過ぎと屹度書かれているカルテ　白渓子
ラーメンの味忘れず途中下車　圭　坊
猫も舌肥えてグルメのCMに　栄
表紙にも涙の痕が有る日記　英　子
期せずしておんなじ人が載る表紙　京　童
決着をつける言葉を選っておく　諷云児
松茸の値段一応見て帰り　美　穂
野の仏三日三晩も降り続け　年　代
散らかした部屋で気楽に昼寝する　武庫坊
秋日和受話器の声に誘われる　花代子
心にもないこと言うて席を立つ　水　客
カルチャーでだんだん妻の目が肥える　芳　子
ハンカチを送ってわざわざ泣きに行く　求　芽
盃をわざわざ持って来て頼み　紫　香
瓜ざね顔の女を愛した日は遠い　礫
繃帯をわざわざ解いて訴える　百合子
冬いちご愛をもらして白い皿　美智子
思い出のアルバム表紙も虫が食い　〆　女
アンテナがわざわざお茶を飲みに来る　福　子

釣り合いをとりかねている裏表紙　葉子
小肥りで着物が似合うバーのママ　ただし
読め読めと表紙で迫る週刊誌　倫子
表紙絵が好きで買ってる月刊誌　正坊
女三人まあよう肥えてよう喋る　杜的

川柳塔とっとり　岩原喬水報

女房に見られて困る請求書　一止
請求書に追われて十二月終る　由多香
請求に女の涙添えてくる　喬水
世話やきがおって話がよく進み　粗粒
人の世話して逆さまに恨まれる　侑里
クラス会つい美女の世話したくなり　旋風
もう夢は追うまいさめる朝がある　一枝
家内には言えない夢を見てしまい　新風
容疑者の名前に親の夢が見え　呼風
逆境でしおれぬ夢の種をまく　俊路
夢のある男学歴など問わぬ　帆雀
愛してりゃ怒った顔もなお可愛い　友夫
やり場ない怒り食欲かきたてる　艶子
のみこんだ怒り悲しい咳をする　蛍
怒るよりいい点ほめて子を育て　圭一郎
裏話週刊誌には書きたてる　秀和
清潔という裏側で口合わす　砂山花
路地裏で石を抱いてる火の女　山人
論戦の裏が漸く読めてきた　林太郎
裏の裏知っているから馬鹿になる　大漁

いさり火川柳会　尾崎三代治報

土の香が好きで畑を城とする　伊都子
植物を育てて土は無口です　三代治
雑草もしっかり土であぐらかく　智恵子
浄土へも球根持って行くと決め　豊子
落し穴きれいに土が盛ってある　由多香
咲きほこる花もやがては土になる　孝人
父なる天母なる大地温み持つ　八重子
土だけを生き甲斐として耕しぬ　武士

おっぱこ川柳会　松村迷観子報

見栄張った後の始末を思案する　ひかり
新妻もジーパン姿の秋祭り　放任
すぐ曇る鏡に笑顔のせてみる　マサエ
陽は西に嘘のない日が暮れてゆく　迷香
慰めてくれる相手がそばに居る　いさむ
農繁期すぎてぽつぽつ旅に出る　明人
取り切れぬ草に根性の鍬を振り　チカエ
一秒を急ぎ別れの運不運　吟笑
道しるべ開発の名で引抜かれ　迷貫
体重計目指すところはほど遠く　伽名子
ハイハイと二つ返事の共白髪　スミエ
縁嫌うなぞの解けない娘の心　白柳子
過去の傷癒えたあなたと出会いたい　かおり
一言で人の心を掻き乱し　よしみ
カタカナ語だんだん平仮名食いに来る　迷観子

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

低い声地獄耳にはよく聞え　聖子
うかつにも子に借金をしてしまい　智重子
耳底にせせらぎがある人恋し　はるみ
人生の終止符予告なしで来る　歳栄
白萩の雫心の底に受け　民子
耳よりな話運んだ今日の風　鈴江
揺れる萩良いお返事はきっとある　恵美子
仏様萩が見事に咲きました　かつ子
創生論萩の小径は目に見えぬ　ヒデ子
萩の花可憐な素振りで待っている　好栄
玉葱の涙だったといっとくれ　北斗
耳よりな話に足をすくわれる　博利
耳よりな話と思った落し穴　世似
平安の秋萩今日も露しとど　清泉
耳垢の中に貴重な過去がある　白汀

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

ストレスが溜まり一人で旅に出る　保子
ざあますが町内会をかき回す　やえ
軒下に花のあふれる町に住む　寿々子
町内の日だまりにいて温かい　富美子
町内の地蔵へむかし話きく　亜弥
町内を情報過多でにぎわせる　ゆき
町内のうわさが一人歩きする　玲子
町内に受験の子あり灯がともる　登栄
町内のオアシス澄んだ井戸をもつ　田鶴
町内の輪の中にいて安堵する　千春
町内に医者と酒屋と葬儀屋と　正子
町内もうかれ御輿で夏がくる　八重子
藁の蛇　町内で担ぐ縄をなう　瑞枝
町内の顔役の鼻ふくれ出す　てい子
町内一巡尻尾がだんだん太くなる　荒介
町内にピアノが響き風変わる　より子
お葬式から町内に溶けてくる　千代
町内を上手に回る回覧板　恵子
町内の総理大臣ペダル漕ぐ　朗子
町内をまるまる身売りするはなし　日枝子

川柳塔唐津支部　　久保　正敏報

風情充つ風に哭いてる秋桜　　義美
寺近く暁の太鼓は天を衝く　　ふさ子
お年玉あまり値上げは出来ません　　紀一
久し振り都会に逢うて身が騒ぐ　　治幸
谷川に紅葉流るる山女跳ね　　喜久夫
年などは忘れて赤いシャツを着る　　ちよ

川柳大阪　　中原比呂志報

さりげなく男が句読点をうつ　　与呂志
真剣に生きていますかねじを巻く　　希久志
次の手を眼鏡拭きふき計算し　　亮太
羅漢像僕によく似た顔がない　　重人
朝市で素朴な人情売っていた　　金太
音楽を聞こう日曜日の広場　　笑風
第九もバッハも聞かぬ演歌好き　　鉄心
何か売る人垣もあり歩道秋　　本蔭棒
ジョギングも少し照れ屋で犬連れて　　しげお
マネキンのサイズに合わぬ更年期　　柳弘
将来の期待へ長いすねかじり　　雅巣
総選挙男売りたい人ばかり　　敏
名前売るだけの選挙にソッポ向く　　天平
マスコミも罪半分の人殺し　　美津留
雲さんは動物の絵が上手です　　一歩
助け合う小さな花が咲きみだれ　　司
博覧会近くで世界が見られます　　遊心
天博に負けじと花博力入れ　　哲流
ウォークマン周りの人は雑音に　　幸一
秋風と財布の軽さと肌寒さ　　一九
肌が合い心が合って金婚式　　喜楽
お百度を踏んで実らす契約書　　比呂志

岸和田川柳会　　植山　武助報

氏神に願いの数の鈴を振る　　希久志
一度だけの火遊びの付けのしかかる　　みのる
弁解はよそう誤解のとけるまで　　こう
長いひも頸からつるした孫財布　　喜久子
三次会財布の中味に聞いてみる　　勝晴
手伝いの善意にすがる車椅子　　通彦
手伝いに来たやら食べに来たのやら　　浪速子
一度だけ亡母に会いたい赤トンボ　　ダン吉
初孫のお風呂の世話がうれしい日　　けい子
情のあるお手伝いさんで頼られる　　ひで
さりげなく母味付けのお手伝い　　狸村
お祝いにエプロン持って来てくれる　　冨志子
一本の木に弁解が無数なり　　武助
もう一度聞きたい亡母の笑い声　　一弥
一度目は軽いジョークにまけておく　　月子
どないでもしなはれ弁解などしない　　甘平
旅支度手伝う言葉少なめに　　初太郎
お手伝いの孫段取りを狂わせる　　白光子
手伝いに行ったが泥酔して戻り　　天笑

倉吉川柳会　　渡辺　菩句報

腕相撲父と互角になる息子　　とめ子
むずかって反り返る子に思案する　　和枝
偉人伝反った姿のナポレオン　　碧水
身体こそ小さいけれど太っ腹　　千代子
美しく体を反らせ華になる　　小鹿
仲人を百組しても賞がない　　秋人
いなされてたたらを踏んで口惜しがり　　車楽
夫婦仲よくてただ今世話はない　　ひろし
世話をした子は巣立ちして鳥になり　　寿朗
小さい母巨人になって叱りつけ　　さつき
歓迎会郷土力士の名を借りる　　柳風
世話好きが過ぎて気まずい隣組　　満春
白黒を土俵の上で決めてやる　　螢
花を追い日帰り出来る旅に出る　　瑞枝
太平洋にゴマメのはぎしり聞きに行く　　康志
疼く歯をこらえて小さな義理果たす　　御前
ボトル一本で楽しい旅をしています　　とみお
指相撲冬の楽器を笑わせる　　荒介
背もたれの椅子には世話になっている　　千代
世話をする仏壇いつか世話になる　　かつみ
ベルリンの壁を見に行くツアーです　　石花菜
ねだられて五歳に負ける腕相撲　　ゆり子
日本の反りを直せとヒルズ女史　　独歩
作戦をコンピュータで練る力士　　次男
見えるもの見えないものも見ては旅　　菩句

川柳塔わかやま　　牛尾　緑良報

百点を追う少年の忘れもの　　結実
適当にお湯が溢れているくらし　　桂香
立志郷関出たら泣いたりせぬように　　信秋
一本の葦の雑談水なごむ　　好笑
輪の外で雑談に耳立てている　　光代
雑談に咲いた花ならすぐ忘れ　　アサ
遠慮ない話で顔の皺のばす　　忠
適当なところで面を付け替える　　栄美子
適当に愛を織り込みまだ未完　　寿子
適当に口裏合わす自己嫌悪　　紀久子
税務署は適当に泣けと妻をやり　　忠雄

適当にやっております好きな酒　天彦
適当に息抜きながら生きてゆく　登志代
君に逢う弾みをつけて門を出る　太茂津
反骨の影引きずって父出番　千寿子
時折に名案も出る年の功　守
うっかりと出した言葉を拾われる　正博
故郷を出た日の涙忘れない　白光子
花蕾色が出て来て愛される　公子
家を出るまでに疲れる旅カバン　英子
点数にこだわりのない母の愛　輝子
欠点をあばけば脆くなる絆　武雄
欠点を夫婦小さい手で囲み　豊太
弱点が同じでいつも庇い合う　三男
百点といかぬが妻と恙なく　武治
句読点打ちたい時もある暮らし　照子
点検の粗雑さ事故を増幅し　瑞穂
一点に絞ると真相見えて来る　信子
点打ってさては進まぬ次の章　克子
覚悟して打つ点があり手を洗う　緑良

高槻川柳サークル卯の花　河瀬芳子報

記念写真目立つ気があり前に出る　春風
目立つヤジとばし試合に負けている　スミ子
下手な漫才衣装ばかりが目立ちすぎ　のり子
しんがりの女が目立つ縄ばしご　勝一
目立とうとする気はないが三枚目　暢子
一歩距離置いて夫を目立たせる　百合子
議事堂の腕力沙汰は許せない　栄
腕力の陰に親父の顔がある　京童
腕力を美形に変えるボディービル　行平
腕力の競技に妻が勝ってきた　冬葉
熱血の教師が振う愛の鞭　圭坊
金太郎の話をしない平和主義　鬼遊
過ちを月夜の蟹が知っていた　和友
ちょっとした過ちだった名刺入れ　しげお
過ちを許した父も老いている　英子
過ちをあっさり許す裏がある　散歩
電話口ごめんと言えぬ親ゆずり　房子
ふる里のムードにわいた秋祭り　〆女
ムードには弱い財布だから困る　白渓子
ほんわかムード石焼芋に夜が更ける　静江
あきらめのムードに溺れないように　美智子
ムードには弱い男のペンネーム　正坊
ムード音楽妻がきれいに見えてくる　よ志子
夢二の絵のムードで女川を見る　萬的
秋のムードでローランサンの黒を着る　(河)芳子
愛のムードでお好み焼を裏返す　礫
巨人でもよい近鉄でもよいかたつむり　杜的
ときどきは唄も聞かせる渡し舟　紫香
花道で人間臭くなった鬼　諷云児
膝小僧と笑いながらの山歩き　栄子
リトグラフの黒い乳房も安らぎか　作二郎
同居する唯それだけの親孝行　(松)芳子

駒つなぎ川柳会　里　小路報

床ずれの痛さを覗く窓の月　章
米びつを覗いた過去を笑えない　勝美
軽妙に誘い断る柳腰　柳右子
天国へ軽い気持で現代っ子　悟郎
軽い気で受けた経理に四苦八苦　頂留子
崩しようのない顔だから忘れない　文秋
貫禄の違いへ膝を崩せない　柳宏子
点すのも消すのもひとり彼岸花　冬葉
謎解けて夫婦に戻る愛点す　月子
心から非行防止に点す愛　正好
気にもせず馬鹿を毎日つづけてる　凡九郎
マンネリの毎日叱るいな光り　度
カビ生えた話で毎日責められる　恒明
或る出会いおんなの胸に灯が点る　国公
子に継がせ身軽になった夫婦旅　覚然坊
窓から覗くとまっ暗がりの海である　白兎
針の穴覗くと亡母が泣いていた　甘平
世渡りへ軽い嘘なら僕もつく　萬的
軽装で来たのを山に叱られる　笛生
焼香の順を崩すともめてくる　美幸
残照を浴びて崩れる遊女の墓　作二郎
体型の崩れが何さ生きてやる　比沙湖
点る日があるだろ歩き続けます　重人
一本の燐寸を点す軽い飢え　英一
ネオン点く頃にぼちぼち虫が出る　金太
毎日が平凡であるありがたさ　庸佑
一人居で毎日誰か待っている　凡子
イメージで毎日眼鏡替えてます　東雲
相好を崩すと僕の顔になる　天笑
まっすぐに生きて毎日うまいめし　雀踊子

翠洋会　中西兼治郎報

仏壇のお花枯らした旅五日　兼治郎
あぶない橋渡りたくなり株価見る　絹子
今日の鬱流す湯舟を溢れさす　凡子
故里の橋は今だに草が生え　みよ子
どうしても渡れなかった丸木橋　真
粘葉舞う別離で舞台幕となる　正雄

枯れ枝に花二つ三つ狂い咲き　すすむ
君の名も遠くなりけり数寄屋橋　英一
頼まれて橋を渡って猫捨てに　東雲
瀬戸の架け橋よせてもらえぬ離れ島　恭昌
道行きに橋等いらぬ舟でこぐ　為子
予算切れ村に橋げただけつくり　さと美
ひょいと渓見たばっかりに揺れる橋　良江
長いよい橋だが利害からみ合い　綾子
優しかった姑にやさしく紙おしめ　みつ子
枝ぶりのよさを表わす枯木立　光子
鼻うたも出るご機嫌の風呂帰り　登志実
まんざいがまじめくさって戎橋　いつを
しあわせに目を閉じている風呂の首　鬼遊

堺川柳会　河内　月子報

車座の回りを歩く鳩の群　東雲
手で涙拭いて別れの曲を弾く　一二三
脇役に徹し切ってる芸の虫　頂留子
古稀若くワインレッドのベレー帽　柳宏子
ロボットにワイン飲ませて狂わせる　真柳
一滴もワイン飲めずに口説いてる　狸村
割り切って過疎で夢見る女です　芳水
脇役の芸にもたれて初舞台　かりん
秋の夜男やもめが卵割る　文
割り切って妻は歩幅を合わせてる　紀美女
割勘に時間のかかる消費税　星子
にぎりめし食うて詩人になる晩秋　岳人
別れ話する度条件ふえてゆき　れい
割れそうな二人と暮らす夫婦箸　森子
別れ際枯葉が肩に落ちました　小鹿
出すぎないようにしている山椒の実　泰子

腹割って話そう君が好きだから　射月芳
子沢山割り算ばかりして暮らし　天笑
確実に別れは来ます秋桜　小雪
脇役が光って来たぞ喜劇だな　月子
二人だけ別れを知っている噂　与呂志
脇役がうまいコーヒー飲んでいる　素灯

川柳塔まつえ　恒松　叮紅報

粛然と秋を見送る木守柿　静恵
究極の威厳を守る木守柿　日出子
過疎の村ひとり気をはく木守柿　登志子
木守柿人を信じて木に残る　昭二
夕焼けと話したりない木守柿　小鹿
夕映えと夢売りに来た木守柿　たつみ
藁屋根がやっぱし似合う木守柿　友子
木守柿秋の構図に入れておく　秀子
妻の描いた輪から抜ければ寒い風　竹雪
女の輪出来ると男つかれる　毅
輪の中でいつもおもろい事をする　きみえ
傷口を包んでくれる家族の輪　雄々
煙草の輪私の無策を笑ってる　寿美子
丸い輪が書けぬ魂捨ててから　文子
かごめの輪抜けて気ままな子が一人　房子
輪を出ると変った風が吹いていた　久枝
マンションに祖母の部屋だけある障子　一進
日曜の目覚め障子のまぶしすぎ　清志
荒寺の障子鳴らして野分吹く　代仕男
不倫かな何故か障子が閉めてある　米子
向かいの家の障子の影は誰だろう　操子
幸せと思う老いての夜なべする　淑南
針錆びて母の夜なべも忘れられ　多賀子

あれこれと夜なべにしよう溜めておく　静江
夜なべした手だな少うし荒れている　博子
段々田守っています夜なべの灯　与根一
七五三近頃はやる貸衣装　長三
七五三男ばかりを渓まれ　舞吉
七五三商業ベースにのせられる　鶴丸
七五三みんな良い子に育つ顔　叮紅

南海川柳会　飯田　悦郎報

喜寿を生き老いの歩幅に恐い道　勝美
此の道を歩き続ける訳がある　重人
道一つへだてて人情の違う町　柳宏子
信仰の心捧げる道を選る　喜風
打ち開けた道がひらける青い空　東雲
反対もあって議会が盛り上がり　しんじ
反対をするから欲しくなる毛皮　柳伸
悪びれぬ反論敵もする拍手　覚然坊
省略をしつつ終りにするドラマ　凡子
布施の額省略のない経を読む　甘平
省略の言葉の端にある情け　悦郎
今日生きる企業がひしめくラッシュどき　山久
ひばりさん企業戦士の胸に住み　しづ子
名儀変更企業もイメージチェンジする　花仔
買収へ日本の企業世界舞う　信博
稲よりも企業に田圃あこがれる　正好
地球破壊へ時計を進めている企業　度
初参加整形美女と気付かれず　美津留
参加してだんだんふくれる踊りの輪　真砂
万葉の旅参加する柿の秋　志華子
あいつが参加すると揉め出す酒の席　公一
参加して嫌な話を聞かされる　庸佑

南大阪川柳会　中川　滋雀報

そろばん珠一つ掛引き譲らない　柳宏子
引き返す勇気を貰う地平線　滋雀
ここで引いたら姑の立場がないと言う　冬葉
成功をさせて私は引くつもり　真柳
引き際の何時も哀しい寅次郎　和子
年金のくらし引き算ばかりする　勝美
引き金をまかす男がみつからぬ　千楠
引き止める言葉が欲しい靴すべり　トミ子
差引きが合わぬ本家のお付き合い　清水
くじ引きをする手に上手下手はない　岩信
実入りより義理がからんでいる仕事　庸佑
よっぽとの実入りおごったるおごったる　恒明
実入りなど問題でないボランティア　智子
実入りよい国へ難民船が着き　文秋
実入りさえ良ければ容姿目をつむる　度
実入りよい分だけきつい棒グラフ　頂留子
芋のつる女に戦後ありあまる　作二郎
ほかほかの芋がコロコロよく笑う　重人
戦争の話が好きな芋のつる　柳伸
芋の葉の露ころころと月の宿　善信
焼芋屋匂い残して路地を抜け　覚然坊
店頭のお芋が私を呼びとめた　三恵子
利にさとい男で心の飢がある　雀踊子
一円の利が笹舟に重すぎる　藤子
たまに利を捨てて無欲の変化球　章久
先取りの利子で飲んでる縄のれん　新造
十人いれば十の正論持っている　楓楽
噂いろいろ時には傷のつくことも　寿美
いろいろの戦火をくぐりぬけた傷　憲太郎
いろいろというが責任ない意見　公一

打吹川柳会　奥谷　弘朗報

滝しぶき心を洗う話する　杜的
ライバルの心と別な言葉聞く　雄々
良心の近くで鬼が囁いた　ひさ子
褒めすぎて心の裏をのぞかれる　康子
コスモスが咲くとやさしくなる心　典子
微笑みの心わすれず鶴を折る　日出子
病んでから心の秋をやっと知る　節子
いい話だけを心に縫いつける　紫映
秋の日にやさしい心あたためる　寿美子
ほんとうの愛は心の隅にある　蛍
流される葦は心に言い聞かせ　美っ千
掌を合わす先祖と心つなきたく　妻子
人と成る心に釘を打ちつづけ　よし江
やっと心が折れて持ち出す裁ち鋏　紫映
心とは裏はらひどいことを言う　獏沓
大鯛が心ばかりと届けられ　節枝
心音は医者だけ聞いて元気です　喬水
添寝する母へ安心して眠り　早苗
乱筆を恥じず心のありったけ　弘朗

聴障川柳　稲田　豊作報

孫二歳家のピエロで笑わせる　豊作
高々と孫さし上げて初笑い　柳香
モナリザのほほ笑み少し目が流れ　真女
うれしい日鏡を覗き笑うてみ　文古
無口には無口の友が来て笑い　和江
耳しいて笑い少なき二十年　行江
臨終にはニッコリ笑いゆきましょう　珍妙人
足広げ字が笑ってる踊ってる　みつる
川柳でいつも先生に笑われる　健太郎
疲れても帰宅迎える子の笑顔　美乃留
片方のエクボが消えた笑い過き　八恵子
強がりの私を笑う影法師　三香
病気勝ちな妻へお粥の水加減　珍顔
内輪もめ病気が縁で仲直り　たみ
病床で見上げるナースまぶし過ぎ　進一
正月もお盆も暮れも病むベッド　一眺

川柳たけはら　森井　菁居報

めをつむったらトマトといちごのいろがみえる　保裕介
コスモスがゆらゆらゆれてねむくなる　小二歩美
この靴をはいて帰れぬかも知れぬ　淑子
純白のカップルやよし秋の天　蘭幸
五十坂充電が要る音がする　菁居
疑いを抱けばみじめになるばかり　静水
手鏡よ内緒話にほくそ笑み　喜久恵
夕焼けを眺めて今日をしめくくり　浪子
台風が一瞬秋を連れてくる　ヤスエ
見せるため隠す所は隠してる　俊夫
今日ひと日生きる証の鍬を持つ　麻代
残り火が心の奥で風を待つ　喜美子
酸性雨自分で蒔いた種に泣き　勲
秋の日を大師に惹かれ山歩く　ふさ枝
陽の匂いおしいただいてシャツたたむ　栄恵
留守をする灯りを一つ置いて行く　愛子
七十半ば男脱皮が果たせない　清水
遊びたい小犬に重い鎖かな　博子
お父さんの掌をしっかりと古稀の坂　房子
おもいきりゆっくり歩く美術館　一枝

亡母の里秋の味覚で溢れそう　節夫
ごきげんな日と知っているフライパン　比呂子
彼岸花続く孤独な日が続く　笑子
悟ってしまえば空しい風ばかり　康子
タオルならまだ雑巾にでもなれる　一路
ブラームスに埋れて秋の夢を見る　伸子
ひぐらしやご先祖も去に孫も去に　静風
手間賃を値切るとどこか手を抜かれ　新造
塔暮れて酒徒のねぐらの貧しけり　観杏
悪者はかあさんだけにしておこう　千代美

川柳泉尾　吉川寿美報

読むだけと置いていかれた宗教誌　淑子
年だけは無駄に取らない心読む　シマ子
読むだけで足りず私書きますわ　美津子
風立って本の重さが背を叩く　美子
読み返すほどに味ます一行詩　トミ子
新体操顔と脚でも競い合い　義一
迷惑な地球の体操大地震　はつ子
恙なき今日を日記に書いて寝る　白水
一日のプラン寝床で考える　文子
寝込まれて苦労を知った匙加減　シメ子
仏像は寝姿さえもありがたい　功子
大の字でサラの畳の香り浴び　敏
握りこぶし宥めた夜が寝つかれぬ　美代子
こおろぎに都会の秋を見つけたり　良子
秋夜長眠るに惜しい虫の声　みつ子
ときめきの余韻が残る秋の風　途子
髪形を変えて女の秋にする　敦子
秋の冷え離れて暮す子を偲ぶ　三千代
淋しさを秋のせいにしたくない　克行
秋の蝶愛しい人をさがさねば　弘子
逆らわずカラスは白い事にする　あさこ
少しだけ咲くから捨てる気になれず　靖子
空の旅夫がくれたプレゼント　まち子
一日一日化粧してます秋の山　昭子
追い風に帆を寝かさせてひと休み　マリ子
無口だが酒癖幹事マークする　きよ子
切腹をしたこともなく真珠婚　満洲子
公園のベンチに誘った舞い落ち葉　伴子
しみじみと人恋しいと思う秋　洋子
花博で世界の花が手をつなぐ　美南子

豊中もくせい川柳会　田中正坊報

横文字の商品名が多すぎる　登志実
寂しさに終章の文よみふける　富子
教科書に親孝行の文字がない　楠曠
名文が心にしみて柿甘し　㊦英子
温泉で男の裏を見るガラス　明光
軽い嘘ワイングラスに透けてくる　よし子
水割りのグラスの底にある本音　武庫坊
こんにちは赤ちゃんママとガラス越し　石舟
ステンドグラス朝の祈りが満ちてくる　紫香
ガラス窓に冬を見つけた骨董屋　萬的
小春日の出窓ガラスのシクラメン　慶子
雑草がすくすく育った無人駅　白渓子
すくすくと育つ少女のトウシューズ　きく子
すくすくと髪も背丈も伸ばした娘　明吉
すくすくと来た人生も曲り角　登代子
すくすくと舞妓はんまでLサイズ　㈱英子
億のつく空地すくすくキリン草　杜的
七五三　三男坊でございます　博史
ひとりごと言って眺める菊の出来　福一
蟹　牡蠣　河豚美味い季節の鍋料理　圭坊
結局は無難を選ぶ試着室　正坊
今日生きるための幸せにじむ汗　山久
定年や言うのにせかせか歩く癖　露児
紅葉へ妻には妻にある予定　とく子
行きずりの犬の傷口見ていたり　つえ子

サークル樟欅（前月分）　新開千代女報

指さしてねだる幼児に母まいる　三四子
喧嘩した子の言い分も聞いてやり　美子
天職に命がけなりする喧嘩　智恵子
弟はいつも本気で立ち向う　雅子
淋しくばこの指止まれ赤トンボ　美緒
強そうな人だな闘志湧いてくる　泰子
夫婦喧嘩ニヤニヤしながら聞いている　千代女

サークル樟欅　大沢三四子報

嬉し泣きのハンカチなら持っている　美緒
逢いたいな海の彼方へ行った人　千代女
あどけない遺児の笑顔にもらい泣き　美子
好き嫌い寄せてくる波返す波　泰子
一瞬の殺意に海が荒れてくる　雅子
海の青見ずに終った年も暮れ　三四子
泣きどころ突ついて暮れる倦怠期　薫風
蜜柑山鬱金浄土の中に立ち

▼訂　正　十二月号の「川柳塔」欄（6P上段）林荒介氏の一句目の「…塾れる」は、「**熟れる**」の誤植でしたので訂正します。

1月各地句会案内

	日/時および題	会場と投句先
堺川柳会	7日(日)午後1時から 朝・当たる・憧れ・集まる	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2−9−2 河内天笑
西宮北口川柳会	8日(月)午後1時から 手・宇宙・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9−4 西口いわを 句会費 500円 投句料 62円切手4枚
八尾市民川柳会	11日(木)午後6時から 乾杯・石段・馬・冴える	八尾市立労働会館(山本)近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2−141 飯田悦郎
尼崎いくしま	12日(金)午後1時から 輝く・境内・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 600円 投句料 62円切手3枚
川柳塔まつえ	13日(土)午後1時半から 賽コロ・輝く・凧	松江市和多見町 慈雲寺番神堂 〒690 松江市雑賀町1686 恒松叮紅
川柳塔わかやま	14日(日)午後1時から 成る・仲よし・鍋	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町14 野村太茂津
高槻川柳サークル卯の花	18日(木)午前10時から 資産・新調・祝儀・自由吟	高槻市民会館306号室 阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市富田町1−7−7−905 福盛京童 句会費 500円 投句料 62円切手3枚 **各題2句**
富柳会	18日(木)午後1時から 掘る・方角・ほとぼり	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4−1 池 森子
南大阪川柳会	19日(金)午後6時から 益・計・誓・点	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1−5−2 金井文秋 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
川柳ねやがわ	21日(日)午前11時から 一番・舞う・ゆとり・相撲吟	京阪寝屋川市駅からバス 泰公民館 〒572 寝屋川市春日町6−9 高田博泉 句会費 1,000円 投句料 62円切手3枚
もくせい川柳会	22日(月)午後1時から 箱・JR・どきどき・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5−801 田中正坊
駒つなぎ川柳会	22日(月)午後6時から ホープ・運・おしゃれ・好評	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸
南海川柳会	26日(金)午後6時から 十日戎・汁粉・帰省・寒波	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15−18 寺井東雲
川柳東大阪	27日(土)午後6時から 真面目・姿・さすが・道	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5−6−23 桑原喜風 句会費 500円 投句料 62円切手3枚

★特に記載がない場合 句会費 500円、投句料 310円 (62円切手5枚)、各題3句以内

原稿送り先 (締切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒597 貝塚市地蔵堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

編集後記

☆明けましておめでとうございます。新しい年を迎えると、払たちはまずおめでとうの会ですね。遠方の方をも交じえ、川柳のことは二の次にして楽しく話し合え、本当の意味での肌と肌のふれ合いを楽しむのは、毎年のことながら楽しいものですね。

☆お正月と言えば、もう何年も前のことになりますがNHKが企画された「よめや歌えや川柳天国」のことを思い出します。いろいろと批判の声も聞かれましたが、川柳の社会化のためにはありがたかった企画だったので、今年こそは川柳を大きくPRできる企画を立て、川柳界を飛躍させたいと思いますね。

☆先日、淡路島洲本の病院長島太郎先生の文学碑の森を訪ねてきました。文学碑の森は四か所に分かれていますが、病院のすぐ裏の第二文学碑の森だけでも二七〇基を越える有様で、その中に私たちの先生である路郎師の「酒とろりとろり大空の心かも」と生々庵先生の「浮草は浮草なりの花が咲き」が背中合せに並んでいて、その筆蹟にも先生方の風貌がしのばれ、暖かい晩秋の陽差しの中に立っていました。

☆ここには以前、森中恵美子さんも訪れてお礼の葉書を出された文字が拡大されて、立派な句碑になっていました。その他、田辺聖子さんやフランキー堺、桂枝雀、桂三枝さんらの筆蹟にも触れ、微笑ましい一日を過ごしました。島先生の温顔にも接し、再度、川柳塔社のみなさんとお訪ねすることを約束して帰って来ました。（萬）

▼一年三百六十五日の甫めという新年である。今さらというほどに何の感懐もない。生きてゆく活力でもある感動が年とともに少なくなって来た。それは歳だとも思うが、平和という無風状態だからでもある。

▼一方、ハンガリー、ポーランド、東ドイツ、ブルガリア、チェコスロバキアと東欧諸国の変革はいちじるしい。どの国にも国民の活力がみなぎっている。何だか戦争映画を観ている茶の間のようで、消費税もとつくに陣取り合戦くらいの感覚となり、もう一つ熱が入らない。結構というより情けない。馬鹿といわれても、気違いと思われてもいい。金槌で議事堂を壊している、そんな初夢を見たい。

▼「この頃、電話料が多いやないの。あんたが長電話するからや」「ボク、電話することなんかないよ。ほとんど友だちからの電話やで。それ、消費税のせいと違うのか」「何ぼ消費税やいうたかて、電話料より高いはずがないやないの」。

▼新しい誌友の方から電話があった。雑誌を受け取ったお礼の挨拶と、八十歳になって川柳と出合った喜びだった。すこし聞きとりにくいが、受話器をしっかり耳に当てると、相手の息遣いまで伝わって来る。「近頃、急に電話料が多いやないの」「ボクやないよ、おじいちゃんと違うか」。余生に出合った趣味をおじいちゃんから取らないでください。（き）

★中国では古来、十干十二支の組合せの六十の周期で年を数えた。十干とは、甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸、十二支とは子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥。そして今年は、庚午（かのえうま）の年にあたる。六十年前の庚午と言えば一九三〇（昭和五）年だが、この年にはロンドン海軍軍縮会議をめぐって統帥権干犯問題が起こり、十一月に時の浜口雄幸首相が狙撃されて重傷を負うている。子ども心にも、きたるべき嵐を予感させる年だったが、総選挙も予定される今年は、さてどんな年になるやら。

★昨年は何かと多忙で、あまり旅に出られなかったが、それでも外国もふくめて一泊以上の旅行を八回、行なっている。松江・鳥取・米子と山陰地方が多く、川柳塔きやらぼくの忘年句会で打止めとなった。二日間とも雲一つない快晴で、異常なほどの暖かさ、接した人たちもまた温かだった。各地のみなさん、今年もまたお逢いしましょう。

★一月号から「各地句会だより」を復活し、二月号から「句評リレー」を再開することとした。順次、寄稿を依頼することとなるが、このほか、ずいそうの投稿や編集についてのご意見・アイデアなどをどしどし編集部あてにお寄せいただきたい。同人・誌友とともに歩む『川柳塔』をめざしたいと思う。（正）

本社1月句会

日時　1月8日（月）午後6時
会場　メンズファッションセンター3階
中央区内本町1―1　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（2番出口）交差点西南角
☆短冊交換会（1人3点以内）
☆平成元年月間賞杯授与と全出席者表彰
☆平成元年度愛染帖賞・茴香の花賞表彰
おはなし　橘高薫風
兼題「開く」　藤井一三選
「遠い」　吉岡美房選
「評判」　西田柳宏子選
「夢」　西尾栞選
席題2題　当日発表　各題2句以内厳守
会費　五百円　投句料　三一〇円（62円切手5枚）

本社2月句会　7日（水）

兼題　「食べる」「水道」
「互い」「粒」

作品募集

3月号発表（1月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
銀河系（3句）河内天笑選
茴香の花（3句）八木千代選
課題吟（3句）「緑」「耳」「入る」
河内月子選　天正千梢選　吉川寿美選
初歩教室「微笑」（3句）辻白渓子担当

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、その他はどなたでも、投句できます。茴香の花欄は女性。

4月号課題吟「真」「押す」「花まつり」

夜市川柳募集

課題「職」　高杉鬼遊選
ハガキに3句　1月31日締切
〒593 堺市堀上緑町2―9―2
河内天笑方　堺川柳会

NHK川柳作品募集

課題「味」　橘高薫風選
ハガキに3句　1月10日締切
投句先　大阪市中央区馬場町3―43
NHK大阪放送局
「ラジオセンター」川柳係
発表　1月28日（日）ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題「島」　橘高薫風選
ハガキに3句　1月15日締切
投句先
〒540 大阪市中央区谷町2丁目2―20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送　川柳係

定価　六百円（送料56円）
平成元年十二月二十五日印刷
平成二年一月一日発行
編集兼発行人　西尾厳
印刷所　藤原童心社
〒545
大阪市阿倍野区三明町一―一〇―一六
ウェムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六九一四番
振替口座大阪8―三三六八番

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成元年十二月二十五日　印刷
平成二年一月一日発行（毎月一日発行）
定価　六百円（送料　五十六円）

KIRIN
21世紀へ乾杯

本格派。
旨さの辛口。

アルコール度数高め
キリッとしまるドライ。



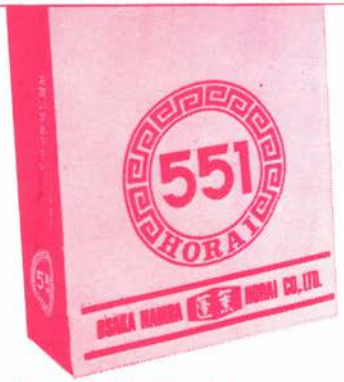
キリンビール株式会社

キリンドライ

標準的小売価格は普通のビールと同じです。未成年者の飲酒は法律で禁じられています。

ボリュームたっぷり　スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子





なんば戎橋筋本店
その他有名百貨店でどうぞ

551
HORAI

ほうらい
蓬莱
TEL641-0551